細音啓

Illustration ふゆの春秋

Kei Sazane

Haruaki Fuyuno

世界の終わりの世界録 アンコール 3

Rh/Nel Ar, KyelS ele kiss I-Cord

Resflaze, The Goddess of Seraphim

熾天の女神

MF文庫 J

終わりの世界録（アンコール）

熾天の女神

3

Rh/ Nel Ar,
KyelS ele kiss I-Corn.

Resflaze ,The Goddess of Seraphim

大天使フィア
レンの成長を見守る大天使。
世界を救った
伝説の三大姫の一人。

竜姫キリシェ
伝説の三大姫の
一人にして
英勇の仲間だった
竜姫。

先代魔王エリーゼ
かつての冥界の支配者。
転生して今は
10歳時の姿に。

偽英勇レン
伝説の英勇エルラインに
見た目だけそっくりな少年。

「今は……あなたのことが、
別の意味で気になってしまいそうです……」

偽英勇と呼ばれた少年。
その少年が、自らに生涯の誓いを
課した瞬間だった。
「強くなるさ。
……これ以上、守ってもらう
立場でいたくない」

MF文庫J

世界の終わりの世界録（アンコール）

3：熾天の女神

細音 啓

口絵・本文イラスト：ふゆの春秋

Contents

Prologue

『残響』

Record.1

『次なる秘境へ』

Record.2

『天界』

Record.3

『黒の思惑、天の法印』

Record.4

『聖女──精霊の震える都にて』

Record.5

『波の将魔』

Record.6

『今ここに精霊と誓う』

Interval.

『覇都の陰』

Epilogue

『導かれし世界』

CHARACTER
キャラクター

―― 旅団：「再来の騎士」構成メンバー ――

◉レン Ren

「偽英勇」と呼ばれる少年。キリシェに誘われ「世界録」を探しに旅立つ

◉キリシェ Kyelse

３００年ぶりに封印から目覚めた伝説の竜姫。エルラインたちと共に世界を救った。

◉フィア Fear

天界最強と謳われる大天使で、伝説の三大姫の一人。

◉エリーゼ Elise

冥界の支配者だった先代魔王その人。今は転生によって10歳児相当の姿に。

STORY
ストーリー

英勇（えいゆう）エルラインが遺した至宝「世界録（アンコール）」の在り処を世界中の国や旅団（パーティ）が探し求める世界録大争奪時代――英勇そっくりの容姿から「偽英勇」とバカにされる少年レンは、かつて世界を救った伝説の三大姫（竜姫キリシェ、大天使フィア、先代魔王エリーゼ）と共に世界録を探しに旅立つ。炎の将魔アシェンディアを倒した旅団（パーティ）「再来の騎士」として、一躍世界中に知れ渡ったレンたちが向かったのは、竜の棲む秘境リ・インファリエル。道中で土の始原精霊ノームや「カナン巡礼聖教船」との邂逅を経てたどり着いた秘境。そこで待ち構えていたキリシェの妹である竜帝カルラとの激闘を経て、レンたちは「世界録」の在り処を推し当てるのだった。

KEYWORD
用語

【英勇（えいゆう）】

かつて歴史上で剣帝エルラインのみに与えられた世界を救った者の称号。世界録を見つけだした者にその2代目の栄誉を与えられると国家間で決められている。

【世界録（アンコール）】

伝説の英勇エルラインが遺した至宝。世界の終焉と再来の秘密が記された手記。手にした者が世界の覇権を握ると言われ、世界中の国家や旅団（パーティ）がその在処を求めている。

【旅団（パーティ）】

この世のどこかにある世界録を探すことを主目的に結成された、武装した旅行者の一団。その役割は財宝の探索や害獣の討伐、都市の警備など多岐にわたり、「王立七十二階位特務騎士団」など国家公認となっている集団も存在する。

【剣帝エルライン】

かつて竜姫と大天使と魔王を引きつれて世界を救った伝説の剣士。世界滅亡の危機である「終焉戦争」を鎮め、歴史上ただ一人「英勇」の称号を持つ。26歳で没するまでに世界中を旅し、最後に「世界録」を世に託した。

【旅団の構成技能（タイプ）】

[騎士（マスター）]剣や斧といった武装を使用。常に近接戦闘を求められるがゆえに危険（リスク）高く、卓越した技能（タイプ）と冷静な判断が求められ、チームの「主力（マスター）」とされる。

[法術士（アリア）]悪魔の用いる呪術・攻撃用法術を、複雑な儀式により人間の身で再現する。

[精霊使い（スピリット）]精霊の力を宿した精霊具を利用して法術を使用する。

[武闘者（フルタイプ）]防御法術と肉体活性を併用したうえで、自らの肉体と闘技のみで敵を討つ近接特化戦闘員。武器や鎧の強度に依存しないという強みをもつ反面、非常に多くの素養と修練を必要とすることから「全能（フルタイプ）」と称される。

[結界士（エンチャンター）]隠蔽、封印、遮断、加護など天使の得意とする法術を使役する。

[療法士（ヒーラー）]肉体活性や蘇生法術のほか、薬学、医学の知識も求められる技能（タイプ）。

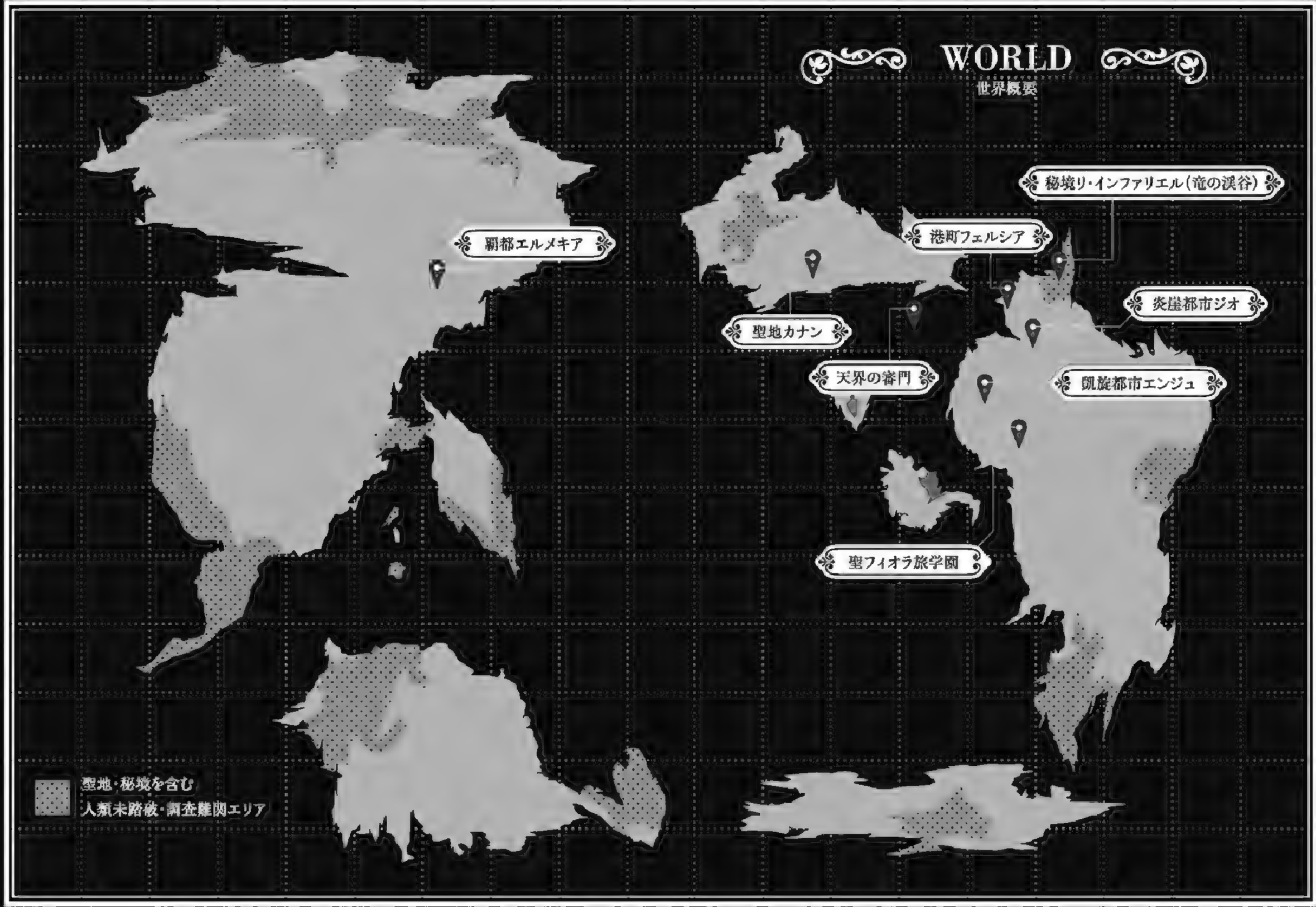
[狩人（ハンター）]害獣に関する様々な知識を活かして狩猟する知識系戦闘員。遠距離からの射撃特化で旅団（パーティ）の戦闘を後方から支援する。

[探索士（シーフ）]旅団（パーティ）の頭脳担当で、分野としては考古学者に近い。過去の古代遺跡の調査情報をもとに、そこに仕掛けられた罠や隠し通路を探知する技術が求められる。

“――世界録を発見した者に、歴史上二人目となる『英勇』の称号を授与する”

世界連合協議会　議事録より

WORLD
世界概要


秘境リ・インファリエル（竜の渓谷）
覇都エルメキア
港町フェルシア
炎崖都市ジオ
聖地カナン
天界の審門
飄旋都市エンジュ
聖フィオラ旅学園
聖地・秘境を含む
人類未踏破・調査難関エリア

白き大地。

かつて深海の底であった場所。それが三百年前、大規模な地殻変動によって海底が隆起し、新たな大地が誕生した。

白砂に見えるものも、その正体は千々に砕けた珊瑚の欠片。

――頭上には、雷光うずまく夜天。

ぶ厚い黒雲におおわれた天上は、猛り狂う雷の輝きと轟音に満ちていた。

空の咆吼。

今にも落雷を予感させる稲光と、轟き。

そんな荒れくるう天の下、眩しささえ感じさせる稲妻の光に照らされて。

「……去ったか」

たった一人、その大地の上に立つのは褐色の悪魔だった。

背丈は、ちょうど十代中頃の少年程度だろう。

肩にかかるほどの濃緑色の髪に、赤みを帯びた双眸。その顔だちは奇妙なほど中性的で、目に映る角度によっては可憐とも凛々しいとも思わせる造形。

だがそんな容姿とは裏腹に、その全身から放出されるのは高位悪魔特有の禍々しい障気。

「逃げたか。それとも何か場を離れる理由があったのか？」

亀裂の入った地面を見つめ、悪魔が自らに問いかけるように口にする。

白の岩盤に穿たれたいくつもの破壊痕。つい先まで、この悪魔と『ある存在』とが繰り広げていた激戦。その戦闘の余波が刻んだ大地の傷痕だ。

――相手は、精霊に似た正体不明の発光体。

しかし戦闘の途中でありながら、ソレはまるで陽炎のように消滅した。

「忌々しい。決着を待たずして立ち去るとは。久々の昂揚が興ざめだ」

独り言に混じる嘆息。

その声音も、思春期前の少年のような美しきボーイソプラノ。少年か、それとも少女か。間近で観察してもすぐには答えが出せない。そんな中性的な雰囲気の悪魔。

そんななかで――

『あらら。魅亞ちゃん、ずいぶんボロボロねぇ』

クスクスと、妖艶な笑い声が響いたのはその時だった。

尾に炎を宿した小さな火猫。

それが、ある最上位悪魔の使い魔であるということは、冥界ではあまりに有名だ。

「……何の用だ、炎の将魔」

『高見の見物。だけど、そうする前に終わっちゃったみたいね。もしかして惨敗？』

一糸まとわぬ裸身をさらす褐色の悪魔。

まとっていた軽甲冑は粉々に砕け、驚くほど華奢な身体つきが稲光に照らし出される。

黒妖精のごとき褐色の肌に、ツンと伸びた長い耳。二の腕や腹部は暗色の鱗にうっすらと覆われており、臀部からは竜の尾に酷似した巨大な尾が覗いている。

――その身体に刻まれた、おびただしい火傷と裂傷。

――そして止めどなく流れ落ちる紫の血液。

『展開する障気を突破されての、組織破壊。そこらの悪魔なら一大事よ？』

「オレを誰だと思っている」

その宣言と同時に。

魅亞――そう呼ばれた悪魔に刻まれた傷が、みるみるうちに塞がりはじめた。

少年とも少女ともつかない華奢な肉体の内側で、破壊された筋肉組織が恐るべき速度でその組成を回復させているのだ。

さらに強靱に。傷を受ければ受けるほどに、その肉体は強化されていく。

進化し続ける怪物。

世界にたった一体だけ生まれた、竜と悪魔の特異混成種。雌雄の区別なく。竜と悪魔の境界さえ、その肉体には存在しない。

それがこの五大災、『波の将魔』魅亞だ。

『で。その謎の発光体には愛想を尽かされたのかしら』

「どうしてそう思う」

問い返す魅亞に、使い魔である火猫がニヤリと口元をつり上げた。

『だって魅亞ちゃん、勝ったって表情してないんだもん』

「……」

自分の額から首筋を流れていく紫の血液。そのしずくを指先で払い落とし、魅亞は悟られぬ程度に奥歯を噛みしめた。

襲いかかってきた正体不明の発光体。

「……奴の攻撃に、多少とまどっただけだ」

間に合わなかったのだ。

あらゆる攻撃を覚え、それに順応する無敵の肉体。それが、魅亞の生涯で初めて受ける未知の攻撃に順応しきれなかった。

――戦闘結果は引き分け。

だが内容はといえば、魅亞側が終始防戦に回る戦いだった。

「……再戦だな」

『アテはあるのかしら？』

「残響は接着ずみだ。奴がどこに行こうと探知できる」

波動残響。波の将魔が操る強力な波動は、一度触れた時点で相手に付着。魅亞だけが探知することのできる追跡用の呪詛となる。

『場所は？』

「人間の都市に、精霊信仰の地があったはずだ。その方向へ向かっている」

『聖地カナンね』

「確かに、あの発光体の輝きは精霊が放つものによく似ていた」

炎のように輝きながらも熱を持たない。

純粋なるエネルギー体。魅亞の知るかぎり、それはこの世界で精霊をおいて他にない。

『それで？』

「考えられるのは、聖地とやらの人間の、悪魔に対抗するための新法術。あるいは古代遺跡から復元した『失われた術式』か」

『あら、ずいぶん人間を高く評価してるじゃない？』

「お前に言われたくないな。冥界に戻ってくるなり魔王様への謝罪も抜きに、真っ先に五大災のところへ『面白い人間を見つけた』と言いふらしに来たくせに」

『ああ、レンちゃんのこと？　だってホントに面白いんだもの。将来が楽しみ』

声を弾ませる使い魔。炎の将魔アシェンディアの感情をそのまま表すかのように、その炎に包まれた尾が上下にゆれる。

『でも聖地カナンならちょうどいいわね。レンちゃんも遠からずソコに向かうでしょうし。会ったらよろしく伝えておいて』

「あの英勇(えいゆう)エルラインの生き写しという人間か。そうだな。ソイツとも一戦交えてみたかった。楽しみが一つ増えたのなら僥倖(ぎょうこう)だな」

『あまり派手にしでかしちゃダメよ？』

「魔王様には許可を得たうえでの地上探索(たんさく)だ。いずれにせよ、オレの部下があの発光体に襲われている以上、見過ごすわけにもいくまい」

『マジメねぇ。ただ、まずはその素っ裸をどうにかしてからね。仮にも五大災(ごだいさい)なんだから。気品は大切よ？』

からかいまじりの口調で告(つ)げる、使い魔。

『それじゃ私、魔王様に呼ばれてるから。土産(みやげ)話には期待してるわ』

ぴょんと跳びはねて姿を消す火猫。

再び、その大地に残されて。

「気品？……くだらない。そもそも、人間にこの姿を見られたところで何になる」

褐色(かっしょく)の裸身(らしん)を恥ずかしげもなく晒(さら)しながら。

波の将魔は、己(おのれ)の巨大な尾で地面を激しく打ち鳴らした。

1

港町フェルシア。

大陸北部の西岸、その海沿いの貿易港として栄えた町だ。

船着き場には港口を示す灯台がそびえ立ち、夜の海を進む船舶の夜標として燦然と光を放っている。

その灯台のおかげで、夜でも町中は真昼のように明るい。

旅団用の武器工房や喫茶店などが、他の都市では閉店している時間でも来客で賑わっている。これも港町フェルシアの特徴の一つだろう。

そして、灯台の光に照らされて——

「ああもうっ！　なんでこんな真夜中に全力疾走しなきゃいけないんだよ！」

泣き言じみた声を上げながら、レンは港町フェルシアの門を走りぬけていた。

レン＝E・マクスウェル。

明るい茶の髪を無造作に切った髪型に、赤を帯びた茶の瞳。

ほどほどに整った顔だちながら、まだ初々しさも残る素朴な表情の少年だ。

「はぁ……っ……さ、さすがに……もう……体力限界……」

町の目印でもある巨大な門をくぐり抜けたところで足を止めて、その場で深呼吸。

「まさか、こんなことになるなんて……」

「そうか？　わたしは面白かったぞ」

のほほんとした口調で聞き返したのは、煌めく銀髪が印象的な少女だった。

海よりも深い緑玉色の瞳に、童話の妖精のように儚くも愛らしい面立ち。旅装束に身を包んだ華奢な肢体も、可憐というほか表現のしようがない。

竜姫キリシェ。

すべての竜種の頂点に立つ竜姫であり、その規格外の強さから天界の女神や冥界の歴代魔王にさえ恐れられた史上最強の天銀竜。

そんな少女が、灯台に照らされた上空を指さして。

「同胞の背中に乗って空を飛ぶのは初めてだったが、コレはコレで楽だったな。レンも初体験だろう？なかなか無いぞ、人間が竜の背中に乗……むぐっ!?」

「しっ。ダメだって。誰かに聞かれたらどうするんだよ！」

深夜ながら人通りで賑わう公道。

そこで堂々と声を発するキリシェを、大あわてでレンは押しとどめた。

「……竜の背に乗るのは嫌だったか？」

「いやいや。嫌どころかすげぇ興奮したって。疾竜の背に乗って空を飛んだ人間なんて、歴史上何人いるかもわかんないくらい珍しいことだろうし」

「そうだろう。ならもっと自慢げにしていいぞ」

言って、まるで自分のことにように誇らしげに胸を張るキリシェ。

「いや、ええと……」

「人間にとって珍しすぎるから問題なのですよ、キリシェ」

にこやかな笑顔でそう返したのは眩い金髪が特徴の少女だ。

大天使フィア。

同年代の青年にならぶほどの長身に、大人びた見目麗しい相貌が印象的。しかし何より目を引くのは、服をはっきり双丘の形に盛り上げる豊満な胸元と、そしてスカートごしに浮かびあがる腰つきの妖艶なシルエットだろう。

「ねえ、エリーゼ？」

「そうだね。歴戦の旅団だって飛んでる竜を見たことはあっても、まさか目の前に疾竜が降りてきて、そこからレンやアタシたちが降りてきたらビックリするもんね」

この句を継いだのは、フィアの隣に立つ褐色の幼女だ。

先代魔王エリーゼ。

外見こそ十歳そこそこだが、これは二百年前の終焉戦争を経て転生した後の姿。かつては広大な地

下世界である冥界において魔王として君臨していた悪魔だ。

「って言いたいんでしょレンも？」

「そういうこと」

エリーゼに背をぽんぽんと叩かれ、レンは苦笑気味にうなずいた。

――今からわずか数時間前。

――自分たちは、竜の渓谷と呼ばれる秘境リ・インファリエルの地に立っていた。

〝人間、お前は全ての竜に仇なす敵だ〟

竜帝カルラ。

キリシェが竜の渓谷に残ることを望む竜の長との激闘。その果てに、竜帝はレンとキリシェが一緒に世界録を探す旅を続けることを認めてくれた。

そこまでは良かった。

問題は、その竜の渓谷から次にどこへ向かうかという話だ。

「次は船旅だから港町に向かうって話だったじゃん。そうなると、もう一度あの地下遺跡を通ってガリア大炎山まで引き返す必要があるわけで。それを、疾竜の背中に乗っけてもらえたのは確かに楽だったけどさ……」

「そうだろう。ガリア大炎山まで引き返すだけで数日かかるのを、わたしの同胞のおかげで数時間に短縮できたんだ。もっと喜んでいいぞ」

「まあ……思い出にはなったよ。何十回振り落とされかけたかわからないけど」

竜の背中に乗るといえば恰好が付くかもしれないが、乗馬のように鞍や手綱があるわけではない。疾竜が翼を羽ばたかせるたびに巨体が揺れるうえ、乗っている場所は地上百メートル以上にも達する高度だ。

転落すれば地上へ真っ逆さま。

疾竜の鱗にかろうじてしがみついてはいたが、動物の背に乗ってここまで生きた心地がしなかったのは初めてだった。

「しかも、まさか直にガリア大炎山の中腹に降りると思わなかったし」

「ん？　どこか他にいい着地地点でもあったか？」

真顔で訊ねてくる竜の姫。

こちらの顔を覗きこむように見上げるキリシェに、レンは溜息をつきながら。

「噂されるタネがまた一つ増えたってこと」

当然のことではあるが、山の中腹を歩いていた別の旅団に、レンたちが疾竜の背から降りてくる姿を目撃されてしまったのだ。

「この真夜中ですから周りの旅団にも見つからないと楽観視していましたが……さすがに疾竜は目立ちすぎましたね。あの場に居合わせた人間からすれば、英勇にそっくりのレンが竜の背に乗っていたわけですし、驚くのも当然でしょう」

苦笑を押し殺すフィア。

「案の定、かなり驚いているように見えましたし」

「だろ？　だから逃げて正解だったって」

遠くから次々と駆け寄ってくる旅団。

あの場で取り囲まれれば大騒ぎになるという理由から、レンを先頭に大あわてで夜の山を駆け下りて港町までやってきたというわけだ。

「アタシはいいと思うけどな。有名なのって悪くないと思うよ」

「……いや。なんか恥ずかしいというか。注目されるの慣れてないからさ」

聖フィオラ旅学園——伝説の至宝『世界録』を捜索するための旅団養成機関では、同じ注目という言葉ではあっても、レンの場合、外見だけが英勇そっくりな『偽英勇』という蔑称つきの注目だった。

それが一転。

炎の将魔を撃退した『再来の騎士』として世界中の旅団から一目置かれる扱いを受けるようになると、何だか気恥ずかしく感じられてしまう。

「ふーん？　アタシはもっと自慢げにしていいと思うんだけどねえ」

両手を頭の後ろに組んで首をかしげるエリーゼ。

「贔屓目なしに見てもさ、炎の将魔を追い払ったうえに竜帝カルラとあそこまで戦えたんだから。大したもんだと思うけど。フィアは？」

「私は今のレンくらい控えめなほうが好きですわ。前にレンには伝えましたが、その謙虚な姿勢が、今までのひたむきな努力に繋がっているのかなと感じます。それはとても大事なことですよ。ね、レン？」

さりげなくレンの左腕をとって、両手で抱きしめるフィア。

これだけならまさに天使の愛情表現と言って通じるかもしれないが、この大天使の場合、抱きしめた手に、大胆にも自らの豊満な胸を押しつけてくるのが問題だ。

「フィア先輩……」

「あらどうかしましたか。私、ただレンの手を抱きしめてるだけですのに」

　そう言いながらも、クスクスと妖艶な笑みをうかべる天使。

　そこに――

「こらエロ天使。いい加減にレンの手を離せ」

「えー？　単なる友好表現ですのに」

「ウソつけ」

　眉をつりあげて間に割って入ったのはキリシェだ。

「それでレン、今日の宿はどこにする？」

「ああ、それなら大丈夫だよ。ほら、こんな夜中でもそこら中に旅団っぽい姿が歩いてる。ここまで賑わってる港町なら宿もたくさんあるだろうからさ」

　港町フェルシアは、他大陸との行き来の拠点としても名高い。

　旅団同士の一大交流地としても栄えていることから、行き交う人や並び立つ店の数、それに町自体の広さも桁違いだ。

「あと、すっかり遅くなったけど夕食もどこかで食べたいな。ほら、地下神殿から竜の渓谷までずっと保存食だったし。この町なら久しぶりにまともな食事できそうだから」

「なら二手に分かれるか」

　活気に満ちた繁華街を指さすキリシェ。

「レン、お前が宿を探してこい。その間にわたしたちが食事のできる店を探しておく」

「了解。じゃあソッチは任せた」

　キリシェ、フィア、エリーゼの三人に背を向けて。

　眩い照明に彩られた繁華街へ、レンは一足先に駆けだした。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

　港町フェルシア・宿『渡り鳥』

この港町から他の大陸に向かう観光客や旅団（パーティ）が多く宿泊する宿だ。レンが宿の予約をとっている際にも、旅団（パーティ）と思（おぼ）しき武装集団が横を通っていった。

そのうち何人かはレンの顔を興味深そうに眺めていたが、そこはレンの方が素知らぬそぶりでやり過ごした。

「……で。エリーゼの方は、本当に夕食任せて平気なんだよな？」

「だいじょうぶだいじょうぶ！　アタシに任せなさいって！」

宿『渡り鳥（ミグラテール）』の裏手。

自分たち以外に人影のない場所で、レンは不安げに目の前の光景を眺めていた。

悪魔の法術（ほうじゅつ）と思しき毒々しい濃紫色（こむらさき）の炎。

その火にかけられているのは大きな壺型（つぼ）をした謎の土鍋（どなべ）で、そこでグツグツと不気味な泡を浮かべて煮えているのは、これまた不気味な緑色の液体だ。

それをエリーゼが、鼻歌を歌いつつお玉杓子（レードル）でかき混ぜている。

「なあ、フィア先輩？」

「仕方ありませんわ。この夜中だと、酒場（バー）はもちろん喫茶店でもお酒しか用意がないとのことでしたので」

こちらの不安が伝わったのか、金髪の少女もまた苦笑で返してくれた。

夜は食事でなく飲酒が主流（メイン）。さらに言えば、ちょうど他大陸からの渡航（とこう）を終えた船舶（せんぱく）があったせいで、酒場（バー）も満員だったらしい。

「未成年の飲酒禁止は大陸では共通の法律ですから。この姿のエリーゼが同行していると、お店によっては入店を断られてしまうんですよ」

「あー……まあそっか」

そういった事情もあっての自炊。

食材はレンのいない間にキリシェたちが調達したとのことだが、あの鍋で煮込まれている貝の正体はまだ怖くて聞けていない。

「しかしちょうどいい。ここなら込み入った話もできる」

エリーゼの調理を手伝っていたキリシェが、ふと思い出したように振り返った。

「レン、疾竜（ワイバーン）の背に乗ってる間にわたしが話したことは覚えてるな？」

「風鳴（かざな）りで聞き取りづらかったけど……まあ何とか」

英勇（えいゆう）エルラインが残した手記（しゆき）『世界録（アンコール）』。

世界中の旅団（パーティ）が探し続け、いまだ発見どころか隠し場所さえ判明していない。

「世界録の在処（ありか）で一番可能性の高い場所が、終焉戦争（しゅうえん）の決戦地って話だろ？」

終焉戦争――それは三百年前に起きたとされる古（いにしえ）の戦いだ。

だが奇妙なことに、その戦いの記録は人間側にまったく残されていない。唯一（ゆいいつ）わかっていることは、世界が『何か』の侵攻（しんこう）にみまわれたということのみ。

人間は誰一人として知らない。

終焉戦争（しゅうえん）の場所も、英勇（えいゆう）エルラインに率いられたキリシェたち三大姫（さんだいひ）が戦った相手も、そしてその結果、世界がいったいどう変わったのかということさえも。

「ところでさ、肝心の終焉戦争の場所は？」

「伝えるのは簡単ですが、そうそう意味のある知識にはなりませんよ。なにせ人間の作った世界地図には載っていませんから」

「え!?」

「ですので、いまは仮に『終焉の島』としておきましょうか」

そう答えたのはフィア。

穏（おだ）やかな口調ながら、その表情には、いつにない真剣な雰囲気がにじんでいる。

「その島は現在、何者も入ることができない状況です」

「あ、それもさっき教えてもらったやつだろ。特別な封印がされてるって」

「そうだ。地上の竜帝（りゅうてい）、天界の女神、そして冥界（めいかい）の現魔王による三重封印（さんじゅうふういん）。これを解除しないかぎり『終焉の島』に入ることはできない」

腕組みした姿勢でキリシェがうなずく。

「とはいえ竜の法印はわたしがカルラから受け取ったから、レン、いつでもお前に譲渡（じょうと）できる」

「あ、それちょうど気になってたんだ。竜の法印てどんなのだったのかなって」

キリシェの言葉に、反射的にレンは手を打っていた。

竜帝カルラから法印を預かった。レンが聞かされている話はその程度だ。譲渡された法印が何かの法術（ほうじゅつ）か、あるいは具体的な鍵（かぎ）のような物体なのかも想像もつかない。

「なあなあキリシェ」

「む……」

なぜか、あわてたように後ずさる竜姫（りゅうひめ）。

しかも急に、その頬（ほお）が恥ずかしげに赤く色づいていて。

「ま、まだ秘密だ！　そ、その……竜の法印の説明など最後でいいだろう。とにかく、あと二つの法印を集めなくては意味がないんだから！」
「えー。なんだよその意味深な」
「う、うるさい！　と、とにかく今はダメだ。……まだ心の準備が」
　ぷいっと顔をそらす竜の少女。とはいえキリシェの言葉のとおり、今は残る二つの法印のことを先に考えなくてはならないのも事実だろう。
　女神、そして現魔王が所有する二つの法印。
「ていうことは、天界と冥界に行くことは確定？」
「そのための港町フェルシアですわ。次の目的地は天界がいいかなと思うのですが、一番近くにある天界に続く審門を訪れるには、船を使う必要がありますからね」
　繁華街のさらに奥。
　船着き場の方角を視線で指し示すフィア。
「天界の審門か。地上と天界をつなぐ扉だから、いつも天使たちが見張ってるって聞いたけど、フィア先輩なら特別な通り方も知ってたりするの？」
「いえ、堂々と審門を通るだけですよ」
　天使によって巧妙に隠された審門。
　熟練した結界士のみが隠蔽術式を探知できると言われ、いざ見つけ出せたとしても、通過の際には天使たちの審判を受けなくてはならない。
「もちろん私が同行しているわけですから天使の審判は不要です。ただ――」
　一拍。
　思わせぶりな合間を開けてフィアが続ける。
「油断は禁物ですよレン。天界とて秘境の一つですし、そこに棲まう聖獣は、人間にとって非常に強力な相手です」
「楽な秘境なんて無いってことか……」
「そういうことですわ。観光旅行とタカをくくっていれば痛い目を見ます。これも一つの経験。修練の一環と思ってください」
　フィアの言葉にこくんと息を呑みこむ。
　と――
「できた！　ねね、ご飯できたってば！」
　延々と鍋をかき混ぜていたエリーゼが、ぱっと陽気な声を上げて手招きしてきた。

「魔界の特製カレーだよ！」

「え。これカレーだったの……？」

　緑色のドロリとした液体の中に、毒々しい斑点模様のキノコや、何の動物のものかもわからない巨大な骨のようなものまで浮かんでいる。

　……キリシェの料理みたいに雑草やら虫は入ってなさそうだけど。

　……中に入ってる貝が明らかに猛毒っぽいのしかないぞ？

　しかも、火を止めてもまだ沸騰が収まる気配がない。喩えるなら溶岩を緑色一色に染めたような煮え方だ。

「レン、たくさん食べてね」

「……エリーゼ。最初にちょっと味見していいか？」

　置いてあった銀スプーンを手にとる。

　緑色の魔界カレーをスプーンの先端でほんの少しだけ掬いとった、その直後。

　どろり、と。

　純銀製のスプーンが先端から半ばまで一瞬にして溶解した。

「うぁ!?　ちょっと待て、なんでスプーンが溶けるんだよ!?　強酸か、それとも毒か!?」

「なに言ってるのレンてば。そんなわけないじゃん。悪魔の業火で煮込んだからカレーの温度が二千度くらいになってるだけだよ」

「その温度の時点で普通じゃないだろ！　どうやって食べるんだよ!?」

「はい。ちゃんと耐熱スプーン用意してあるから」

　手渡されたのは、怪しげな悪魔の像が彫られた不気味な色のスプーンだ。

「冷めないうちに食べてね。ま、冷めるにしたって百年くらいかかるけど」

「このまま食ったら口の中が大惨事だってば!?」

「そうか？　なかなか旨いと思うが」

　その隣で、平然と魔界カレーを口に運ぶのはキリシェ。

「しかしエリーゼ、やや温いぞ。煮込みが足りない気がする」

「やっぱり？　レン用に火加減したんだけど、もうちょっと熱い方が美味しいよね」

　温度二千度超。銀どころか白銀だろうと鉄だろうと溶かしてしまう危険物質を、美味しそうにパクパクと食べ始める竜姫と先代魔王。

「……ええと、ちなみにフィア先輩は？」

「私は、こちらで十分ですわ」

　白ワインの注がれたグラスをフィアが傾けてみせる。

「天使という立場上、生物の肉が入っているものは頂けませんので」

「ああそっか、そうだったよな」

　キリシェとエリーゼは灼熱（しゃくねつ）の魔界カレー。

　フィアは酒場（バー）で購入したと思われるワインを満喫（まんきつ）中。自分も、後で軽食用のパンでも買ってこよう。レンがこっそり思い浮かべた矢先。

「レン、食が進まないようなら私と稽古（けいこ）をしてみませんか」

「え？」

「武術というほど大げさなものではありませんが、簡単な組み手をね」

　早くも空になったワインボトルを芝生（しばふ）に横たえて、フィアがその場で屈伸（くっしん）運動。

「キリシェとエリーゼは食事をしながら見物していて結構ですよ。見ていて助言があれば都度、レンに伝えてあげてください」

「ちょ、ちょっとフィア先輩!?」

「どうかしましたか」

　驚きの声を上げるレンに、むしろその反応を楽しむような口調の大天使。

「組み手って……」

「聖フィオラ旅学園でも武闘家（フルタイプ）の講義であったでしょう。レンは騎士（きし）専攻でしたから二年生以降は遠のいていたと思いますが」

「あの、そうじゃなくて。ええと、だから……」

「レンの言いたいことはわかります。私は女性で、レンは男の子。それが組み手となれば、意図せずとも女性（わたし）の身体（からだ）の思わぬところに触れかねませんものね」

　お見通しと言わんばかりに片目をつむってフィアがウインク。

　だが――

「ま。私に指一本とて触れられたのなら、の話ですが」

　天使のそんな呟（つぶや）きが聞こえた直後。

　ぐるん、とレンの視界のなかで空と地上が反転した。

「痛っ!?」

地面に叩きつけられた肘の激痛に、声がもれた。

「咄嗟に受け身をとれたのは立派ですわ」

たった今まで自分の立っていた場所から、こちらを見下ろすフィア。

――まさに刹那。

――近づかれたという認識に至る前に接近され、そして投げられていた。

「地面に頭を強打する直前に、肘先を地面について衝撃を緩和。今もきちんと声が出せるということは、背中への衝撃も最小限に抑えられた証拠です」

「……褒められた気がしないって」

痺れた肘を庇いながら立ち上がる。

「はい。では次」

「っ!?」

反射的に両手を交叉して防御の構えをとる。その隙間をするりと抜けるようにフィアの手が伸びてきて、掴まれたのは首だった。

――やばい。

咄嗟にその手をはねのけようとして。

「首を守ろうと意識を割けば、足下への注意がおろそかになりますよ」

天地反転。

フィアのくり出した足蹴りに両足をまとめて払われて、今度は空中で二回転。悲鳴を上げる余裕すら与えられず、レンは横倒しに地面に突っ伏した。

「レンがんばれー」

「情けない。もっとこう、投げられる前に投げ返すとかだな」

魔界カレーを口に運びつつ、気楽な様子で言ってくるエリーゼとキリシェ。

「……気楽に言ってくれるなって」

脇腹を押さえながら立ち上がる。

疑うまでもない。最初の投げはともかく、今度の蹴撃を受けて自分が起き上がれているのはフィアの手加減があったからだ。

「レンも実感したと思いますが、今のは完全に『詰み』の状況でした。私がその気なら掴んだ首を握りつぶすことも簡単でしたし、そうでなくても今のように足下を払われて転倒するか。その二通りの未来しかなかったわけです」

普段と何一つかわらぬ穏和な口調ながら。

珍しくも、フィアの声音にはこちらを試すような不敵なものが込められていた。

「今の組み手、何が問題であったかわかりましたか？」

「……」

一回目は完全に虚を突かれながらも、かろうじて受け身はとれた。

二回目は警戒した状態ながらも懐に潜りこまれ、そして受け身も取れないほど見事に体勢を崩された。

受け身や防御が下手だから？

――否。

相手が人間であれば防御という手段もありえるが、世界録を巡る冒険で相対するのは、人間より遥かに巨大な徊獣や鉱巨人。それに竜や悪魔たちだ。人間の生身の耐性で、竜の息吹や悪魔の法術を無力化しきれるわけがない。

つまり問題の本質は別にある。

「二回とも、接近された時点で俺の負け……なんだよな？」

「よくできました」

教師のような口ぶりでうなずく大天使。

「そうです。レン、あなたの目指すべき境地は、何よりまず攻撃を受けないこと。一撃必殺となる豪剣の習得でもなければ、攻撃を受けながらの反撃でもない。俊敏かつ多様な瞬歩でもって間合いを制する。間違っても殴り合いの喧嘩じみた攻防になってはいけません。なぜなら人間と徊獣とが殴り合って勝てるわけがありませんからね」

「……まあそうだよな」

「身近なところでお手本になるのが、上の始原精霊の地下神殿で出会った『カナン巡礼聖教船』の幹部ですね」

タイラスと名乗った武闘家。

上の始原精霊が作り上げた鉱巨人の攻撃を捌ききっただけでなく、プルミエールという法術上の少女が法術を発動するために鉱巨人の注意を引きつけていた。

「聖フィオラ旅学園での、レンの模擬試合にも共通する部分ですわね」

レンに体格差で勝る学生騎士たち。真正面から剣を打ち合えば相手の膂力に負けて剣が弾かれるか、そうでなくても防戦一方の展開になることは目に見えている。

ゆえにレンが剣で対抗するには、単純な腕力や体力以外の長所が必要だった。

――相手の攻撃を刹那の反応で見切る敏捷性。

――足りない剣の威力を補うための、正確無比に弱点を貫く精緻の剣技。

その努力の成果がかいま見えたのが炎の将魔戦。

そして竜帝カルラとの激戦だ。

「レンの努力と磨きあげた長所は良いと思います。ですので、それをさらに伸ばすためにも武闘家の体術は有意義かなと考えた次第ですわ」

「……納得。それでさっきのお手本が誰かって話だったんだ」

言われるままに、レンは素直に感嘆の吐息をついていた。

その場の思いつきにも見えた組み手だったが、熟慮の上で提案してくれたのだろう。

〝いい歩法だ、少年。我流ゆえの粗々しさの中にも、たゆまぬ修練の様が見てとれる〟

思い出せば。

武闘家であったタイラスにも、その部分は褒められた記憶がある。

「さて、今の組み手に話を戻しましょう。レンがあっさり投げられたのは、投げの間合いまで私の接近を許してしまったのが原因。そして私の接近を許してしまったのは、レンの動きを私の体術が上回っていた。それだけのことですわ」

体術。

体捌きとも総称される『運歩法』の習得。

「まずは私の歩法を見て、そして真似てください。わかりやすく言えば動き方。私の動きを再現することができれば、私の攻撃にも対応できるようになるはずです」

「わかった。じゃあ頼むよ」

背中についた砂をはたき落とし、レンは軽く膝を曲げて身構えた。

「とにかく見て避ける。その練習でいいんだよな？」

「最初はそれで十分ですよ。では課題がハッキリしたところで続きを」

拳をかるく握って構えるフィア。

「そして次は投げだけでなく、高速換歩による接近と殴打も交えます。手加減はしますが骨とか粉砕し

たらごめんなさいね」

「さらりとヤバイこと言った!?」

「ですので、ひたすら避けてください」

　金髪の大天使が世にも愛らしい笑顔でにっこり笑(え)んでみせる。

「そう。これは訓練。私もレンを傷つけるのは心が痛むのですが、あえて泣く泣く、レンを殴り倒そうと襲いかかる戦闘狂(せんとうきょう)となるわけです」

「天使の発言じゃないだろそれ!?　って、うわぁ!?」

　顔のすぐ横をかすめていった大天使の拳。

「うん、いい反応。聖フィオラ旅学園でずっと頑張ってきただけありますわ」

「だから何でそんな笑顔なんだってば!」

　天界最強の天使の拳から逃げながら、レンは世にも悲痛(ひつう)な叫び声を上げた。

2

　港町フェルシア・宿(やど)『渡り鳥(ミグラテール)』。

　閉じたカーテンの隙間(すきま)から朝日がうっすらと差しこむ早朝。

「レン。起きろレン」

「……うぅ。くそ、次……こそ……痛っ……いや、だけど今度は……」

「夢の中でまで訓練(しゅんしょう)とは殊勝な心がけだが、もう朝だぞ」

　ゆさゆさと肩をゆさぶられ――

「……あれ?」

「やっと起きたか」

　キリシェの呆(あき)れ声に、ぼんやりと薄目をあけた。

　おぼろげな視界が徐々に鮮明(せんめい)化。まぶたの端(はし)をこするレンの目の前。いや、もう互いの前髪と前髪がふれあうくらいの距離で。

「まったく。ずっと寝言を呟かれたせいで、わたしの方が寝不足だ」

薄地の寝間着姿のキリシェ。そんな彼女が自分と同じベッドで、しかも同じ布団に潜りこむように密着した姿で寝そべっていた。

「うわっ!?」

「……うるさい。耳元で大声を出すな」

上半身を起こす少女。

「お前がフィアとの組み手の途中で力尽きて倒れたから、わたしがお前をここまで運んできてやったというのに」

「だ、だってさ」

目を覚ましたら密着するくらいの距離に、薄着一枚という姿のキリシェ。

……そりゃ前にもあったけど。

……いくら何でも一回で慣れろっていう方が無茶だよ。

竜の習性。

キリシェの故郷である秘境リ・インファリエルでは、竜種は寄りそいあって寝る。竜姫であるキリシェもそれは同様で、寝るときは誰かの近くで寝る方が落ちつくというのだ。

その話は前に聞いていたが、レンにとってはあまりに刺激が強すぎる。

「とにかく起きろ」

「わ、わかったよ……あれ？　俺、昨日の服のままか」

フィアと組み手をしていた時の服装。組み手をしながら意識を失い、キリシェに部屋に運ばれてそのままベッドに寝かされたらしい。

……だけど、思い出せばここ一週間。

……ずっとこんな調子だったっけ。

「港町に泊まってもう一週間か。最初に学園を出発して以来、ここまで長い日数、集中的にお前の訓練に付き合ったのは初めてだな」

「こっちは、何回疲れて倒れたか思い出せないくらいだけどさ……」

港町フェルシアでの一週間。

天界の審門に向かうための船はエリーゼが予約をしてくれることになったが、適当な船を探すのと、その乗船予約にも時間がかかるという。

その間レンは、キリシェとフィアから延々と剣と体術の手ほどきを受けていた。

昼間はキリシェから剣の指導を。

夕方からは、フィアと実戦を想定した組み手の練習。

「そっか……俺ってば最後、意識なくなってたんだ。フィア先輩との組み手もだいぶよくなったと思ったんだけど」

「わたしがあれほど休めと言ったのに、無理して組み手を続けようとするからだ」

半分苦笑、半分あきれ顔で溜息(ためいき)をつくキリシェ。

一週間にわたる訓練の総まとめ。

フィアとの組み手の最中、最後の最後に、今までの訓練で蓄積(ちくせき)された疲労(ひろう)が限界に達した挙げ句に昏倒(こんとう)。そのまま今朝まで寝ていたということらしい。

「とはいえ、わたしの目から見てもフィアとの組み手は日に日に動きがよくなっていた。それなりに得るものはあったな」

ベッドからぴょんと飛び降りるキリシェ。

「とにかくお前も目を覚ましたことだし、船の方もエリーゼが無事に予約できたらしい。いよいよ天界に向かう。先に外へ出ていろ。私も着替えを終えたら行くから」

通路の方を指さすキリシェにうなずいて、レンは一足先に部屋を出た。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

潮騒(しおさい)。

群青(ぐんじょう)に染まった波が防波堤に押し寄せて、無数の泡と飛沫(しぶき)へと変わる景色。入り江から吹きこむ風は特有の湿(しめ)り気と、そして塩辛い匂(にお)いを帯びている。

「ここまで来ると海って感じだねぇ」

港町フェルシア・船着き場。

いくつもの帆船(はんせん)が停泊(ていはく)している脇を歩きながら、エリーゼ。

「ですわね。夜の繁華街だけだと栄(さか)えた都市と何ら変わりありませんが、この海原(うなばら)を見るとそんな気持ちになりますわ。今日は海も穏(おだ)やかそうで何よりです」

先頭を歩くのはフィア。

人間の文化にもっとも慣れ親しんでいる彼女が見つめるのは、大小さまざまな帆船だ。

帆柱(マスト)一本に帆がついた小型船(ヨット)から、帆柱(マスト)三本に横帆のついた大型の全装(シップ)帆船まで。

観光用の豪華絢爛な塗装が施された船もあれば、大型旅団(パーティ)が大陸移動に使うであろう頑丈そうな造りの船も見て取れる。

「船ってアタシも久しぶりだなぁ。フィアは？」

「私はちょうど一年くらい前に乗りましたわ。人間の学園で、同級生(クラスメイト)と一緒だったので賑(にぎ)やかでした。ところでレン？　もう少しゆっくり歩きましょうか」

「……い、いや……大丈夫だから……たぶん……あ、痛(いた)っ」

先を歩くエリーゼとフィア。

二人から数メートル後ろを歩きつつ、歯を食いしばってレンは答えた。

「まだ……筋肉痛が……あいたたっ」

全身の筋肉痛。特に太股(ふともも)からふくらはぎにかけてと、背中の腰周りが軋(きし)むように痛みを訴えている。聖フィオラ旅学園に入学したての頃はともかく、ここまで全身が悲鳴を上げるというのは過去に覚えがない。

「筋肉痛って、こんな全身に起きるもんだっけ……？」

「騎士(きし)の動きと武闘家(フルタイプ)の動きは違いますからね。慣れない全身運動の反動ですわ。でも、それだけレンが真面目(まじめ)に頑張ったという証拠です」

海風にそよぐ髪を手で押さえながら、フィア。

「そしてキリシェ。あなたもその露骨(ろこつ)に落ちこんだ顔をどうにかできませんか？」

「……今から船に乗るというのに、楽しい顔をしていられるか」

いつになく弱々しい声の竜姫(りゅうひめ)。

「あれ？　もしやキリシェって船が嫌い？」

「いい思い出がない。乗ったのは三百年前に二回だけだが」

どんよりと曇(くも)った表情で少女が溜息(ためいき)をついてみせる。

「今日の朝までは平気だったんだが、いざこうして船着(ココ)き場に来てみると……うぅ……」

「え？　そんなに嫌(いや)って、どうしてさ」

「すぐにわかりますわ。大したことではありませんので気にしないで平気ですよ」

苦笑を隠そうともせずに答えたのはフィア。

「それよりレン、先ほどの説明は理解できましたね？」

「大丈夫。天界の審門って普段は天使が隠してるから、まだまだ人間が見つけてない審門が世界中に

たくさんあるんだろ？」

巧妙な隠蔽術式で隠された天界の審門。

それが地上と天界を結ぶ扉であることはレンも知っている事実だが、実際に審門を見つけるには、高位の結界士を引き連れて世界中を探索する必要がある。

「昔は隠していない審門もあったのです。ただ竜の秘境と同じで、どうしても向こう見ずな人間の旅団が侵入しがちでしたので。レスフレーゼ様のご判断でいっそ全て隠してしまえということになったのですわ」

「女神レスフレーゼか……」

天界を統べる者。

天界第二位の大天使であるフィアにとっての唯一の主であり、さらに冥界の悪魔や地上の竜も含めたすべての高位存在の中で、もっとも永き時を生きているという。

まさしく、歴史の全てを見届けてきた『生きる伝説』だ。

「女神に会うって、俺は緊張しそうだけど。エリーゼとキリシェは知ってるんだっけ？」

「もちろん」

「アタシなんか三百年前、エルラインに見張られながら地上で女神と和解の握手させられたもん。あの時はさすがに屈辱だったなあ。それは向こうも同じだろうけど」

二人して首肯する竜姫と先代魔王。

「気楽に構えて大丈夫ですよ。ただの一番偉い天使と思ってください」

「なおさら凄そうなんだけど……」

「それは会ってからのお楽しみですわ。さて肝心の審門ですが、今日これから私たちが向かうのは、まだ人間が誰も知らない審門です」

金髪の大天使が指さしたのは、真っ青な大海原だった。

「あの水平線の先ですわ」

「向こうって海だけど？」

「ええ。ですから海上にあるというわけです」

ごくごく当然と言わんばかりに告げるフィア。

「天界の審門は、天使が天界と地上とを行き来するためのもの。天使には翼がありますから、海の上に扉があっても空を渡って行けばいいわけです」

「あ、そっか。そう言われてみれば」

大海原のただ中にある。

それは人間が想定する「門」という概念からは出てこない発想だ。もし考えついたとしても、この果てしない海のどこを探せばいいか見当もつかない。

審門の隠し場所としては最適だろう。

「天使らしいよね。冥界の審門みたいにもっと堂々と置いておけばいいのに。ねえレン、冥界に来る時はもっと簡単に行けるから楽しみにしてて」

「そのかわり冥界は入ってからが大変でしょうに。……それはさておき、確かこの先に。ああ、ありました。この船です」

フィアが足を止めた先にあったのは、周りの帆船の中でも一際巨大な全装帆船だった。

丁寧に塗装された白の船舶。帆柱に取りつけられた帆は、芸術家が一枚一枚手書きで描き込んだ絵画仕立てになっている。

豪華客船。それも王族や富裕層が、その休暇に用いるような船舶だ。

「すっごいな、これ……乗船券、他の船の何倍するんだろ。フィア先輩、こんな船の予約よく取れたな。めちゃくちゃ高価だったんじゃないのか？」

「レン、それじゃないですよ」

「え？」

「こっちこっち」

フィアが指さしたのはレンが見上げていた豪華客船……の隣にぽつんと停泊している、古ぼけた一隻の小型船だった。

船舶の表面の木板は長年の日焼けで色あせて、海水の浸食で装飾もすっかりはがれ落ち、よく見れば錆びついた釘が飛びだしている箇所もある。隣の豪華客船と比べるどころか、周りを見わたしてもこれ以上ひどい船はないだろうと断言できる。

「ほらレン！　早くおいでよ！」

船に飛びのるエリーゼ。

彼女一人が乗っただけなのに、早くも船舶のそこかしこから不穏な軋み音が響き、船体そのものが傾いてしまっている状態だ。

「ソレ、今にも沈みそうじゃない……？」

「それでいいんです。ちょっと無茶な使い方をするので、大破して木っ端微塵になっても怒られない船が欲しかったんですよ」

なびくスカートの裾を押さえ、優雅な仕草で船に飛び移るフィア。

……今、すごい不吉な言葉が聞こえた気がするけど。

……詳しく聞けばもっと怖くなりそう。

「さ、行きましょう。朝早いので船着き場の人の出入りも多くなさそうです。目立たずに出発するなら今ですよ」

「だってさキリシェ」

「仕方ない。腹をくくるか」

ぴょんと船に飛びのるキリシェに続き、レンも船上へ。

「ええと、それで櫂はと……」

帆船とはいえ、これだけ小さな船体だと風を受けるための帆も小さい。

沖に出て潮流に乗るまでは多少の人力が必要だろう。そう考えたレンが船縁の櫂を手にしようとしたところで。

「あ、それは使いませんわ」

ひょいっと。

その櫂を、あろうことか支点の固定具ごとフィアが取り外してしまった。

「え!?　じゃあどうするのさ。まだこんな場所じゃ風も――」

「エリーゼ、お願いします」

「まっかしといて。風を吹かせばいいんでしょ。簡単だよ」

尖った船尾に立つエリーゼ。

「レン、ちゃんと掴まっててね。でないと振り落とされるよ?」

「……振り落とされるって、まさか」

エリーゼの言葉に一抹の不安を覚えながらも船縁にしがみつく。

と同時に、船尾に立つエリーゼの手元に浮かびあがる暗色の法術円環。悪魔特有の色味を帯びた円環がみるみるうちにその輝きを増していって。

「なあエリーゼ、できれば最初は手加減を――」

「いっけぇ!」

レンが言い終えるより先に。

暴風。いや、爆風としか喩えようのない竜巻じみた風が円環から吹きだして、四人の乗った小型船を一気に押し出した。

「うわっ!?」

船縁にしがみついていなければ振り落とされていてもおかしくない。

風を受けるはずの帆がエリーゼの暴風に耐えきれず木っ端微塵に砕けた時には、すでに小型船はその遙か前方まで進んでいた。

「きゃぁ!?」

「なんだこの風は、法術か!?」

船着き場では、渦巻く風のあおりを受けて女性の法術士がその場で尻餅。

重厚な甲冑をまとう騎士も慌てて身を屈め——それを見た別の旅団が次々と駆け寄ってくるのがはるか遠くに霞んで見える。

しかしその時には、レンたちの船は遠く離れた海面上。

「帆が!?　ていうか帆柱までへし折られてる!?」

「平気だってば。アタシの風で船ごと目的地まで押し流せばいいだけだから。ちなみに人間でも、風の精霊具を使える精霊使いなら同じことができるよ」

「それはいいけど……は、速すぎるって!」

船縁にしがみつきながらレンは声を張り上げた。

どこを見わたしても群青色の海だけが広がる世界。港町フェルシアの船着き場は、とっくに水平線の彼方へと消えている。

「……さっき船着き場にさ、何組か旅団が集まってきてたよな」

「ええ。エリーゼの風に気づいたんでしょうね」

あくまで可憐な様子で船縁に腰かけるフィア。

この突風の中でさえ、眩い金髪をなびかせながらまったく動じた様子がない。

「追いつかれることもないでしょうから、私たちの目的が知られる心配はありませんわ」

「ああ、いや、そっちは心配してないよ」

船着き場にいた旅団の間で、自分たちが今頃どんな噂になっているか気になっただけ。

そう言いかけた言葉を呑みこんで、レンは苦笑いで返した。

「ところでレン、せっかくの機会なので海の勉強でもしませんか？　ほら向こう。大きく飛沫が上がっているのが見えますね」

「本当だ。クジラ？」

「あの飛沫の大きさだと違いますわね。海獣と呼ばれる一種でしょうね」

噴き上がる飛沫を指さす大天使。

「好んで人間を襲う行為は少ないのですが、縄張り意識の強い種によっては、通りがかりの船舶を排除しようと近づいてくるわけです。それで時に激しい戦闘に発展することから、徊獣認定された生物です」

「アレが海獣……」

海の魔物として古来から恐れられている徊獣の総称だ。

実際の正体は大型の肉食徊獣であったり、毒の触手を持つ大Eクラゲであったりと様々だが、海面からはその姿を正確に確認できない。そのため、それらすべてを総称して海獣と呼んでいるわけだ。

その正体がわかるのは、海中に潜むソレが浮上してきた時のみ。

……近づいてくる？

だがレンの不安をよそに、自分たちの船から逃げるように遠ざかる気配。海面から噴き上がる飛沫も徐々に小さくなり、最後には消えてしまった。

「逃げていったのかな」

「うんうん。たぶん、アタシの魔風に含ませた毒に気づいたんでしょ」

「……待った。毒って？」

「そりゃ先代魔Eの法術が、単に風を吹かせるだけじゃつまらないでしょ？　ちゃーんと、どんな生物にもきく猛毒を風に練り込んであるんだから」

満面の笑みで胸をはる褐色の幼女。

「……俺、その猛毒の風とやらをさっきから浴び続けてるんだけど」

「んー、たぶん平気じゃない？」

「曖昧な返事にも程があるだろ!?」

「多少の毒なら私が解毒できますわ。そのための治癒士です。ただ残念ながら――」

苦笑の面持ちでフィアが見つめる先は、レンの横に座る少女。

そう、気になってはいたがキリシェが一言も喋っていないのだ。船縁に掴まり、こちらに背を向けたまま微動だにしない彼女。

「残念ながら、キリシェの具合だけは治療できないんですよねぇ……」

「おいキリシェ？　どうしたんだよ、さっきから全然喋ってないし」

「……」

「キリシェ？」

返事がない。

レンの心境が疑問から不安へと変わる。思わず彼女の肩に手を伸ばそうとした矢先、ふらふらとした動きで銀髪の少女がふり向いた。

血の気の引いた真っ青な顔色で。

「うわっ、めちゃくちゃ顔色悪い!?」

「……船酔いした」

ふらふらと、力尽きたように自分の膝(レン ひざ)によりかかるキリシェ。

「……だか……ら、……船は……嫌なんだ……」

「人間状態のキリシェはものすごく船酔いしやすい体質なんですよ。もともとが竜なので、こんな小さな船で海に揺られるというのが、彼女にとってはとても違和感のあることらしいのですわ」

「いっそ……竜に戻って飛んでいきたい……」

半分涙目でしがみついてくる彼女。

普段の気丈(きじょう)で自信に満ちあふれた姿とは打って変わり、もはや人間の少女よりも華奢(きゃしゃ)で弱々しい雰囲気だ。

……俺から見ればちょっと可愛(かわい)いんだけど。

……本人からすれば、本気で死ぬほど苦しそうだからそんなの言えないよなぁ。

「うぅ。吐きそう……」

「それは待て!?　俺に掴(つか)まったまま吐くのだけは勘弁してくれって!」

「しかも嘔吐(おうと)となると、中身はエリーゼの魔界カレーです。キリシェったら昨日まで食べ続けていましたし、彼女のお腹(なか)の中でまだ温度五百度くらいあるかしら。レンに付着したら大火傷(おおやけど)ですわ。かといって海に撒(ま)けば　帯が魔界カレーの毒素に汚染(おせん)されますし」

あっけらかんとした表情のフィア。

「ここはキリシェに耐えてもらいましょう」

「がんばれキリシェ！　吐くなよ、絶対に吐くなよ!?」

「うぅ……」

涙声で弱々しくうつむく竜姫（りゅうひめ）。

「こんなことなら……本気の息吹（ブレス）で、この海水すべて蒸発……させ……」

「そう物騒なこと言わずに。ほら、もうすぐですよ」

何もない水平線をフィアが指さした。強烈な魔風に流される船が、猛烈（もうれつ）な速度でもってフィアの指す海面へと近づいていく。

「はい、エリーゼ止まってください」

「あいよ」

ぴたりとその場に止まる小型船（ヨット）。

急停止の反動でまたもレンだけ船の外に振り落とされそうになるものの、幸か不幸か、キリシェにしがみつかれている重みのおかげで助かった。

「ここ……？」

「ええ。見えるようにしましょうか」

すっと立ち上がったフィアが片手をかざす。

待つこと数秒。陽光（ようこう）あふれる蒼天（そうてん）から、そして陽光を反射する蒼海（そうかい）から、文字通り天地をつなぐ光の柱が浮かびあがった。

「これが審門……！」

海面にそびえ立つ、三本の巨大な大聖塔（オベリスク）。その中心からは、純白に輝く光の柱が天上へと昇っていっている。

神々（こうごう）しい。もはやそれ以外に喩（たと）えようがない光景だ。

「さ、レン。光の柱に触れてくださいな」

「それだけでいいの？」

「ええ。それだけで天界に直行ですわ。同行するのは私と――――」

『お待ちくださいフィア様』

『その者の来訪が相応（ふさわ）しいか否（いな）か、見定めるのは私たちの役目です』

双子のような子供の声が響きわたる。

大聖塔（オベリスク）から生まれる光の柱から、翼持つ双子の天使が現れたのはその時だった。

「……あなたたち？」

現れた天使を見上げるフィア。

外見ならエリーゼよりも幼いであろう金髪の天使が二体。どちらも白の天衣を羽織（はお）り、手には小さな弓矢が握られている。

『ようこそ、かつての英勇（えいゆう）の姿を持ちし者よ』

『天界を代表して参りました。ご存じのことかと思いますが、天界の審門を通るには天使の要求に応（こた）えていただくのが慣（なら）わしです』

愛天使（キューピッド）。

あらゆる天使種の中でも、おそらく人間世界で最も有名な天使だろう。

『さあ！』

『天使の審判。応えてくださいませ』

が――

「あら、それは話が違いますわね」

粛然（しゅくぜん）とした声音（こわね）で。

しかし瞳の奥に、幽（かす）かな憤（いきどお）りの色を湛（たた）えた大天使フィア。

「この人間（レン）は、私自らが天界へと招待すると決定した者ですわ。審門（ここ）で試練（しれん）を与える必要はありません」

揺れる船首（せんしゅ）に立つ彼女が、上空をただよう愛天使（キューピッド）たちを見上げる。

「あなたたち、よもや私を知らないわけでもないでしょう？」

『もちろん』

『大天使フィア様。女神レスフレーゼ様に次ぐ天界の象徴（しょうちょう）。白き翼。大いなる力の具現（ぐげん）にして、美しき明けの明星（みょうじょう）。それらは総（すべ）て、フィア様のための言葉でございます』

「結構」

美しき金髪の天使が満足げに首肯（しゅこう）。

「ならば言うまでもないでしょう。すでに天使の審判は私自らが行ったも同然ですわ」

『否（いいえ）』

『審判を行うのは、天界の審門の守りを司る愛天使たちの使命。これは女神レスフレーゼ様が与えてくださった不可侵の権限です』

　くすくすと、互いの顔を見合わせて頷きあう愛天使たち。

『たとえフィア様であろうとも』

『人間を天界へと招く権限はお持ちではありません』

「権限？」

　ぴくりと、フィアが片眉をつりあげる。

「あなたたち何を言っているのですか。いったい何の権限を与えられたか知りませんが、私と女神様の関係を知らないとでも――」

『存じ上げません』

『恐縮でございます。私たち、まだ生まれて間もない若輩者ですので』

　それぞれ答える愛天使二体。

　臆した様子もなくフィアに向かってそう断言し、ゆっくりと目の前まで降下してくる。

『とはいえ女神様とのご関係？　いくら何でも、女神様に対して馴れ馴れしいのではありませんか？』

『そもそもフィア様って、私たちが生まれた時はずっと天界の湯源郷に入り浸っていて、温泉に浸かっては寝ての繰り返しだったじゃありませんか』

『しかも数年前からは勝手に地上に降りちゃうし』

　ぱたぱたとフィアの周りを舞う愛天使たち。

　格下であるはずの天使たちの、そんな挑発めいた行動に。

「……あなたたち、生まれて何年になりますか？」

　麗しき金髪の少女が紡ぐ声が、震えていた。聖フィオラ旅学園では、傲慢な教官や小生意気な後輩の前でも決して崩さなかった微笑。

　それがいつしか――

　その微笑が凍りついていた。

「終焉戦争を経験しているわけではなさそうですね」

『私たちそんな歳ではありません。まだまだ若い二百歳です』

『フィア様と違って、まさに乙女盛りな年頃ですの。ええ、フィア様と違って』

「そ、そうですか。別に二回も強調して言う必要はないと思いますが……」

　頬を引きつらせつつ、こっそりと両手の拳を握りしめる金髪の大天使。

……やばい。

……こんな怒り露わなフィア先輩、俺だって見たことないぞ。

「あちゃあ。あの愛天使たち、やばいね」

レンがこっそり船尾に移動する傍ら、小声でそう呟いたのはエリーゼだ。

こちらも滅多に見せない憫笑で。

「二百歳か。それじゃあ終焉戦争も未体験。エルラインとも面識ないだろうし、天界最強の暴虐天使って言われてた時のことも知らないよねぇ」

「……フィア先輩のこと？」

「そそ」

小声で答える褐色の悪魔。

「ひとたび怒ると女神も手がつけられない最強の暴れん坊。立場は女神が上でも、実力はフィアが上なのは冥界でも有名な話。でも、ただの荒くれ天使じゃないよ。終焉戦争の時だって、フィアがいなかったら天界が滅亡してもおかしくなかったんだから」

「……そうなのか」

「さっきの湯源郷ってのは天使の憩いの場なんだけど、それもフィアの場合は湯治でさ。終焉戦争で負った傷を癒すために通ってたわけ。ま、そこらへんの事情も知らない若造がいるのも当然っちゃ当然なんだけど。フィアからすれば腹立たしいよね」

呆れ口調で肩をすくめてみせる先代魔王。

『フィア様って、そもそも本当にそんなに偉いのですか？』

『私たち、詳しいことを存じ上げませんもので』

一方、そんなレンたちの会話には気づかず、フィアの周りを飛びまわり続ける愛天使二体。肝心のフィアはといえば、無言でうつむいたまま微動だにしない。

もはやその下の表情がどうなっているのか想像するも恐ろしい。

「アイツら、終了」

エリーゼの無情な一言。

そして。

『フィア様も、だいぶお歳なのでしょう？』

『世界を冒険だなんて、いい歳して――――っ、なぎゃあっあああつっ!?』

吹き飛んでいく愛天使。

フィアの放った無言の拳一発で、白雲を突きぬける高度まで吹き上がり、なお勢い収まらずにレンの視界の外まで行って見えなくなった。

「……無礼者が」

ざざっ、と波紋状に生まれる波飛沫。

背中に光り輝く巨大な翼を顕現させた大天使。その全身に満ちる輝きが、果てなき天上の隅々まで、さらには遙か水平線の先の他大陸までも照らしだす。

――別次元の光量。

――天地開闢を告げる光の再現であるかのような大いなる輝き。

その神々しさだけで証明には十分すぎた。

女神レスフレーゼの威光すら霞ませる、天界の真の実力者が誰であるのか。

「その無明にして片生なる言動、不遜なること極まりなし。その行い、許されざる大罪と知りなさい！」

眩しき金髪をなびかせて。

無数の白羽を空に振りまく大天使が、恐怖に凍りつく愛天使の目の前まで一瞬にして転移していた。

『あ……あぁ……う、うそ……こ、こんな桁違いの力……？』

ふるふると小刻みに震えて動けない愛天使。自分の愚行を悟るのが遅すぎた。それをようやく理解したのだろう。

「覚悟なさい。その翼の羽、残さずむしりとって魚のエサにしてあげますから」

『ま、待って待って待ってください！　私が愚かでした！　ご免なさい！』

「聞こえませんね」

『いやぁぁぁぁぁつつつつつつ!?』

本気で翼の羽をむしりとろうと手を伸ばすフィア。

それを――

「ま、待ったフィア先輩！　落ちついてくれって！」

船首に立って彼女の肩へと手を伸ばし、レンは目の前の大天使を押しとどめた。

はたして人間の声が届くだろうか。

初めて見るフィアの本気の激昂と、そしてあまりの神々しさ。目の前の大天使の威光に声が擦れそうになるのを必死に堪え、声を振りしぼる。

「フィア先輩、先輩ってば！」

「……レン？」

　はたと、我に返ったように振り返る天使の少女。

「っ！……わ、私……？」

「あ、あのさ、待ってやってくれよ。先輩からしたらすごく無礼なこと言われたっていうのは俺にも何となくわかる。でもコイツさすがに反省してるみたいだし。それに、そんな怒った表情（かお）は先輩らしくないって」

「――――」

「ほら、もっといつもみたいに……ええと、笑ってる方が先輩らしいと思うしさ」

ぽかんと、惚けたように真顔で瞬きをくり返すフィア。

ややあって。

「……そう……ですわね。レンの言うとおり。私としたことが大人げなかったですね」

そんな彼女が、ふっと表情をやわらげた。

背中に輝く翼が見えなくなって、そして世界の果てまで照らすほどの光も消えていく。

「それで審門の件ですが」

『は、はいいいいっ！』

行儀正しくその場に背筋を伸ばして敬礼する愛天使。

『た、ただですね……審判を受けなければならないのは事実なのです。フィア様がお認めになっても、他の天使たちはその人間のことを知らないのですから。天界に人間を招くということはすべての天使の――』

「わかったわかった。やるよ。審判てのを受ければいいんだろ」

まだ何か言いたげなフィアにかわってレンは船首へと進みでた。

「その審判てのはお前が課題を出すってことで、俺がそれに挑戦すればいいんだろ」

『そのとおり。そして、私の役目はコレだけです』

手にした弓に矢をつがえた愛天使が、その矢を真っ青な海面めがけて放つ。

――凍結。

レンたちの船を中心として、その周囲百メートルほどの海面が、白霜の降りた氷の大地へと姿を変えた。

「凍った!?」

『舞台となる足場作りです。そして審判を行うのはこの子。降臨なさい門の聖獣！』

光の柱から何かが飛びだした。

翼を持つ三つ首の獅子。

「三頭獣か……！」

未開の辺境にて、ごく稀に発見されるという徊獣。

だが人間の知る三頭獣は、全身が緑色の鱗に覆われた個体のみ。いまレンの上空に現れたのは全身が雪のように白い希少種だ。

『天界にのみ生息する特異個体です。コレに打ち勝つことができるかどうか。しかと拝見いたします』

浮上していく愛天使。

それにかわって降下してくるのは白の巨獣。その二つ首でレンを睨みつける聖獣が、氷の大地に降り立つや、荒々しい咆吼を上げる。

音の津波。

あまりの轟音に聴覚が一瞬麻痺。目眩にも似た感覚にレンが陥るなかで、白の聖獣が凍りついた小型船めがけて跳躍。

それにレンが身構えて。

「うるさ――――い、黙れこの子犬っ！」

轟音。

目を血走らせたキリシェの跳び蹴りが、三頭獣の頭を直撃した。

まるで小石のように軽々と吹き飛んでいく獣の巨体が、そのまま氷の大地を真っ二つに割り砕く。

「このわたしが、よりによって……うぅ……こんなにも船酔いで苦しんでいるのに、わざわざバカみたいな大声を上げるとはいい度胸だな！」

海面に浮かぶ三頭獣。それが既に気絶していることにも気づいていないのか、その頭を足蹴にして怒りを爆発させる竜の姫。

「小生意気な子犬が。貴様が吼えるからわたしの頭痛がいっそうひどくなって……うっ……叫んだらまた吐き気が……」

「おーいキリシェ、そいつもうとっくに気絶してるから」

「……気絶……なるほど。つまりもう……静かになったわけだな……」

青白い表情ながらも満足げにうなずく本人。天界の審判役であるはずの門の聖獣ですら、竜の姫にとっては子犬も同然なのだろう。

「でも俺の出番は？」

「阿呆。仮にも竜帝と一戦交えたお前が、こんな子犬と戦ったところで何になる。待っててやるから、さっさと行って戻ってこい」

ふらふらと船の中に倒れこむキリシェ。

海面が凍りついて揺れがなくなり、そのおかげで船酔いも少しずつ解消されるだろうが、まだまだ全

快にはほど遠い顔色だ。

「おおかた、こうなる気がしたんですわ」

豊満な胸の下でフィアが腕組み。

「だから言ったでしょう。今さら審判なんて意味ないと」

『……納得しました』

唖然(あぜん)とした面持(おもも)ちで愛天使(キユービツド)が呟(つぶや)く。

『人間(レン)、あなたを今から天界へと案内します。フィア様も同行ということで』

「もちろん」

「あれ？　そうだ。念のため確認だけど、キリシェとエリーゼはここに残る？」

天界、地上、冥界(めいかい)。

三界を統(す)べる天使、竜、悪魔の間で結ばれた不可侵(ふかしん)条約。三百年前に英勇(えいゆう)エルラインの仲介によって結ばれた契約は現代でも有効だという。

事実、竜の渓谷(けいこく)を訪れた時は大天使(フイア)も先代魔王(エリーゼ)もその掟(おきて)に従っていた。

「……ここで待ってる」

青い顔で船にうつぶせになりながら、キリシェ。

「アタシとキリシェが天界なんて行ったら大騒ぎでしょ。女神の法印(ほういん)なんてパパッと頂いてきちゃいなってば」

キリシェの背中をさすりながら答えるのはエリーゼだ。その様子からも、二人が待機役というのは最初から予定どおりということだったのだろう。

「では行きましょう。レン、こちらですわ」

光柱の発生源たる巨大な大聖塔(オベリスク)、その中心めがけて飛びこむフィア。光の柱へと彼女の姿が吸いこまれるように消えていく。

「え……ええと」

『フィア様の真似(まね)をすればいいですわ。さあ、光の柱に飛びこんで』

三本の大聖塔(オベリスク)を指さす愛天使(キユービツド)。

「普通の人間でも平気なんだよな。言っとくけど、光の中を飛んでいけとか無理だぞ？」

『ご安心を。とにかく光に触れてみればわかりますから』

「……わかった」

こくんとうなずき、そして船首(せんしゅ)を蹴(け)って飛び上がる。

虚空へ。

蒼海と蒼天とをつなぐ光の道へと、レンは第一歩を踏みだした。

‖‖‖‖‖‖‖

天界の審門を越えた少年と大天使。

二人の姿が消えるのを待って、それまで燦然と輝いていた光の柱も徐々に光量を失っていく。その一部始終を見守りながら――

「行っちゃったね。これで上手くいけば法印二つめ。あとは冥界に行ってアタシの現魔王から法印を回収すればいいだけかぁ。案外楽にいけそう？」

「女神の許可が出ればの話だがな」

船上で空を見上げるエリーゼの呟きに、ようやく起き上がったキリシェが返す。

「あの女神のことだから、カルラのような戦闘沙汰になることはないだろうが。……まあ、とにかく秘境の経験を積むことは重要だ。門の聖獣の時はああ言ったが、レンが人間であることは変わらない。この先どんなに強くなったとしてもだ」

寿命では竜や天使、悪魔に遠く及ばない。

受けた傷の場所や経過次第では、本当に些細な傷でさえ致命傷に至ることがある。

英勇エルラインが三十年を生きることなく息を引き取ったように。

……人間は弱い生き物だ。

その人間であるレンが、終焉戦争の地である『あの島』の地を踏みしめた時に何を感じ、そして何と対峙するのか。

「まだ足りない。もっと、もっと必要になる」

「強さ？　それとも経験？」

問答を試すような口調で聞き返してくる先代魔王に。

「それは――――」

「うんうん、『ソレ』は？　って、どしたのキリシェ？」

「話しすぎたら、また船酔いがひどくなった……」

再び、キリシェはゴロンと船底に寝ころんだ。

Record.2 | 天界

1

天界シオ・シャルニエ・ルー。

その『世界』は、光り輝く雲海（うんかい）がどこまでも広がる空間だった。

大地という概念（がいねん）はそこに無く。

虹色に輝く雲がまるで綿のように固まり、足下を形成。踏みこめばわずかに沈み、だが数センチ下には確かな硬質（こうしつ）の感触がある。

宝石のように煌（きら）めく果実のなる樹（き）。

そのすぐ横には、さらさらと流れる天の小川が雲海の果てまで続いている。

「ここが……」

「あらためまして。天界へようこそ、レン。感想はどうですか？」

「夢の世界って言われても信じそうな光景だよ」

理想郷。

桃源郷（とうげんきょう）。

そして楽園。

ソレを形容する言葉こそ多種多様だが、過去、世界中のあらゆる画家や作家が焦（こ）がれ、思い描（えが）いてきた幻の光景が目の前に実在していた。

「すごいとしか言えないよ。……想像以上に想像どおりって言うしかない」

「ええ。そもそも人間がお伽話（とぎばなし）で語っている楽園も、大昔に天界に迷いこんだ者の経験談に由来するも

のですからね」

　輝く雲海の表面を歩いていく。

　ゆっくりと道案内をしてくれるフィアに、レンが指さしたのは頭上の蒼穹だった。

「なあ先輩、天界の上にも『空』があるんだ？」

「いいところに着目しましたね」

　立ち止まり、自分が指さした空を一緒に見上げる大天使。

「先ほど審門を通ってきてわかるように、天界とは地上よりはるか上空にある場所です。その高度は雲よりも高い」

「……うん。それは、ここまで昇ってきたから何となくわかるけど」

「中間層なのですよ」

　ふわふわと沈む雲海を、フィアが靴先で突いてみせる。

「天界と呼ばれる世界は厳密には空そのものではなく、空と地上の中間に作られた空間なんです。そこに暮らす存在が私たち天使であり、先ほどの三頭獣であると」

「え!?　てことは地上からも、見上げれば天界を見つけられるとか」

「肉眼には映りませんよ。天界の審門と同じく、その手の隠蔽法術は天使の得意分野です。とはいえ、さすがに天界全域を覆い隠すとなれば天使といえど至難の業。これを維持しているのが女神レスフレーゼ様というわけです」

　周りの景色を示すように、両手をいっぱいに広げてみせる大天使。

「女神様のいらっしゃるのは『熾天の園』と呼ばれる天界の中心です。そうですね、ここから数時間も歩けばつくでしょう」

「そんなに近いんだ？」

　天界の広さは、レンも気になっていた点の一つだ。

　地上全体より大きいということはさすがにないと思っていたが、女神のいる場所まで数日間は歩き通さないといけないことも覚悟していた。

「天界の審門は天使が地上と行き来するための道ですから。そのほとんどは『熾天の園』に近い場所に繋がっているというわけです。もちろん実際には天界の広さも相当ですよ」

　前方を歩きながら、フィア。

「ところでレンは、竜の渓谷で竜帝以外の相手とは戦いましたか？」

「それがまったく。だってあの場所は竜の渓谷だろ。見かけたのはどれも竜だけだったからさ。でもそれが何か？」

「竜の渓谷は、秘境の中でも特殊な場所なんですよ。秘境あるいは魔境と呼ばれる場所のほとんどは多種多様な徊獣の住処になっていることが多いんです。だけど私の知るかぎり唯一、秘境リ・インファリエルだけは竜しかいない。つまり、あの場所が秘境の典型だと思うと痛い目を見てしまうことになる。ほらあそこ」

暢気な口調でフィアが指さしたのは宝の大樹だった。

銀色の幹に、黄金色の葉をつけた煌めきの樹。その影の下で眠っている巨大な白の獣は、ついさっき天界の審門で見たばかりの――

「門の聖獣!?」

「しっ。声を出すと起きちゃいますよ」

艶やかな唇に指をあてて大天使がウインク。

「それにほら、上も見て」

「上？」

言われるまま頭上を仰ぎ、レンはその場で凍りつくように固まった。

空飛ぶ石像。その手に青銅色の三叉槍を握りしめ、自分やフィアたちを監視するように頭上を旋回し続けている。

「有翼像まで!?」

地上では、鉱巨人と同じく古代遺跡の守護者の代名詞的な存在だ。

とはいえその発見事例は非常に少ない。

遺跡と呼ばれるものの中でも、特に旧い遺跡でないとまず遭遇しない聖獣。それが二体、三体。みるみる数を増やして頭上に集まってきている。

「天界は天使だけの住処でないことが、よくわかるでしょう？」

あくまで余裕の微笑を崩さないフィア。

これが天界の常識であると。動揺一つ見せない落ちつきが何より明確に伝えてきている。

「たとえば人間は、自分たちの生活を脅かす存在を『徊獣』と定義してきました。それと逆のことが此処では起きるんです」

門の聖獣にとって。

有翼像にとって。

その平穏な生活を脅かすのは人間。徊獣とよばれるべきは、人間の方なのだと。

「……そうだよ、な」

聖フィオラ旅学園にいる時は考えたこともなかった。

だけど今ならそれもわかる気がする。

〝人間、お前は全ての竜に仇なす敵だ〟

竜帝カルラが自分にそう告げた時の気持ち。

それは間違いなく、いまフィアが教えてくれた事実そのままなのだろう。

「世界録を探す。あらゆる人間とあらゆる旅団が、その目的のために今も世界中を巡り、遺跡を踏破し、秘境を荒らして回っている。ですが、それは果たして本当に『善い』行いだと思いますか？」

「……」

「レン、あなたにはその意味を知っておいてほしいのです。世界中の秘境を探検してきた英勇エルラインが、なぜ自らの探検や活躍を世間に広めることなく、世界録に書き残すだけに留めたか」

世界録を探す。英勇の足跡を追う。

それは決して形だけのものであってはいけないのだと。

自分を見つめるフィアの横顔は、真摯なまでにその願いを訴えていた。

「……うん、ちゃんと考えるよ」

「そう言ってもらえて嬉しいです。すぐに『わかった』とか『理解した』と言わず、これから先も考え続けてくれることを素直に約束してくれる。その純朴さがあなたの好いところです。出会った時からずっと変わらない。……もう、本当に可愛いんだから」

「え？」

「い、いえ。ちょっとした独り言です」

急によそよそしい様子で顔をそらす大天使の少女。

「そんなことより、せっかくなのだから天界を案内しますわ。女神様のいる『熾天の園』はこの道をまっすぐなのですが、少し寄り道をしていきましょう」

道――

フィアが指さす場所には地上でいう「道」らしい道はなく、綿のような雲海が敷き詰められているだけだ。

「レンは果物は平気でしたよね」

「俺？　ああ、好き嫌いは特にないけど」

「それはよかった。でしたら、滅多にない機会なので宝石樹の果実を味見してみますか？」

　進行方向を変え、右手側に見える宝石樹を指さすフィア。

　銀色の幹と枝をした大樹。

　そこに茂る葉は金色で、枝の先端には色とりどりの輝く果実が実っている。

「ええと……これとこれがいいかしら」

　果実はどれも綺麗な球形。

　輝く色合いと質感はまさに本物の宝石そっくりだが、その中から橙 色に輝く果実と、淡い黄緑色に輝く果実をフィアが手に取る。

「レン、違いがわかりますか？　匂いをかいでみて」

「ん？　あれ、こっちの橙色の実、お酒っぽい匂いがする」

　宝石のような外見とは裏腹に、手に持ったその果実の感触はやわらかく瑞々しい。だが何よりレンの気を引いたのはフィアの言うとおり、その匂いだ。

　黄緑色からは甘酸っぱい柑橘系の香り。

　橙色の果実からは、甘い香りの中にもどこか酩酊を誘う酒類のような匂い。

「こちらの黄緑色が熟す前の実です。宝石樹の実が熟すことで橙色になり、お酒と似た成分を果肉に蓄えるようになります。ちなみに、どちらを試してみますか？」

「……こっちの黄緑色の方。俺、未成年だから酒はダメだもん」

「言うと思いました。ここは天界ですから、人間の規則に従う必要もないのに」

　そう言いながらもフィアの表情は楽しげだ。

　レンのかわりに橙色の果実を口にする大天使。実そのものは掌に収まるくらい小さくて、女性であっても気軽に一口で食べられる。

「どうですか」

「意外。ちゃんと果物の味がするんだな」

　レモンとリンゴを混ぜ合わせて、そこに蜂蜜を加えたような味。

　酸っぱすぎず甘すぎず清涼感のある風味が心地良い。地上の人間が『果実』と言われて思い浮かべるものとまるで同じ感覚だ。

「てっきり宝石みたいに硬いか、すげぇ不思議な味がすると思ったんだけど」

「果物が甘いというのは天界も地上も共通ですわ。でも天使は、むしろこちらの熟した実の方が好きで

すけれど」

　橙色の実を口にするフィア。

　そこから漂う酒類（アルコール）の香り。それもレンが思わず息を止めたくなるほど強烈な濃度だが、当のフィアはそれを美味（おい）しそうに食べている。

　もちろん顔色一つ変えていない。飲酒のように酔った様子も皆無（かいむ）だ。

「……フィア先輩がお酒好きな理由がわかった気がする」

「ええ。地上のお酒は、私にとっては故郷の味そのものなのですわ」

　愛（いと）しげに銀色の木の幹を撫（な）でるフィア。

　と思いきや、すぐに彼女は雲海（うんかい）のはるか先を指さして。

「さて、また歩きますよ。天界の雰囲気は掴（つか）んでもらえたと思いますので、ここからは女神（レスフレーゼ）様の場所に向かいつつ、その間に天使（なかま）がいれば、彼らにもレンを紹介したいですわね」

「え？　俺を？」

「もちろん。そのために天界に連れてきたんですもの」

「……すごい緊張しそう」

　古来から、人間は天使を高位存在として扱ってきた。

　それはレンも同じ。聖フィオラ旅学園で接してきたフィアが例外というだけで、やはり天使と会うと言われるだけで緊張が背中を走りぬけていく。

「挨拶（あいさつ）ってした方がいいのかな？」

「それは場の雰囲気次第ですが、あまり堅苦しく考えなくても平気ですよ。たとえば早速ですがレン、左手側の向こう。見えますか？」

「……あれは？」

　彼方（かなた）まで続く雲海（うんかい）の向こう。

　雲海から数メートル浮いた状態で、空を飛んでいく軽武装の天使たちが三体。

　金髪の男らしき天使は手に鎗（やり）。その左右を飛ぶのは少女の外見をした天使で、彼女たちは杖（つえ）と弓をそれぞれ携（たずさ）えている。

「あの三体って、兵士か何か？」

「巡回ですわ。地上には天界の審門が数多くありますからね。隠蔽法術（いんぺいほうじゅつ）で隠しているといっても、人間に知られている審門も少なくありません。いつどこから望まぬ侵入者が天界に忍び込んでくるかもわかりませんので、そういう場合には多少強引にでもお引き取り願う。そのための警備みたいなものです」

「へえ……」

とはいえレンが意外だったのは、その天使が武装しているということだ。

無縫の天衣という神秘的な衣装をまとっていることは聞いたこともあったが、鎗や杖、弓を携える姿は人間と何一つ変わらない。

「天使があああいう鎗とか杖を持つのって、何か意外かも」

「あれは法術で具現化した飾りのようなものですよ。侵入者――主に天界に入ってくる人間に対してですが、天使とはいえ、非武装よりも大仰な鎗を構えていたり錫杖をかざす方が厳かに見えるでしょう？」

「じゃあ、実際には見た目だけなんだ」

「天使の力の根源は法術ですからね。とはいえ法術で具現化しているわけですから、武器としても特別な力がありますよ。精霊使いが扱う精霊具のようなものです」

審門を昇ってくる前のこと。

愛天使の放った弓が海面を凍りつかせた光景は、まだ記憶に新しい。

「でも懐かしいですわ」

武装した天使たちを見てクスッと吐息をこぼすフィア。

「実は私も、一時期は愛天使たちのように弓矢を嗜んでいた時があったんですの」

「フィア先輩が？」

「はい。こう見えて、弓の腕前にも自信がありますわ」

片目をつむってみせる大天使。

確かにレンから見ても、見目麗しい彼女には剣や鎗といったものより、弓矢を可憐に構える姿の方が映える気もする。

「もう弓は使わないんだ？　先輩なら似合いそうだし見てみたかったけど」

「私も気に入ってはいたのです。でもね……」

ふっ、と哀愁を感じさせる雰囲気でもってフィアが首を横にふる。

「ある日、とても残念なことに気づいてしまったのです」

「残念なこと？」

「ずばり、『弓矢使うより、思いきり拳で殴った方が強くないかしら？』と……才能とは残酷ですわ。あんなに頑張って練習した弓よりも、単なる暴力の方が強いなんて」

「残念にも程があるだろ!?」

「ともあれ、それに気づいてからは武闘一筋ですわね」

達観した面持ちでそう告げるフィア。

と――そんな表情もそこそこに、彼女が再び遠くの雲海へとふり向いた。

「フィア様！」

「先ほど地上から凄まじい力の放出を感じましたが、やはりフィア様でしたか」

三体の武装天使たち。

彼らが自分たちの存在に気づくや、空を渡って一直線に近づいてきていたのだ。

「よくぞお戻りになられました。同胞一同、心よりお喜び申し上げます」

「レスフレーゼ様もお待ちのことでしょう」

空を羽ばたく天使たちが降下。

雲海に降りたつや、フィアの前に跪いて頭を垂れる。

「皆、身を起こして頭を上げなさい」

穏やかな声音でそう告げるフィア。

その背中に純白の翼を顕現させて、天界第二位の大天使は微笑で応えた。

「私こそ長らく天界を不在にして苦労をかけました。女神様は変わりないですか」

「はい。今も『熾天の園』にいらっしゃいます」

身を起こした三体の天使のうち、鎗を携えた逞しい男性型の天使が口早に返答。一方で、残る二体の天使が見つめる先はフィアの後ろに立つ自分だった。

「ところでフィア様。その人間は、まさか剣帝エルライン――」

「いいえ、レンという別人ですよ」

その質問も予想の内だったのか、可笑しそうにフィアが首を横にふる。

「なんと別人!?」

「剣帝の時代から二百年もの月日が経つとはいえ、これ程までに生き写しの者が……」

じっと見つめてくる天使たち。

関心を抱きつつも、同時にどこか試すような視線。

……まあそうだよな。

……聖フィオラ旅学園でだって、数え切れないくらいこんな目で見られてきたし。

レンが内心こっそりと苦笑しかけた矢先。

目の前のフィアがぽんと手を打った。

「そうですわ。レスフレーゼ様への謁見(えっけん)が終わり次第、レンを皆にも紹介しましょう」
「え!?　ちょ、ちょっとフィア先輩!」
「しー。そう言っておかないと、レンのことを気にする天使たちが次から次へやってきてしまいますので。そうなると大変ですよ?」
　フィアがこっそり耳打ち。
「レン、ほら後ろ」
「え?」
　言われるまま横顔で振り返って。
　眼前の光景に、そのまま息を止めて目をみひらいていた。

　――視界を埋めつくす数の天使たちが跪(ひざまず)き、自分たちを見つめる光景。

　何十体。いや優に百を数えるかもしれない。
　いつの間に。
　……天使の隠蔽法術(いんぺいほうじゅつ)?
　……こんな大勢の天使たちが、すぐ数メートル後ろに集まってたなんて。
　武装の天使もいれば、天衣だけをまとった天使もいる。
　愛天使(キューピッド)のように十歳(さい)にも満たない少女のような姿から、レンより二回りは大柄(おおがら)な筋骨逞(たくま)しい男性の天使まで。共通しているのは皆が一様に跪き、無言で自分たちを見上げているということだろう。
「天界の警備にあたる天使たちですわ」
　跪く天使たちを眺め、ごくごく当たり前のようにフィアが口にする。
「天界は広いですからね。巡回に向かう者と、一所に留(とど)まって待機する者に分かれているわけです。そしてこの者たちは後者」
「それで、待機中だから隠蔽法術で身を隠してたのか……」
　フィアに道案内されながら歩いてきた道。
　その途中で目にしたのは門の聖獣(キマイラ)や有翼像(ガーゴイル)といった徊獣(かいじゅう)だけかと思っていたが、その時には既に、自分の姿は多くの天使たちの目に止まっていたというわけだ。
「はー……ビックリした」
「それはこちらの心境だ、人間の少年よ」
　跪(ひざまず)く集団の先頭。

厳めしい顔つきの大柄の天使に、瞬きもせずに見つめられた。

「二百年前に他界したはずの剣帝エルライン。彼の者が再び天界に現れたとなれば、我々とて対応にとまどうのは当然。それもフィア様が自らお連れになられたのだから」

「あら、騒がせる気はなかったのですよ。天使長ゼデク」

愉快そうに声を弾ませるフィア。

「この人間の経緯については、私が地上へ降りる際、女神様に話を通してありますわ。私が今日ここに来た理由も女神様ならお察しのはず」

「畏まりました。ならばぜひ、『熾天の園』へお越しください」

天使長ゼデク——そう呼ばれた偉丈夫の天使が深々と会釈し、足下におろしていた巨大な戦棍を手にして立ち上がる。

「では我々はこれにて」

「ああ、待って。そういえば私も一つ気になっていたのですが」

背を向けようとする天使長を止めたのは、他ならぬフィア本人だった。

「私への迎えとレンへの関心。ここに皆が集まった理由はわかりますが、それにしても数が多くはありませんか？」

「————」

一瞬ためらいがちな表情を見せながらも、険しい顔つきで頷く天使長。

「お察しのとおりです。ここしばらく、警備の数を増やしておりました」

「その理由は？」

「不審な気配。ここ一年ほど、我らが天界へと続く地上の審門近辺にて、正体不明の力の波動を感知したという報告を愛天使から受けています」

「……正体不明とは？」

「神出鬼没の存在です。幾度かは報告を受けて地上に向かったのですが、その時には既に影も形もなく。お恥ずかしい話ですが、いまだ正体を掴むにいたっていません」

この句を継いだのは、天使長ゼデクの脇に控える少女姿の天使だ。

見かけこそ幼いものの、その純白の翼は彼女の全身を覆うほどに大きく、そこからあふれる輝きも他の天使たちと比べて一際際だっている。

この集団の中では、おそらく天使長ゼデクに次ぐ位置。

天使間における正確な命令階級はレンにもわからないが、相当に高い位であるのは間違いないだろ

う。
「なるほど。それでこれだけの数が待機していたと。そこに私がレンを連れてきたので、何か関係があるのかと思ったわけですね」
「はい。ですがもう一つ」
　まっすぐフィアを見つめる天使の少女。
「これは女神様から直々にお話もあるかと思いますが、天使長が申し上げた謎の存在の出没と時を同じくして、地上の人間たちにも動きが見られました」
「人間？」
「旅団です。愛天使の報告では、黒衣をまとった騎士たちが、地上に設置した審門の周辺で頻繁に確認されたとのこと」
「黒衣の騎士？　フィア先輩それってまさか……」
　黒の戦闘衣。
　世界に名を轟かす旅団は数あれど、その単語から連想できる旅団は一つしかない。
　――王立七十二階位特務騎士団。
　覇都エルメキアが擁する世界最大の旅団。
　さらにいえば愛天使の見間違いとも考えにくい。巧妙に隠された天界の審門を知る旅団そのものが、ごく一握りに限られているからだ。
「事情はわかりました」
　冷静な面持ちで返すフィア。
「天使長ゼデク、天官メルセル、皆を連れて任務に戻ってください」
「はっ」
　天使長ゼデクと、彼の隣に控えた少女が恭しく一礼。
　それと同時。
　二人を含む天使たちの姿が霞み、一斉にレンの視界から消失した。
「消えた!?」
「姿を隠しているだけですよ。大気の揺らぎごと結界で覆っているので、移動時の気配も音も感知できません。人間が察知できるとすれば一流の結界士くらいのものでしょうが、あいにくレンは――」
「そういう感知系の法術って、間違いなく俺の一番苦手なやつ」
「ですよね」

素直に肩をすくめるレンに、フィアが珍しくも苦笑をこぼす。

「天使の隠蔽術式は感知できないのに、精霊の声にだけは敏感なんですもの。エリーゼの言うとおり、古代召喚術にありったけの素養を割りふってしまったという仮説も、あながち冗談ではないのかも」

「フィア先輩までソレ言う？」

「人間らしくていいですよ。自分に何が出来ないのか自覚することはとても大事です」

ばさっと背中の翼を大きく羽ばたかせる金髪の大天使。

その姿に――

「……」

「どうしました？」

「うん、さっきの先輩なんだかすごかったなって。あんなに沢山の天使がいたけど、あの中の誰よりもフィア先輩の方が偉いんだろ？」

竜の渓谷で、すべての竜たちから出迎えを受けたキリシェ。

今のフィアもそうだ。普段から気兼ねなく接してくれている彼女たちが、実はどれほど偉大な存在であるのか感じずにはいられない。

……冥界だとエリーゼも同じなんだよな。

……なんてったって先代魔王で、現魔王はエリーゼの弟って話だし。

目の前に立つフィアをじっと眺める。

と。

「レンてば、そんなに見つめられると私の方が照れくさいですわ」

「え？　い、いや違うって！　そんなんじゃ――」

「だけど新鮮な感覚です。今まではほら、聖フィオラ旅学園でもずっと天使という身分を隠してレンに接していたでしょう？　素性を隠して接している時は……いま白状すると、少しだけ後ろめたい気持ちがありました」

懐かしむように目を細め、ふっと表情をやわらげる少女。

「あの時の私は、翼をかくして人間の学園に『侵入』した天使です。同じ学園に所属する先輩のフリをして、英勇に生き写しの姿をした少年へと接触する。でも……その少年本人は、そんな私の正体も事情も知らずに、親切な先輩と思ってくれていた。それがどれだけ心苦しかったことか」

英勇の生まれ変わりだろうか。

そうでなくても、英勇の強さを継承した子孫だろうか。

天使という正体を隠したまま誰より近くで少年を観察し続ける。それはフィアにとって、少なからず罪

悪感を伴う行為だったのだろう。

「でも今はこうして、背中の翼だって隠す必要なく一緒にいられる。それが嬉しいのです。こんなにも開放感あふれる心地になるなんて」

控えめにはにかんで、ほんのりと頬を赤く染める大天使。

照れくさい。

そう口にした言葉は、きっと本心からの一言だったのだろう。照れ隠しに両手を背中に回して空を見上げる彼女の仕草が、何よりも明確にそれを教えてくれていた。

——微笑の大天使。

——その彼女が初めて、秘めていた心の弱さを打ち明けてくれた。

そんな気がした。

「ま、まあ今は先を急ぎましょう」

咳払いしてみせる大天使。

「私たちが天界に昇ってきたことも、愛天使から女神様に報告が入っているはず。そろそろ『熾天の園』に向かいましょう。もうすぐそこですわ」

「……と言われても、雲海でできた大きな雲の丘しか見えないんだけど」

「ええ。あの丘を登れば見えてきますよ」

背中に翼を顕現させたままフィアが歩きだす。

雲の道。雲海でできた丘を登りきったその先に、瑞々しい緑の草花が咲き乱れる野原が広がっていた。今まで見てきた天界の樹がすべて宝石樹であったせいか、見慣れたはずの新緑色の草が懐かしい感覚になる。

「あれが『熾天の園』。女神様のいらっしゃる場所ですわ」

「え？　でもアレは普通の野原じゃ……」

青々とした草原の広がる景色。

女神らしき者はもちろん、天使一体の姿さえ見られない。

「もしや、あの草原にも何か隠されてたり？」

「それは行ってみてからのお楽しみですね」

意味深に片目をつむってみせるフィアの背中を追って、丘を下っていく。

眼下に広がる緑の園。その緑の絨毯につま先が触れたと同時、野の匂いを運ぶ風が、ふわりとレンの身体を覆い包むように渦巻いた。

周囲の景色が一瞬にして変わり――

『ようこそ天界へ。在りし日の剣帝の面影を授かりし人の子よ』

レンは、緑の蔓に覆われた神殿の広間に立っていた。

白亜の神殿。

広間は直径数十メートルという円形で、屋根はレンが見上げるほど高い。

そして、そんな屋根を支えているのは巨大な七本の柱。いずれも緑の蔓に覆われており、白と緑の対比に彩られた美しき調和がそこにはあった。

だが何よりレンの目を引いたのは、神殿の美しさでも荘厳さでもなく――

「レンは運がいいですわ」

「……俺が？」

「なかなか見られる光景ではありませんよ」

隣に立つフィアが愉快そうに声を弾ませて。

「天界の守護者である『七曜の天使』が、こうして一堂に会するという光景は」

七本の円柱。

その柱の前に立つ七人の天使たち。

褐色の肌をした初老の老人に、亜麻色の長髪が印象的な長身男性。逆に一切の色彩が欠落した白髪白肌の少女にいたるまで容姿は様々。

――七曜の天使。

――地上では、より明解に『天界の七大天使』とも称される。

伝説級の悪魔である『五大災』が魔王直下の悪魔として知られているのと同様に。女神直属の部下にして天界の摂理を司る最上位天使の存在は、あまりに有名だ。

「……」

そう、レンが真っ先に注目したのもこの七体の天使たち。

その重圧感。

ただ「見られている」だけで、肌が灼けるような痛みすら覚える。

先の天使長ゼデク、天官メルセルも別格に思えたが、あの二人がはるかに霞んでしまうほどに、七曜の天使たちを前にして感じる圧力は桁違いだ。

「緊張しなくていいですよ。レンに興味を持って集まっただけでしょうから。なにせ私が連れてきた人間です。それに何といっても外見が、ね」

「興味って言われても……だから俺そんなすごい奴じゃないってば」

「剣帝エルラインという人間は、それほどまでに天界にも大きな衝撃を与えた剣士だったということですよ」

すらすらと告げるフィア。

「一つ付け足しておくと、地上では英勇という呼称が一般的ですが、当時のエルラインを知る天使の間では、天界に彼が現れた当時の『剣帝』という異名の方が、彼の代名詞です。ちなみにこの場の七人、こんなに偉そうに構えていますけど、当時は七人総掛かりでエルライン一人に歯が立たずに惨敗してますからね」

『フィア――』

苦々しい面持ちで口を開いたのは、亜麻色の髪の長身男性だ。

『三百年も昔のことを蒸し返すな。敗北を喫したのはお前も同じだろうが』

「あら？　私は七人総掛かりなんて真似はしてませんもの。それに、私一人の方がはるかに善戦していましたし」

こちらは余裕の口調で返すフィア。

「それはさておき、そう堂々と構えられるとレンの緊張が解けません。女神様の守護という立場もわかりますが、しばし広間の外で待っていていただけるとありがたいですわ」

『わたしたちにこの場を離れろと？』

絹糸のように艶やかな白髪を指先で梳りながら、少女姿の天使が小声で呟く。

「『熾天の園』の外とは言いません。単に、この広間の外で待っていてもらえれば」

『しかし……』

『私は構いませんよ、ピィエレ』

安らぎの声。

大いなる愛と慈しみに満ちた声が、白亜の広間にこだました。

『月のミュナ。火のシュラト。水の瑚南。木のヨハン。金のフレオディール。土のルイ。そして日のピィエレ。皆、しばし暇を与えます。休んでいてください』

『……女神様がそう仰るのであれば』

白髪を梳る少女が、背中の翼を大きく羽ばたかせる。

その小柄な身体が宙に浮いて——そう思った直後に、彼女を含む七曜の天使たちは皆、巨大な円柱の前から姿を消していた。

『さて、これで少し気は楽になりましたか？』

その言葉が自分に向けられているのにレンが気づいたのは、フィアに無言で肩を叩かれてからのことだった。

「え？　あ、ええと……」

『そう身体を強ばらせずとも、楽に構えてください』

広間の中心。見上げるほど高い天井から降りたレース地のカーテンから、淡い陽光に透かされて朧気に浮かびあがる小柄な影。

女神レスフレーゼ。

天界を統べる主が、あの薄いカーテン一枚を隔てた向こうにいるというのだから、緊張するなという方が無茶な話だ。

『さて、これでいいですかフィア』

薄膜を伝って響く女神の声。

『地上に降りていたあなたが、かねてより気にかけていたという人間を天界へと誘った。察するに、他の天使たちを交えず、まずは私にのみ話したいことがあるのではないですか。七曜の天使たちをあらかじめ退かせたのも、その人間が緊張するからという理由ではなく、私とあなたと人間だけで話をしたいという狙いでしょう？』

「さすが女神様、ご明察ですわ」

いたずらっぽい笑みを隠そうともせずにフィアが頷く。

『それで話というのは——』

「ええ。ですがその前に、せっかく三人での話し合いですから。お互いに隠し事は無しということでいかがでしょう」

『隠し事？』

疑問の声音で問いかける女神。

一方のフィアは妙に弾んだ足取りで、女神の座すカーテンへと歩いていって。

『フィア？　ちょ、ちょっと……あ、あの……何を……あなたまさか————っ』

なぜか急に慌てたような女神の口調。

薄地のカーテンごしに浮かぶ人影も、動揺したように動きだす。

『こ、こらフィア、やめな……』

「あら失礼。手が滑ってしまいましたわ」

閉じられていたカーテンがさっと横に開かれる。

女神本人による制止の声などまるで無視。女神の座の直前まで歩いていったフィアが、有無を言わさずカーテンの端を掴んでそのまま開いたのだ。

女神の座。

白い羽毛が敷きつめられた絢爛たる白色の長椅子。レンでも余裕で横になれる大がかりな座に――

「こ、こらフィア!?　お主、いったい何をするのじゃ!?」

ちょこんとあぐら座りで腰かける少女がいた。

外向きにはねた蜜色の短髪に、幼げな相貌。座っているので全身像はわかりにくいが、外見の年頃はエリーゼと同じか、せいぜい一、二歳年上といったところだろう。

淡い薄緑の刺繍で彩られた天衣も、小柄な体型に合わせた作り。

今まで見てきた天使長や七曜の天使と比べればあまりに迫力に欠ける姿で、この場でなければレンも愛天使の一種としか思わなかったに違いない。

だがそんな少女の、たった一つ異色ともいうべき特徴はその双眸だ。

――世にも珍しい光彩異色。

――どこまでも深く鮮やかな蒼穹色と、燃え上がる天を映しだすような熾天色。

赤と青の対比はこの世に数あれど。

ここまで深く、そして印象的に空の色味を湛えた瞳の対比はレンも初めて見る。

「ところでさ」

そんな少女をぽかんと見つめながら。

レンは、長椅子の横に立つフィアに向けて首をかしげてみせた。

「フィア先輩、もしかしてその小さな子が……」

「女神様ですわ」

フィアの返事に、思わず少女を二度見してしまった。

「うそ!?　だ、だってさっきの声ってすごい大人びてて、その子が出した声って感じじゃなかったし。それに……正直、俺の想像と違うというか」

「ほら女神様(レスフレーゼ)。レンが困ってますわ」

「むぅ〜〜〜」

頬(ほお)を膨らませてフィアを見上げる光彩異色(オッドアイ)の少女。

その隣に立つフィアはというと、そんな彼女の反応を面白がるように、その膨れた頬を指先でしきりに突いていて。

「ほぉら、女神様(レスフレーゼ)ってば」

「――――ば、ばかばか！　フィアめ、なにをするのじゃ！」

かんしゃく玉が破裂(はれつ)したかのように少女が吼(ほ)えた。あぐら座りから長椅子の上に立ち上がり、隣に立つフィアを握り拳(こぶし)でポカポカと殴りだす。

「わ、妾が天界の面目(めんぼく)を保とうとだな……わざわざ姿を隠して、声を反響させて精一杯の裏声(しやべ)で喋っていたというのに。それを、それをお主(ぬし)はっ！」

「手が滑(すべ)ってしまったもので」

「嘘つけ！　お主、明らかにわざとカーテンを引っ張ったではないか！」

「まあまあ、いいではありませんか。女神様のそのお姿も可愛らしいですよ」

　怒りに顔を赤く染める幼げな少女。

　そして、そんな彼女をあくまでニヤニヤ顔で押しとどめるフィア。

　その様子だけ見ればまるで姉妹。それもフィアの方が見目麗しく知性的な姉で、少女の方がダダをこねる困った妹のような雰囲気だ。

「ほら女神様、お座りになってくださいな。女神の座に立って大声を上げるなんて、それこそ天界の威厳も地に落ちるというものですわ」

「……誰のせいだと思っておる」

　どすんと、再びあぐら座りで女神の座に腰かける少女。

「まったく。天界でもお主くらいの者だぞ、妾のカーテンを断りもなく開ける天使など。しかもまったく悪びれないのだから手に負えん」

「私と女神様の仲ですし」

　楽しげに答え、女神の座に自分まで腰かけてしまうフィア。

「というわけなのですよ。レン」

「そう言われても俺としてはどう返事すればいいのか迷うんだけど……」

　女神の座でフィアの横に腰かける少女。

　蒼穹色と熾天色の光彩異色という双眸こそ印象的だが、逆に言えばそれ以外に目立つ点はない。他の天使のように背中に翼があるわけでもなく、短めの髪も外向きにはねて収まりが悪く、何よりその膨れっ面で腕組みする姿があまりにも幼げだ。

「じゃあ、さっきまで響いてた女神様の声は？」

「この姿と声とで、妾が女神だと言っても恰好がつかないじゃろう。人間は、相手を外見で判断する輩が多いからな。何百年も前から変わっておらん」

　肘掛けにもたれかかる少女。

「ゆえに、人間と接する場合はカーテンを天井からつり下げて、妾はその裏から、声と口調を変えて話すことにしている。……他の人間には言うでないぞ？」

　もはや体裁を気にすることも諦めたのだろう。

　口調こそ妙に老齢めいた話しぶりだが、その声はさっきまでの大人びた慈愛あふれる声でなく、無邪気な少女が気楽に発する声音そのものだ。

「てことはやっぱり、あなたが……？」

「うむ。妾が女神レスフレーゼじゃ。まあ、ひとまずはよく来たと言うべきか。フィアが連れてきた人間となれば天界としても無下な対応はできまい」

頬杖をつきながら女神が首肯する。

が、自分を見つめる表情はどこか陰のある曇った感情を映しだしていて。

「行動には目的が付随する。二百年前、剣帝エルラインが天界を訪れた理由は、絶え間なく続く天界と冥界の抗争を止めようと妾に直訴するためだった。ではレン、その一方で、お主は何を求めて天界へ来た？」

「ここに来た理由……」

「とはいえ、フィアがお前を連れてきた時点で察しはついておるがな。地上で、お前たちは竜帝カルラから『終焉の島』の開放に必要な二法印の一つを得た。その二つめを求めてやってきたのであろう？」

「さすがですわ、そこまでご存じでしたか」

「当然。二法印いずれかの譲渡が行われた際には、残る法印の所有者にもその動きがわかる仕組みになっておる。冥界の所有者である現魔王も、お主たちの動きは掴んでいるであろうな」

目を細める女神レスフレーゼ。

その鮮やかな光彩異色に見つめられるだけで、心の奥底はおろか、自分の過去、さらに未来まで見透かされたような気分になる。

「レンと言ったな。天界を訪れた目的は法印じゃろうが、最終的な目的は世界録か？」

「ええ。俺も、フィア先輩もそれは同じなので」

竜姫、大天使、先代魔王は、かつての仲間であった英勇の軌跡を求めるために。

そしてレンは、世界を巡る冒険の一つの目標として。

その存在だけが噂されている世界録だが、過去数えきれないほど多くの旅団が世界中の秘境を回り、発見できていない至宝。ならばその在処は、まだ人間が一度として足を踏み入れたことのない場所にあるというのがキリシェの説だ。

「女神様は、世界録の場所を知ってるんですか？」

「いいや。それならとっくにフィアに伝えておる。妾とて、あの剣帝が今際の果てに何を書き残し、そしてソレをどこに隠したのか気になってはいる。だが……」

総ての天使を束ねる少女が、その表情に苦渋を描く。

「その隠し場所が『終焉の島』であるとなると、話は別じゃ」

「え？　どうして」

「お主。なぜ妾が、いや女神と竜帝と現魔王が、それぞれ協同しあってまで『終焉の島』を封印したと思っておる」

「……」

訊ね返され、すぐには返す言葉が思いつかなかった。

――誰よりもレン自身が疑問に思っていたことだ。

なぜ終焉戦争の地が、三百年経過してなお隠され続けているのか。

「正直に言おう。あの島には、人間に知られてたくない過去が眠っている。それはレン、特にお主にだけは絶対に知ってほしくない事実じゃ」

「俺に？」

「……妾が言えるのはここまでじゃ。フィア、さすがにお主とて、その先までは告げておらんのだろう？」

レスフレーゼが横目に見つめるその先で。

女神の座に腰かける大天使もまた、口元を引き締めて首肯した。

「ええ。そればかりは私もキリシェもエリーゼも同じ立場ですし。終焉戦争の事は話していません。言葉で伝えて先入観をレンに与えたくないですから」

「そうであろう。つまるところ『世界録があるかもしれない』。その程度の理由で彼の地の封印を解くわけにはいかないというのが女神としての立場じゃ。島を封印して三百年。あの場所が今どうなっているのかは妾にもわからぬ。封印を解いたとして何が起きるか予想のつかない危険を伴う」

「危険を伴うって、そんなに危ない場所なんですか……」

女神すら恐れる終焉戦争の地。

封印を三分割したのは、竜と天使と悪魔による単なる調停ではなかった。法印を揃えぬかぎり何者にも踏み入らせないという、高位存在たちの意思表示そのものなのだ。

「だからこそ悩んでおる。世界録に記されたモノを確かめる意義と、終焉戦争の地を開放することの不安を天秤にかけて。はたしてどちらに傾くか」

「あの……一つ、聞いていいですか？」

言葉を挟むタイミングを見計らい、おずおずとレンは口を開けた。

「言ってみろ」

試すような視線で先を促す女神。

「俺にとっての終焉戦争って……正直、自分の生まれるずっと前に起きて、もうとっくの昔に終わったっ

ていう認識の事件なんです。今の時代の人間は、みんな同じ感覚だと思う」

「ふむ。それで？」

「終焉戦争は三百年前に終わったんじゃないんですか。エルラインが、それこそ目の前のフィア先輩やキリシェ、エリーゼと一緒に戦って終わらせたんじゃ？」

　終焉戦争の終焉。

　それこそがエルラインを英勇たらしめた偉業。なのになぜ竜も天使も悪魔も、人間より遙かに強大な高位存在たちが終焉戦争の地を恐れるのか。

「終焉戦争は終わった。お主の認識に間違いはない」

「じゃあどうして」

「終焉戦争が終わった一年後、『あの島』を封印してくれと女神に頼んだ者が、他ならぬエルライン本人だからじゃ」

「――なっ!?」

　終焉戦争を終わらせた英勇が、終焉戦争の地封印の提案者？

　それは、いったいなぜ。

「あのエルラインが本当にそう言ったんですか？」

「そうじゃ。終焉戦争から一年後、あ奴はたった一人で女神の前に現れおった。当時は、終焉戦争の直後。竜姫キリシェは封印によって地上から隔離され、当時の魔皇姫エリゼリスは自らの肉体を失って転生の儀の最中。このフィアもまた、浅からぬ負傷によって休息を必要としていた」

「……俺もそこまでは知ってます」

　レンにとっては周知の事実。

　一方で人間の歴史書には、三大姫は終焉戦争で戦死したと記載されている。

　終焉戦争後、人前に姿を見せたのは剣帝エルラインただ一人。三大姫の消息について、彼は最後まで沈黙を徹底していたからだ。

「剣帝が残した伝言に従い、妾は、竜帝、現魔王らと共に『終焉の島』を封印した。終焉戦争を鎮めた本人からの言付けだ。無闇に開放などできようか」

「でも女神様？　だとしたら竜帝カルラの行動が矛盾することになりますわ」

　女神の座に腰かけながら。

　隣の少女を見つめるフィアのまなざしには、普段の微笑に取って代わり、氷柱のように張りつめた怜悧な輝きが灯っていた。

「キリシェの話では、竜帝カルラはキリシェに竜の法印を預けたという話でした。『終焉の島』の封印に竜帝が関わっているというのなら、キリシェの頼みとはいえ、そう簡単に竜の法印を渡すことはないはずです」

「そうじゃ。事実、この三百年で竜帝カルラが法印を授けたことは一度としてなかった」

「つまり今回が特別だったと？　それはなぜですの？」

「竜帝カルラは、竜種を代表して『終焉の島』の開放を許可した。エルラインの二番目の伝言のとおりにな」

「二番目の伝言？　待ってください。それ、私も存じませんわ」

身を乗り出すフィア。女神の座から彼女が思わず立ち上がるほどに、その内容は重く、そして衝撃的な事実だったのだろう。

「フィア先輩も知らない？」

「ええ。終焉戦争の直後は、私も天界の湯源郷で身体を休めてました。その時はほとんど昏睡状態で休養していて……エルラインが天界を訪れたことを知ったのは、女神様にそう聞かされてから。そして聞かされた時にはもう、彼は故人となっていました。でも女神様、その二番目の伝言とやらは私も聞いた覚えがないのですが？」

大天使フィアにさえ伝えていなかった事実。

わずかに。

真剣極まりない言葉の内側に、怒りにも似た感情をにじませてフィアが迫る。

「なぜ今まで黙っていたのです。そして彼の伝言とは何ですか」

「……」

「女神様？」

フィアに見つめられる女神レスフレーゼ。

だが光彩異色の少女が見つめる先はフィアでなく、正面にいる自分だった。

「レン、お主は――」

『失礼いたします女神様』

透明感のある清らかな少女の声。

レンのふり向いた目の前。手を伸ばせば触れるほどの距離に、つい先ほどまでこの広間にいた白髪の少女が戻ってきていた。

七曜の天使の一人――『日』のピィエレと女神から呼ばれた大天使。

「なんじゃピィエレ。しばし暇を与えておったはずだが？」

『この者が、至急の報告があると申しております』

後ろ髪を指先で梳る仕草で答える少女。

そんな彼女の横には、白亜の床面に片膝をついて頭を下げる軽武装の男性天使。背中の翼がなければ旅団の騎士といっても通じるであろう屈強な姿だ。

天界の巡回役であろうその天使が――

「頭を上げよ。何事じゃ？」

「はっ！　それが……天界への侵入者です」

「侵入者？」

女神の光彩異色の右目――熾天色に輝く瞳が、その輝きを確かに強めた瞬間だった。

「人間の旅団です。同時に二つの審門から、それぞれ聖獣を破って天界へ侵入。警告を無視し、この『熾天の園』に接近中です」

「なんだ、稀にあることではないか」

蜜色の髪の女神が苦笑。

「見てのとおり妾は話がある。人間の旅団など適当につまみ出せ」

「それが、人間たちの身につけた黒衣により、天使の法術がことごとく弾かれてしまうのです。強力な法術ならば無力化されぬまでも、やはり威力が抑えこまれてしまい、予想外の苦戦を強いられており……！」

「なに？」

女神の声に混じる疑念の感情。

黒の戦闘衣をまとった旅団。一つ見つけるだけでも困難とされる天界の審門を、同時に二箇所襲撃。さらに審門の守護獣である聖獣を打ち倒して天界へ。

その勢いのまま、立ちはだかる天使たちも蹴散らす。

そんなことが可能だとすれば――

「フィア先輩。黒衣の旅団って、やっぱり王立七十二階位特務騎士団で間違いない」

「私も、思いあたるのはそれくらいですわ」

女神の座から立ち上がった彼女が、ゆっくりとこちらへと近づいてくる。

「ピィエレ。七曜の天使はどうしますか？」

『わたしたちは女神様の守護。この広間を守るのみ』

「そう言うと思いました。仕方ありませんわね。人間の旅団であれば一番詳しいのは私でしょうから、私が挨拶に伺いますわ」

　あくまで気品ある足運びで広間の出口へと進んでいくフィア。

「すぐ戻りますわ。レンはこちらに残っていてください」

「――――」

「レン？」

　背を向けようとした大天使が振り返る。

「……待ってくれ先輩」

　不思議そうなまなざしを向ける彼女へ声をふりしぼる。そして、レンは広間の出口にあたる方向を指さしてみせた。

「俺も、行くよ」

　フィアの隣へ。

　金髪の大天使の横へと並び立つ。

「あっちが二手なら、こっちだって二組必要だろ」

「お主がか？」

　レンの言葉にもっとも早く反応したのは、フィアでも七曜の天使でもなかった。

「何のつもりじゃ？　相手はお主と同じ人間であろう。同族じゃぞ。それを天使たちに代わって、人間であるお前が止めようとでもいうのか」

　天界の主・女神レスフレーゼ。

　女神の座にて不動であった少女が立ち上がり、その神秘的な光彩異色でもってこちらを瞬きもせずに見つめてきていた。

「なぜだ？　人間のお主が、静観ならまだしも、なぜそこまで天使の肩を持つ？」

「……」

　天界の代表ともいうべき者にそう問われて。

　レンは、ほんの数秒の沈黙の後に、胸に溜まった呼気をゆっくりと吐きだした。

　全身に感じる微弱な寒気。

　これは、女神とフィアに見つめられている緊張のせい？

　……いや違う。この寒気は緊張なんかじゃない。

　……これは俺の意志で選んだことだから。

「別に、誰の肩を持つとかじゃないよ。ただ……少しだけ、責任みたいなのは感じてる。そっちの理由の方が俺には大きいんだと思う」

「責任？　お主がか？」

「同じ人間だからこそ止めたいんです」

　立ち止まったフィアの隣で、レンは小さく首を横にふってみせた。

「天界に侵入して強行突破ってことにどんな狙いがあるのかはわからない。だけど天使が暮らしてる天界に立ち入るだけならまだしも、そこで一方的に暴れるっていうのは、そんなのは黙ってみていたくない」

「話し合いで収まるとでも思っておるのか？」

「さあ？　とりあえずアッチが疲れはてて諦めるまで持ち堪えたいけど、どうかな」

　苦笑気味に肩をすくめてみせる。

　――相手は王立七十二階位特務騎士団。

　世界最高峰の剣士たちが揃う超一流の旅団。

　天界の天使たちの軍勢に挑み、その防衛を突破しつつあるという。そんな相手を前に、自分が駆けつけたところで状況を好転させられる保証は一切無い。

　言葉での説得も、どれだけ意味があるだろう。

　だが。

「人間とか天使とか抜きにして。俺、間違ってると思うことは黙っていたくないんです。フィア先輩やキリシェから世界録探しに誘われる前から憧れてきた理想の英勇像は、そんなんじゃない」

　自分を認めてくれる仲間と旅団を結成して、未踏の聖域や秘境を巡り、見果てぬ世界の隅々までも歩いていきたい。

　世界の終わりから始まりの場所へ。

　エルライン＝E・マクスウェル。あの偉大な英勇が至った地平にたどりつき、彼が見た光景と同じ光景を自分の目でも見てみたい。

　そしてその道の過程は――

「歩いていく道は、ずっと胸を張って進んでいきたいから。その途中で見つけた聖域を踏みにじったり、荒らしたりなんかするんじゃなくて。でなきゃ英勇もガッカリする。俺が同じ立場なら、そんな奴に自分の大切な手記を渡したくない」

　それは……

自分が偽英勇という蔑称を付けられていたからこそ、より強くそう思うのだろう。

偽英勇と呼ばれる身分だったからこそ、その「偽」という蔑称を払拭するため、誰より正々堂々と歩んでいきたい。

その思いがいつしか、自分の中で理想の英勇像と重なった。

「……」

沈黙を保つ女神。

その様子に、七曜の天使である少女が一歩前に進みでる。

『女神様、あいにくと時間の猶予はありません』

「……わかっておる。急かすなピィエレ」

白髪の少女による進言に手を振って答える女神レスフレーゼ。

「ところでレン、お主はそんな身体で臨む気か？」

「え？」

「餞くらいは与えてやろう」

光彩異色が鈍い光を放つと同時に、女神である少女が片手を上げた。

――光。

天井から陽光にも似た光が降りそそぎ、レンの頭上から全身を包みこむ。

温かく、そして心地よい光。

その輝きを浴びて数秒とたたず、全身を包んでいた気だるい疲労感と、そして骨を軋ませるような全身の痛みが消えていくのを感じる。

「あ、女神様ったらずるいですわ。私が言おうとしてたことだったのに」

思い出したように声を上げるフィア。

「レンあなた、私やキリシェとの訓練で全身が筋肉痛でしたよね。そんな具合なのに自分が行くなんて豪語してたのですか？」

「……だってしょうがないじゃん」

呆れ笑いを隠そうともしないフィアに、レンは肩をすくめてみせた。

「今のは――」

「些細な『加護』じゃ。これをもう少し派手にすると『祝福』という部類になるが、まあ取り急ぎといったところじゃな。今は時間が惜しい」

軽い口調で告げる女神。

とはいえ、朝には歩くのも苦痛だった全身の痛みを一瞬で完治させるほどの法術。

それはもはや治癒力の促進という域には留まるまい。

……これが女神の力の一端。

……さすが、やっぱりすごいんだな。

「ありがとう。身体、すごい身軽になった気がする」

「大したことではない。それより話はまだ終わっておらん。妾をあまり待たせるでないぞ。お主が自分の意志で行くというのなら引き留めはせんが、早々に戻ってこい」

再び女神の座に腰かける少女。

「レン、こちらですわ」

「わかってるって」

広間の出口からフィアと共に一歩外へ。

直後。レンは、再び広大な雲海の上に立っていた。

振り返ったそこに広がるのは瑞々しい植物に覆われた緑の園。すぐ目の前にあるはずの白亜の広間も巨大な円柱も、外部からは影も形も見あたらない。

「……レンのおかげで珍しいものを見ましたわ」

「え？」

「女神の座で、女神様が人間相手に立ち上がるお姿を見たのは本当に久しぶり。もしかしたら終焉戦争の時以来かも。あの方が感情を表に出すほどだから」

愉快そうに目を細めて微笑むフィア。

「相手は王立七十二階位特務騎士団。無理に追い払おうとせず、足止めさえできれば十分です。彼らの目的も気になるところですが……それを確かめることは二の次でしょうね。面倒をかけますが、片方お願いします」

「先輩こそ。天使の法術が弾かれるってのがよくわからないけど、どうするんだよ」

「その点ですが、実は大方の予想はついています」

雲海の先を見据えながら答える金髪の大天使。

「対天使装甲。あの英勇が生を受けるよりもさらに前の時代。天使と悪魔と竜とが、それぞれ三すくみの戦いを繰り広げていた時のこと。その決戦の舞台は天界でも冥界でもなく、地上でした」

「……それは聞いたことがあるよ」

高位存在たちの抗争。

その戦禍によって疲弊したのは、ほかならぬ人間だったという。圧倒的な力の具現者たちの戦いの余波を受けて、人間は逃げまどうしかなかった。

「けれど人間側も、完全な被害者というわけではありませんでした。むしろ高位存在たちが交戦で疲弊している間に、逆に天界や冥界に乗りこんで領土を増やそうと企む人間たちがいました。その者たちは都市に集めた研究者に命じ、天使や悪魔の法術に対抗するための武装を研究させていたのです」

「……武装の研究をそんな昔に？」

「ええ。ですが、その研究は半ばで潰えることとなりました。対天使装甲、対悪魔装甲ともいうべき技術が完成するより先。剣帝エルラインが高位存在たちの争いをたった一人で鎮めてしまったからです」

天使は天界、悪魔は冥界、そして竜は竜の渓谷へ。

互いの領土への不可侵を誓ったことにより、高位存在たちが抗争によって疲弊することはなくなった。と同時に、人間がその隙をついて天界や冥界に侵攻する機会も失われた。

――ゆえの『失われた技術』。

役目を失った技術はいつしか忘れ去られ、遙かな時の渦の奥底へと沈んでいった。

「その技術を発見し、現代用に実現化したといったところでしょうね。覇都エルメキアが抱える研究院ならば不可能ではないと思います」

世界最大の軍事都市・覇都エルメキア。

ただでさえ強力な王立七十二階位特務騎士団がそんな失われた技術を手に入れたとすれば、絶大な力を誇る天使といえど苦戦は必至。

「どうするんだよ。そんなのがあったらフィア先輩だって……」

「そこはご心配なく」

あくまで淑やかに大天使が頷いてみせる。

「対天使装甲。古の『失われた技術』をどれだけの水準で再現したのか気にはなりますが、私もそれなりに自信はありますので」

「……わかった。手はずどおり二手に分かれて、か」

「それでは私は一足先に。――レンの道案内は任せましたよ」

翼を羽ばたかせて浮かびあがるフィア。

その全身が恒星のごとく輝いた。そう感じた直後には、金髪の大天使は無数の光の粒子を虚空に描き、雲海の彼方へと消えていた。

『私たちも行きましょう』

空高くから下降してくる愛天使。

レンが審門へと到着した際に現れた二体のうちの一体だ。

『フィア様のお申し付けです。黒衣の旅団の場所まで案内します』

「ああ、頼んだ」

風切り音を従えて飛翔する愛天使。フィアの消えた方向と正反対の方角を目指すその姿を追って、レンは雲海を駆けだした。

綿のような白雲が幾重にも重なるようにしてできた丘陵。

女神レスフレーゼの『熾天の園』に向かう際に上った丘を一気に駆け上がり、頂上から駆け下りる。

「場所は!?　その黒衣の人間てのはどこにいるんだ!」

『この方向をまっすぐです。しかし……』

頭上を舞う愛天使が、苦虫を噛み潰したように表情を歪ませる。

『まさか天界の事件で人間に手を借りることになるなんて。それも相手は人間……天使の栄誉も地に落ちるとは、まさにこのこと』

「そう?　俺は別に気にしないけど」

『審門の守りを任される身としては複雑な心境です。とはいえ、口惜しいながらも天使の法術が、侵入者に通じなかったのは事実』

対天使装甲。フィアの見込みが正しければ、それは三百年前の終焉戦争よりさらに過去に研究された技術であるという。

……人間の中でも『失われた技術』扱いされる研究。

……人間世界に精通してるフィア先輩だからこそ、かろうじて覚えていた情報だ。

それを他の天使が知らない。あるいは覚えていないのも無理はないだろう。

天使からすれば、人間の旅団など一部の例外を除けば格下も同然。

見下してかかる天使たちの油断をついて王立七十二階位特務騎士団が攻め入った場合、天使とはいえ対応も間に合うまい。

「他の天使たちは?　まだ抗戦してるのか?」

『一部を除いて撤退しています。人間の技術とはいえ侮れないことはすぐにわかりました。それで女神様にご判断を仰ごうと……』

「そういうことか」

わずかに滲んだ額の汗を指先で払いおとし、雲海の道をひた走る。

すれ違う徊獣たち。

門の聖獣そして有翼像。天界の不穏な異変を感じ取ったのか、あるいは天使と王立七十二階位特務騎士団との戦火から逃れるためか。

自分や愛天使とすれ違っておきながらまるで見向きもせず、遠ざかっていく。

『もうすぐです』

「――――」

握る拳がじわりと汗ばむ。

額に浮かぶ汗とはまるで別物の、冷たく粘りのある汗。

そして。

真っ白い雲海が広がる眼下に、漆黒の戦闘衣で武装した旅団が確かに見えた。

『そんなっ、雲海が燃えてる!?』

濛々と立ちこめる炎と煙。天の大地とも言うべき雲海のいたるところから火の手が上がり、無数の火の粉が飛び散っていた。

『嘘でしょう!?　人間の法術に、天界の雲海を焦がすほど高度な術式があるなんて。そんな話は聞いたことないというのに!』

「退がっててくれ」

愛天使を手で制し、レンは雲海の丘から飛び降りた。

「……貴様?」

黒衣の旅団。

その正面に降りたったレンの気配を感じ取り、剣士たちが身構える。

「まさか、この天界で我々以外の人間と出会すとはな。何者だ?」

「通りすがりの学生騎士だよ」

その剣士たちを睨みつけて。

レンは、燃え上がる雲海の中を進みでた。

「話がある。アンタらの旅団を指揮してる統率者はどこにいる?」

Record.3 | 黒の思惑、天の法印

1

天界。

地上の竜、冥界(めいかい)の悪魔と世界の覇(は)を分かち合う、天使の支配する世界。

楽園、あるいは桃源郷(とうげんきょう)。

過去どれだけ多くの絵画や物語の題材となったかもわからないその場所だが、現実には、そこに足を踏み入れることが許されるのはごく一握りの人間のみ。

高度な隠蔽術式(いんぺい)によって隠された審門を見つけだし、愛天使(キューピッド)のもたらす審判を通過し、たとえ運良く天界へ上ったとしても、招かれざる者と判断されれば天使の鉄槌(てっつい)を受けて地上へと追い返される。

だがここに――

「拍子抜けだな」

そんな天界の支配者たる天使たちを蹴散(けち)らして、足下に倒れ伏す天使を見下ろし、剣の切っ先をつきつける騎士たちがいた。

その身を覆(おお)うのは漆黒(しっこく)の軽甲冑(かっちゅう)。

……ガリア大炎山(えんざん)で見た連中と同じ甲冑か？

……いや、なんだあの奇妙な文様(もんよう)は。

甲冑の表面に浮き上がる紫色の光模様。ぼんやりと、朧気(おぼろげ)に輝く光の刻印が漆黒の武装に施(ほどこ)されている。

「天使とはいえ、その力さえ遮断(しゃだん)すればこの程度か」

『ぐっ……』

うつぶせに倒れた天使の少女。

その背中を靴先で踏みつけ、冷たい眼光でもって見つめる黒衣の騎士。

「女神の居場所はどこだ？」

『……』

「沈黙が最善の手だとでも？　ならばその身に訊くだけだ」

鈍色に輝く切っ先が少女の翼にふれる。

そして。

「待てよ、そんな脅しみたいな真似して何になるっていうんだ！」

突きつけた剣が、レンの振るう剣によって弾かれた。

「……貴様？」

黒の長髪を背中で結わえた剣士が振り返る。

鋭い眼光に滲む怒りと驚愕の混色。自分の接近には気づいていただろうが、まさか尋問を力ずくで妨害されるとは思っていなかったのだろう。

警戒の証か。

天使を押さえつけていた足を離すや、後ずさるようにして距離をとる。

『……う……』

「大丈夫か？　愛天使、こいつを安全な場所に頼む」

剣によって傷つけられた天使。人間のように鮮血が噴きだすようなことはないものの、その全身には剣で抉られた痕が痛々しく刻まれている。

そんな彼女をそっと抱え上げ、上空の愛天使へと預ける。

「何の真似だ？」

その一部始終を怪訝なまなざしで観察するのは、黒髪の剣士。

外見の年齢は二十代後半。上背はレンより頭半分は高いだろう。一切の贅肉をそぎ落とした肉体。細身ではあるが脆弱という印象はなく、むしろその佇まいは力強い。

「なぜ人間であるお前が、天使の肩を持つ？」

「人間とか天使とか以前の問題だよ。いきなり天界に押し寄せて力ずくで女神の居場所を聞きだそうだなんて。アンタらのやってることはただの侵略行為だろ」

「力ずく？　それは誤解にも程がある。我々とて、天使たちが我々を女神レスフレーゼのもとに案内する意志があったならば、穏やかに事を進める用意はあった」

「ウソつけ」

「心外だな。何を根拠にそこまで――」

「対天使装甲」

黒髪の剣士が言い終えるより先に、レンは男が身にまとう黒の甲冑を指さした。

紫色の光模様が浮かびあがる戦闘衣。

ガリア大炎山で遭遇した王立七十二階位特務騎士団の下位メンバーの武装には、あんな陰光さながらの特殊加工を施した装備はなかった。

「大昔に廃れた技術を掘り起こしてまで天使対策をしてきたアンタらが、天界で暴れる気はないなんて誰が信じるんだよ？」

「……」

対峙する剣士の双眸が、針のごとく細くなる。

「この甲冑を一目見て、対天使装甲と言いきるか。まだ一切外部に漏れていないはずの『失われた技術』をなぜ貴様が知っている？」

「別に、ちょっとした風の噂で聞いただけだ」

傷ついた天使を愛天使が運んでいく姿を横目に。

レンは、周りを取り囲む五人の騎士たちを見回した。

王立七十二階位特務騎士団――いずれの装備も旅団の特徴である黒の戦闘衣だが、その軽甲冑から奇妙な光の模様が浮かびあがっている。

……前にガリア大炎山で別部隊と遭遇したけど。

……そのおかげだな。

炎の将魔討伐に現れた部隊の甲冑は黒一色だった。

当時の武装と今の武装とを見比べることができるからこそ、その違いを断言できる。

そうでなければ、たとえフィアから対天使装甲の情報を知らされていても、こうも明確に断言することはできなかっただろう。

「王立七十二階位特務騎士団は世界一大きな旅団だ。そんなアンタらの話が世界中で噂に上らない日が一日だってあると思うか？」

「物は言い様だな」

不敵な笑みで返す黒衣の騎士。

「噂？　お前の情報源はそんな曖昧なものではあるまい。覇都の内部に忍ばせた諜報者からか、ある

いは研究機関の筋から入手した情報からか。吐いてもらおう」
「言って、それが何になるっていうんだよ」
「――――」
黒髪の剣士が無言で、手に構えた刺突剣（レイピア）を水平に持ち上げて。

「何をしている、ツィルト」

ツィルト、そう呼ばれた黒髪の剣士の表情が引きつった。
手にしていた刺突剣（レイピア）を腰の鞘（さや）に収め、機敏（きびん）な仕草でもって後方へと振り返る。
彼だけではない。レンの周りにいた五人がすべて同様に剣を収め、声の方向へと姿勢を正していた。
「集まってくる天使の掃討（そうとう）。しかるのち女神レスフレーゼの居場所の尋問（じんもん）。そんな単純な命も忘れたか？」
「……はっ」
緊張した表情で頭を垂（こうべ）れる黒髪の剣士。
厳（いか）めしい重低音の声。
雲海（うんかい）を踏みつけるわずかな足音と、甲冑（かっちゅう）の擦（こす）れる金属音が近づいてくる。
そして。
「ガリア大炎山（えんざん）に派遣させた部隊から報告を受けた。炎の将魔（アシエンデイア）討伐の折、奇妙な四人組の旅団（パーティ）を見たと。あの英勇（えいゆう）エルライン生き写しの騎士（きし）……お前だな？」
片手半剣（バスタードソード）を携（たずさ）えた壮年の騎士。
短く切りそろえた赤銅色（しゃくどう）の髪に、冷たい灰色の双眸（そうぼう）。戦闘衣から露出する肌は幾年（いくねん）もの修練（しゅうれん）のなか灼熱（しゃくねつ）の陽に焼かれることで、黒の甲冑と同化するほど日焼けしている。
……違う。
……周りにいる五人とコイツじゃ、まるで佇（たたず）まいが別物だ。
こくんと、無意識のうちにレンは息を呑（の）みこんでいた。
王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）――覇都エルメキアが擁（よう）する七百二十人の武芸者から七十二人の精鋭を選別（はと）し、構築した世界最大の旅団（パーティ）。騎士王ゼルブライトを頂点として、常に『強い者が上に立つ』という過酷（かこく）な序列競争が行われていることは周知（しゅうち）の事実。
問題は、この男の序列だ。

もっとも有名な秘境の一つである天界に上り、力ずくで天使たちを屈服させる。そんな猛者揃いの部隊を束ねる男の序列が低いわけがない。

「アンタが、この部隊の統率者なんだろ？」

「だとすれば？」

「聞きたいことがある。アンタらがどうして天界に侵攻してきたのか。その理由だ」

「おかしな問いだ。それをお前に伝える必要があるとは思えんが」

表情を変えぬまま、その口ぶりに混じる不敵な嘲笑。

「むしろ訊ねる立場が逆ではないのか？　世界最大規模を誇る我らの旅団が天界の審門の在処を把握し、天界に昇るというのは疑問でも何でもなかろう。世界の秘境、さらには人類の未踏破領域へと挑戦するのが旅団というもの。だがお前たちはどうだ、ガリア大炎山で炎の将魔を退けた旅団『再来の騎士』よ」

そう告げる男の言葉に揺らぎはない。

絶対の自信。ガリア大炎山で炎の将魔と戦ったのが自分やキリシェたち四人であると、そう確信している口ぶりだ。

「一月前まではまったくの無名だった旅団。それもわずか四人で構成された新設旅団が炎の将魔を撃破。さらに天界の審門を見つけだしたうえに、門の聖獣を倒して天界へと昇ってくる。とても幸運の一言で片付けられるとは思えんな」

「……」

「つまりはそういうことだ。お前と、残る三人の娘で構成された謎の旅団。その素性が一切不明であるからこそ、『再来の騎士』はまたたく間に世界中から注視されることになったわけだ。お前たちが考えている以上にな」

「だから喋らない、か」

レンは、王立七十二階位特務騎士団の武装が対天使装甲であることを知っている。

一方で相手もまた、レンが『再来の騎士』の一人であると確信している。

ゆえに沈黙。

相手の情報を一通り掴んでいる。それを互いに理解しているからこそ、核心に迫るための内容は単語一つとて迂闊に発することができない。

……こいつらの目的は。

……対天使装甲の実験？　いや、それだけじゃないはずだ。

女神の居場所を聞き出そうとしていたことから、彼らの標的はあくまで女神のはず。

気がかりなのはその先だ。女神の場所へたどりついたとして、王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の狙（ねら）いはいったい何だというのか。

睨（にら）みあいながら、互いに相手の腹を探りあう。

だが――

「埒（らち）があかんな。時間の無駄だ」

片手半剣（バスタードソード）を『熾天の園（してん　その）』の方角へと向ける騎士。

「この者はひとまず放置する。優先すべきは女神の拘束。先の愛天使（さつき　キューピッド）は、負傷した天使をあの方向へと連れていった。――追え」

「はっ！」

同時に応（こた）える五人の騎士たち。

……やばい。

……今ここで六人同時に動かれたら、俺一人じゃ止められない。

どうすれば王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の注意を引きつけられる？

標的となる女神以上に、この場の六人の意識を自分へと集中させるために何ができる？

提示できる切り札があるとすれば、それは――

「狙（ねら）いは女神の法印（ほういん）だろ？」

直後。

今まさに雲海（うんかい）を駆けようとした黒衣の騎士（きし）たちの足が、止まった。

「……いま何と言った？」

「天界（ここ）はアンタらにとっての最終目的地じゃない。あの場所に行くのに女神の許可が必要だから、それを力ずくで迫（せま）るためにやってきたんだ。違うか？」

射貫（いぬ）くような眼光（がんこう）でもって睨（にら）みつけてくる壮年の騎士。

その視線が何よりの答え。

……やっぱりだ。目的は女神の法印。

……世界録（アンコール）が『終焉（しゅうえん）の島』にある可能性まで、既にこいつらは知っている。

手のひらに浮かぶ汗。

それを、悟られぬようにこっそりとぬぐい取る。

今のはレンにとっても諸刃（もろは）の剣に等しい博打（ばくち）の一言だ。

王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の狙いが別のものであれば、さらに世界録についての情報を与えてしまっていたか、そうでなくてもただ無視されていただけだっただろう。

だが勘（かん）は当たった。

いや、思い返せばそれを感じさせる動きは確かにあった。

「ガリア大炎山（えんざん）で、炎の将魔討伐（アシエンデイア）にアンタらの下位部隊が遠征に来てた」

「それは周知（しゅうち）の事実。だがそれがどうした？」

「予行練習」

凄（すさ）まじい重圧でもって告（つ）げてくる騎士に、レンは淡々（たんたん）とそう告げた。

「天界の次は冥界（めいかい）に向かう気なんだろ？　冥界を探索（たんさく）する前に、五大災（ごだいさい）やその配下の高位悪魔の力を量（はか）る願ってもない機会ができた。だからアンタらは急遽（きゅうきょ）、わざわざ海を越えてガリア大炎山に部隊を派遣させたんだ」

思えば、あの時も王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）は部隊を二つにわけていた。

一部隊は炎崖都市ジオ（えんがい）を守るため。そしてもう一部隊は、自分たちと同じく山頂を目指しつつ悪魔の妨害を突破していた。

「本当の目的は、冥界に行く前に悪魔との実戦経験を積むこと。だけど周りは旅団だらけ。それで万が一にでも自分たちの狙いを悟られないために、わざわざ一部隊を炎崖都市に配置した。こうすれば周りから見た遠征理由はあくまで都市の防衛。自分たちの目的をごまかす口実ができるってわけだ」

そして間違いない。

世界録（アンコール）が終焉戦争（しゅうえん）の地に隠されていること。そしてその地が竜と天使と悪魔とで封印されていることまで、覇都エルメキアは情報を掴（つか）んでいる。

「違うか？」

「……」

六人の黒衣の騎士（きし）。

その十二の瞳（まなこ）が、瞬（まばた）きもせずに自分へ集中するのを確かに感じる。

「興味深いな」

赤銅色（しゃくどう）の髪の騎士が、その片手半剣（バスタードソード）の切っ先をこちらに向ける。

「よほど我々の警戒を天使からお前自身へと逸（そ）らしたいと見える。……なぜだ？　お前がそこまでの情報を手に入れるに至（いた）った経緯（けいい）も気になるが、なぜそうも、人間でありながら天使に味方（ほう）する。天使の法

術で洗脳されたか？　あるいは、それだけ大きな対価を女神から約束されたということか？」

「いいや。アンタらのやってることがただの侵略で、それが見てられないだけだ。人間だとか天使の立場とか、そんなの俺には一切関係ない」

「侵略？」

「女神のところには行かせない。アンタらが女神のところに行けば、天使との間で壮絶な戦いになることは目に見えてる。ああ、そっちはそれでもいいかもしれない。だけどな、そんな侵略を受ける側の立場はどうなるんだよ！」

天使と悪魔との戦いで、結果的に地上が被害を受けたことはあった。

だがその反面、歴史上一度として、天使自らが人間を制圧する目的で地上に降りてきたことはない。

……フィア先輩を見てればわかる。

……俺だけが特別なんじゃない。彼女は誰に対しても優しかった。

高位存在たちの中で、天使はもっとも人間に対して好意的な種族と言われている。

そして事実、聖フィオラ旅学園での四年間、彼女は自分以外の生徒にもわけへだてなく優しくふるまっていた。

「いい加減にしろよ。人間と天使が争って何になる！」

「まるで大昔の英勇のような発言だな。姿だけでなく言葉まで再現か？」

片手半剣の切っ先を向ける騎士。

部隊を率いるその男に、横から声をかけたのは先の黒髪の剣士だった。

「――カサディン隊長、取り囲まれました」

レンの周囲に立つ六人の黒衣の騎士。そんな彼らをさらに包囲するかのごとく、何十体という天使たちがその頭上から降下してきたのだ。

……加勢が間に合った。

……これだけの数の天使なら、この六人が『熾天の園』に行くのを妨害できる。

『よく時間を稼いでくれた』

『人間に助けられるのは複雑な心境ですが、感謝します』

巨大な戦棍を携えた天使長ゼデク。そして天官メルセル。天界の巡回を担う天使たちを率いる二体の長が、レンの両脇へと降下してくる。

「いかがしますか」

「すべて計画の内だ。何一つ大勢は動かん」

統率者である、赤銅色の髪の騎士が片手を水平にかざしてみせる。

序列二位・外法騎士カサディン。

騎士の最高峰たる王立七十二階位特務騎士団における幹部の一人。騎士を目指す者ならその名を知らぬ者などいないであろう世界有数の実力者だ。

「そうか……アンタがあの外法騎士」

「ほう。私の名を知っているか。とはいえ対天使装甲の存在を知っているお前が、今さら何を知っていようと驚くには値しないがな」

片手半剣をゆっくりと振り上げる黒衣の騎士。

「ツィルト、スクナ、ディクソル、レイ、ネスリート。お前たち五人、この目障りな天使どもを拘束しろ。今度こそ確実に女神の居場所を吐かせる」

「はっ。しかしこれだけの数となると時間が……」

「構わん。我々の前にこれだけの天使が集まった。つまりそれだけ西の第二部隊への防衛、そして女神近辺の警備が手薄になるというわけだ」

何十体という天使を前にしてなお、王立七十二階位特務騎士団の序列二位には微塵の動揺も見られない。むしろ、その口元にうっすらと好戦的な笑みさえ浮かべ。

「いざとなれば女神拘束の手柄も、序列四位の部隊にくれてやる。そんなものより遙かに愉快な相手がいる」

灰色の視線が見据えるのは天使長ゼデクでも天官メルセルでもなく。

――自分。

周囲を取り囲む天使たちの挙動を気にした風もなく、外法騎士の異名で知られる男があまりにも堂々とした歩調で近づいてくる。

「英勇に生き写しの騎士がいた。炎崖都市から帰還した部隊からその話を聞いた時は他人のそら似とタカをくくっていたが、中々に興味深い。お前は何者だ？　赤の他人か、それとも本物の英勇の生まれ変わりだとでも言うのか？」

「冗談だろ。俺が本物の英勇なら、とっくにアンタらを力ずくで地上に追い返してる」

天使の重圧とは違う、人間の騎士特有の威圧感。

反射的に後ずさりしそうになる衝動を押し堪え、レンはその場に踏みとどまった。

「なるほど。だが、まんざらその気がないわけでもないのだろう？　私と、この場の五人をどうにか足止めしたいと。ちょうどいい、対天使装甲の実験にも飽いた頃合いだ。天使とはいえ、しょせん七曜の天使

以外は烏合の衆か」

『貴様――』

「待った」

声を上げかけた天官メルセルを制し、レンは自ら前に進みでた。

「王立七十二階位特務騎士団のことなら俺の方が詳しい。こいつの相手は俺がする。残りの五人の動きを見張っててほしいんだ」

「詳しい？　それは大いなる誤りだな。お前も、そして世界のあらゆる旅団と都市国家も同じこと。覇都エルメキアの全容を知る者など存在しない」

不遜とも言える口調で断言する騎士。だがその男には、それが過信でも過言でもないと言いきれるだけの風格が備わっていた。

「しかし一興。お前と、そして旅団『再来の騎士』の正体、この私が見極めるとしよう。お前が英勇の再来だというのなら尚のこと。お前、騎士王、そして剣聖シオンを越え、剣士の頂へ昇りつめるまで！」

「あとの五人、任せた！」

天使の少女にそう言い放ち、レンは天の雲海を蹴った。

序列三位・外法騎士カサディン。

王立七十二階位特務騎士団の幹部として名を知られた騎士ではあるが、その戦闘方法はレンも聞いた記憶はない。そもそも序列三位という幹部が、こうして部隊を率いて覇都の外へと現れることそのものが稀であるからだ。

……剣士としての技量で比べたら、間違いなく今の俺じゃ太刀打ちできない。

……だけどそれは問題じゃない。

この戦いの目的は、剣士としての雌雄を決することではない。

王立七十二階位特務騎士団に天界侵攻を諦めさせる。そのために、ここでどれだけ相手を疲労させることができるかが焦点になる。

なにしろここは天界。

彼らからすれば天使の本拠地そのものの場所だ、そうそう長く居座れるわけがない。

が――

「時間稼ぎの算段か。その程度の決意でどこまで私に抗える？」

刹那。

足下の雲海を切り裂いて、鈍色の何かが飛んできた。

「これはっ!?」

反射的に虚空へと剣を突きだす。ギチッと鈍い音を立てて鋼の刀身に食いこむ鋭利な小剣が、レンの足下へと落下した。

「懐剣？　いや……」

護身用の短刀に酷似しているが、決定的な違いはその刃先だ。対象に食らいつくようなかぎ爪型に設計された剣など大都市の武器工房でもそう簡単には見られない。

「暗器!?」

「外見に似合わず博学ではないか」

右手に長大な刃渡りをほこる片手半剣。

そして左手に、同時に四枚もの円盤状の刃――羅漢銭を握る外法騎士カサディン。

暗器。

その起源は諸説あるが、もともとは護身用として懐中にも忍ばせやすい携帯用の武器であったものが、いつしか『極めて察知されにくい』小型武器として進化し、都市の王家も恐れる暗殺者の武器として認識されるに至ったという。

だがそれも過去の話。

暗器など、レンも学園の資料館で読んだ記憶があった程度だ。

「……王立七十二階位特務騎士団は剣士の集団じゃなかったのかよ」

「いかにも。だが剣技の習得など通過点に過ぎぬ」

こちらの挙動を凝視する序列三位。

「騎士の能力を最大限に活かす他の技能を習得し、はじめて王立七十二階位特務騎士団における序列の上位を目指す権利が与えられる」

騎士と法術士。

騎士と武闘家。

旅団において区分されている技能一つに飽きたらず、さらに派生した技能を極めることで高みを目指す。そうでなければ熾烈な序列の奪い合いに対抗できない。

それが王立七十二階位特務騎士団。

最上位の剣士たちが集まり、その中ですら残酷な序列が決定する。旅団内での苛烈な競争こそが、

王立七十二階位特務騎士団総員の実力を向上させてきた。

「そして私は――」

「暗器術を習得した騎士ってわけか！」

手首と指先の返しだけで、四枚もの羅漢銭を同時に放つカサディン。

無挙動。

石を投げるように腕を肩まで持ち上げるわけでなく、走りながら、まるで動きの予兆を感じさせずに投じられる無気配の羅漢銭。

「く……！」

後退ではなく、レンが選んだ選択は前進だった。斜めに身体を割りこませる走法で踏みこみ、四枚の円盤型の投剣のうち二枚と交叉するようにすれ違う。

残り二枚。

空を切り裂いて飛来する鋭利な円刃。その軌道を瞬き一つせずに追いかけて――

「そこだ！」

すくい上げる一閃。レンの振り上げた剣先が狙い違わず、カサディンの投じた羅漢銭をカサディン自身へと弾きかえした。

「何っ……！」

投じた暗器が自分へと襲いかかってくる。

その思いがけぬ反撃を前に、外法騎士と呼ばれた男が後ずさった。

「暗器は過去の遺物。この時代に、私以外の暗器使いと戦った経験があるとも思えんが？」

「ああ。だから初めてだよ」

手のひらに収まる大きさしかない羅漢銭を剣でとらえる。

弾くことには自信もあったが、その狙いがカサディンの前進方向と重なったのは偶然に近いものがある。

「初見？　それであの極小の投剣を見切るか」

「あいにくと……」

足下の雲海に落ちた暗器を一瞥し、レンは再び剣を構えた。

「その類の鍛錬は、もう何年も嫌になるくらいやってきた」

正々堂々――学生騎士同士の太刀の応酬では、相手の剣から逃げずに正面から敵の剣を受けとめ、力で制圧することが「勇敢」であり「優秀」と評価される。

騎士らしさとは山のように不動、そして烈火のごとく攻めること。

……だけど。

……俺は、その戦い方じゃ誰にも勝てなかったから。

だから必死で考えて。そのうえで、一日たりとも欠かさず努力してきた。

誰もが寝静まった真夜中の聖フィオラ旅学園。

冷たい雨に打たれながら無数の水滴目がけて剣を振るい、風の吹きすさぶ夜には、宙を舞う木の葉を相手に剣を握り続けた。

剣の柄を握る掌（てのひら）の皮がやぶけて真っ赤に腫（は）れ上がった早朝も――

膨れあがった手の肉刺（マメ）が潰（つぶ）れ、剣の柄が血に染まった夜も――

……それに俺一人だけじゃない。

……キリシェも一緒だ。

〝水の一滴、炎の一片を捉（とら）えて刹那（せつな）の一刀で穿（うが）て〟

〝エルラインの剣技は、その境地（きょうち）のさらにはるか先にある〟

自分から剣を握って練習に付き合ってくれたキリシェ。彼女と磨きあげた剣技が、今、外法騎士（げほうきし）の放つ暗器（あんき）をも捉えることを可能にした。

「アンタの羅漢銭（らかんせん）は速いけど直線的だ。そんな単純な軌道なら、どれだけ高速だろうと反応できないわけがない」

「なるほど。多少、力量を見誤っていたか。しかし――」

右手の片手半剣（バスタードソード）を水平に持ち上げる序列三位。

「コレは、どうする？」

振り上げられる片手半剣（バスタードソード）。

そうレンの意識が感知した瞬間、王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の幹部の姿が一瞬ブレる。

直後。

カサディンの構える片手半剣（バスタードソード）が、レンの頭上にまで迫（せま）っていた。

「くっ!?」

咄嗟（とっさ）に剣を頭上へ。

両手で剣の柄を握りしめ、振り下ろされる片手半剣（バスタードソード）を受けとめる。

ミシッ

剣と剣とが重なる甲高い金属音ではなく、レンの鼓膜に響いたのは、自らの肩の筋肉が猛烈な衝撃に耐えきれず悲鳴を上げる音だった。

「逸話によれば、剣帝エルラインの剣撃は大地を割り砕く古今無双の豪剣であったという。ならば、その生き写しであるお前も同類の剣士と考えたが、違うな。見た目どおり、その脆弱な身体でできる技など女子供にも劣る弱き太刀」

「……ぐっ」

レンは両腕で剣を支えている。

だが片手半剣を握るカサディンは片腕のみ、しかもまだ余裕さえうかがえる。

「それが全力だろう？　先の暗器を防いだ時点で、お前が剣士として何を鍛え上げてきたのかは理解した。剣の精度と反応は認めよう。だがそれは、お前自身が自らの肉体性能に不安を覚えていることの証でもある」

じりじりと圧される剣。

……剣の鍔迫り合いで圧倒されるのは覚悟してた。

……だけど相手は片手で、しかもまだ様子見。ここまで差があるっていうのか。

聖フィオラ旅学園の教官の中にも一流旅団で活躍していた騎士がいる。

だが、そんな教官の剣を受けた時すら比較にならぬ太刀の重み。外法騎士と呼ばれながらも、その根底にあるのは純粋な騎士としての強さに他ならない。

「そして」

右手で絶えず片手半剣を押しながら、左手に『何か』を握るカサディン。

それが何であるか理解するより先。

「これで終いだ」

至近距離から、手首の返しだけで放たれる円月輪。

木の葉のように薄く削られた円形の刃が二枚、剣を握るレンの両肩めがけて飛来する。

……間に合うか？

剣を一瞬で手元に引き戻すと同時に後方へ跳躍。

勢いあまった片手半剣の剣が雲海に突きささるのにも目をくれず、レンは後方へと跳びながら空中で剣を袈裟がけに振り下ろした。

金属特有の残響。

「ぐっ!?」

脇腹をよぎる鋭い痛み。

円月輪（チャクラム）の片方を剣で打ち落として二枚目をかわす。だがレンが身体（からだ）を反（そ）らすより先、わずかに円月輪（チャクラム）が届くのが速かったのだ。

「零距離（ゼロ）で私の暗器（あんき）をかわす反応は凄（すさ）まじいな」

レンの眼前に再び迫る外法騎士（げほうせまきし）。

再び片手半剣（バスタードソード）が振り上げられるのを視認してすぐ、レンは剣で迎え撃つ選択肢を捨て、後方への連続跳躍を選択した。

……こいつの剣をまともに受けても、今とまるで同じ展開になる。

……至近距離で暗器を投げつけられるだけ。

が、離れた雲海に降りたつレンの両足に、凄まじい激痛が走ったのはその時だった。

「痛（つ）っ！　これ……は……鉄条網（てつじょうもう）？」

レンの跳躍したまさにその場所に、茨（いばら）の棘（とげ）を模（かたど）ったような鈍色（にびいろ）の破片がびっしりと足下を埋めつくしていたのだ。

喩（たと）えるなら、素足で硝子（がらす）の破片を踏み抜いたようなもの。

鋼鉄でできた棘状の刃がレンの靴底を突き貫（つらぬ）き、足裏を抉（えぐ）るように傷つけたのだ。靴を脱げば、足裏は既に血だらけになっているに違いない。

「これも……暗器の一つだっていうのかよ」

「撒菱（カルトロップ）という設置型の罠（わな）だ。馬に乗った騎兵（きへい）や、大地を徘徊（はいかい）する徊獣（かいじゅう）もコレ一つで足を封じられる」

いつの間に設置していたのか。いや真に恐るべきは、レンの跳躍場所を事前にぴたりと読みきっていた勘（かん）の鋭さだろう。

「お前の足は死んだ。もはや、先のような俊敏（しゅんびん）な跳躍（ちょうやく）も反応もできまい？」

「……」

唇を噛（か）みしめて、レンは足下を見下ろした。輝く綿のような雲海（うんかい）。だが自分の立っている場所だけが、わずかに赤く血に染められている。

――これが外法騎士（げほうきし）。

――剣士と、そして暗器（あんき）使いの両技術を極めた者の最終形。

長大な間合いをほこる片手半剣（バスタードソード）を片手で操りながら、無数の暗器を同時に仕掛けることで敵を追い詰める。

長距離では羅漢銭(らかんせん)や円月輪(チヤクラム)といった投剣で体力を削り。

相手がそれに気を取られた瞬間、必殺の片手半剣(バスタードソード)で一気に攻めたてる。それが避(よ)けられた場合でも、撒菱(カルトロツプ)の設置によって相手の動きと体力を削り続ける周到(しゆうとう)さ。

片手半剣(バスタードソード)だけでも世界有数の剣士。

だがカサディンという男はそれに飽(あ)きたらず、王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)の序列階級を駆け上がるために、さらなる強さを求めて暗器という答えを導き出したのだろう。

あらゆる間合いで相手を封殺する我流の闘技。

公然と「外法」——すなわち邪道(じやどう)と称されるほどに、こと対人戦におけるカサディンの強さは、その徹底的な勝利への執念にある。

ゆえに序列三位。

……あといくつ、そしてどんなタイプの暗器を隠し持ってる？

……それがわからないと近づくことも危険すぎる。

足裏の激痛によろけそうになるのを必死で堪(こら)えながら、外法騎士の一挙手一投足を見逃さぬよう注視する。

「私の暗器を警戒しての不動を選ぶか。だが、お前はそこから動かざるをえない」

「……なんだって？」

「爆(は)ぜよ」

外法騎士の宣告(せんこく)。

呼応するがごとく、レンの足下にまき散らされた撒菱(カルトロツプ)が一斉におぼろげな光を発し、それがみるみるうちに自分をとりまく巨大な方陣(ほうじん)を描(えが)きだす。

「法術円環(ほうじゆつえんかん)!?　撒菱(カルトロツプ)に法術を仕込んで……！」

吹き上がる炎。

輝く雲海を染め上げるのは、色鮮やかな緑玉(エメラルド)色の炎。一見すれば目を奪(うば)われそうになる幻光めいた炎だが、その美しさが逆に恐ろしい。

……ここに来るまでに見た黒煙(こくえん)。

……ずっと気になってた煙の原因がコレか！

天界をも焦(こ)がす炎。

その膨大(ぼうだい)な熱量にあおられ、一瞬にして全身から汗が噴(ふ)きだすのがわかる。

「くっ！」

その場で身を大きく旋回。両足と脇腹に走る激痛に表情を歪ませながらも、背後で膨れあがる炎の追跡を回避する。

だが――

炎の海が割れた。

法術の炎を切り裂いて、そこに飛びこんでくる黒い人影。

「そうだ。逃げるとすれば此処しかあるまい」

全ては策謀。火勢の弱い場所をあえて一か所残しておくことで、相手を誘引。そこに先んじて回りこむことで確実に仕留める。

「いいや――」

眼前に迫る黒衣の騎士。

一撃必殺の威力をそなえた片手半剣を握る男に対して。

「わかってたさ。俺が来るまでに天使たちにも同じ戦法を仕掛けたんだろ？　だからさっきも黒煙が上がってて、愛天使が驚いたんだ」

「……なに？」

炎に囲まれた瞬間、レンもまた同時に理解していた。

「アンタが次に何を狙ってくるのか」

それは――

この戦いで唯一、勝利を確信した序列二位が見せた驕りだった。

「火の始原精霊！」

レンが左手に握る大天使の羽。

その神具が光り輝くと同時、レンの頭上に顕現したのは紅蓮の炎の翼を持つ精霊だった。

『……消ス？』

「いいや、逆だ！　思いっきり膨らませろ！」

『ワカッタ！』

小さな竜を模った姿の精霊がうなずく。

紅蓮に染まる爆炎。

レン、そしてカサディンの背後で燃えていた緑玉色の炎が、より強い紅蓮の色へと移り変わり、一瞬で火勢を増大させて破裂した。

「なっ……精霊だと!?」

片手半剣（バスタードソード）を振り上げた姿勢のまま、突然の熱波（ねっぱ）に弾かれて吹き飛ぶ外法騎士（げほう）。

吼（ほ）え哮（たけ）る炎の渦。

無数の火の粉を巻き上げて爆散（ばくさん）した炎が、さらに――

「火の始原精霊（サラマンダー）？　お前……」

自分の剣を握りしめたまま、レンは頭上に浮かぶ精霊を見上げた。

――紅蓮（ぐれん）の精霊剣。

黒衣の騎士（きし）を吹き飛ばした炎の波が空中で凝縮し、それが渦を巻きながらレンの持つ剣へと収束していく。

精霊の炎が刀身へと宿（やど）り、輝きを宿した紅蓮の剣へと昇華させていた。

「なるほど……」

身にまとわりつく火の粉を振りはらう序列三位。

レンと、レンの持つ紅蓮の精霊剣、そして火の始原精霊（サラマンダー）とを交互に見比べながら。

「お前が精霊を従える二人目の適格者。あの忌々（いまいま）しき『碑文の三賢者（ひぶんのけんじゃ）』の箴言（しんげん）も、あながち世迷（よま）いごとではなかったということか」

「碑文の三賢者？」

それに答えぬまま――

「ここが天界だったのは生憎（あいにく）だな。大地から離れた場所では、地の始原（ノーム）精霊は力を発揮できまい？」

「地の始原（ノーム）精霊!?　なんでお前がそれを……！」

「言（は）ったはずだ。覇都エルメキアの全容（ぜんよう）を知る者など一人としていない、とな」

序列三位・外法騎士（げほう）カサディン。

王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の幹部として名高い騎士だが、逆に言えばこの男もまた一人の人間に過ぎない。特殊な察知（さっち）能力や霊感があるわけではない。それがなぜ、この場に顕現（けんげん）していない精霊の存在まで知っているのか。

「さて、ここからだ」

吼（ほ）える黒衣の騎士。右肩にある甲冑（かっちゅう）の接合部に手をあてた直後、その男は、自らの手でもって漆黒（しっこく）の装甲（そうこう）を肩からはぎ取っていた。

「甲冑を……？」

「なに、対天使装甲の一部を外しただけだ。天使どもを相手にするのには多少便利だが、この装甲はま

だ実験途中。私には窮屈すぎる」

ゆっくりと肩を回す黒衣の騎士。

その眼光が、レンの手にした紅蓮の精霊剣へと注がれる。

「貴様は精霊を召喚した。そして私も余計な枷は取り外した。続きといこうではないか」

外法騎士、その異名を持つ男の威圧感がさらに膨れあがる。

枷を外したという表現は誇張でも脅しでもない。それが嫌でも伝わってくる。

「往くぞ」

片手半剣を握る外法騎士。

そしてカサディンとレンとが同時に、一直線に相手を見据えて雲海を駆け――

「そこまでだ。その戦、『精霊の調べ』が預かろう」

落ち着きはらった知的な声音。

それが突如として、レンとカサディンとの間に割って入った。

「互いに剣を収めたまえ。もはや機は失われた。これ以上の戦いには意味がない」

「……ガブリエ!?　貴様、旅団『精霊の調べ』の一員がなぜここにいる！」

「なに、ちょっとした野暮用だよ」

片眼鏡をかけた知的な雰囲気の法術士。

――求道者ガブリエ。

剣聖シオン率いる旅団『精霊の調べ』の一員にして、法術士の最高位『求道者』の階級を授与された世界的術者だ。天使や悪魔の法術にも匹敵する新法術を幾つも見いだし、その名と功績は世界中に知れわたっている。

「野暮用だと？」

対し、片手半剣の切っ先を向ける外法騎士。

「くだらぬ空言を。お前たちが『終焉の島』の存在を調査し、そして封印解除の二法印の在処まで把握していること。我々が知らぬとでも思うか？」

「だとすれば？」

「お前をここで逃すわけにはいかんな。わざわざ仲裁気取りで介入したつもりだろうが、女神法印を手

に入れるのは王立七十二階位特務騎士団だ」

「それは、もう片方の別部隊のことかな？」

長身の法術士が、仰々しい仕草で肩をすくめてみせる。

片眼鏡ごしにカサディンを見つめ――

「撤退したまえ。既に序列四位の部隊は地上に追い返されている」

「なに？」

「天界最強の大天使フィア。大昔の伝説かと思っていた天使だが、その力の一端を目撃できたのは僥倖だった。君たち自慢の対天使装甲も、単なる拳の暴力には効き目がなかった。つまりはそういうことだ」

憐憫の表情をうかべる法術士。

「察するに君たちが陽動。もう一つの隠密部隊こそが女神を拘束するための構成だったのだろうが、こうした奇襲は時間との戦いがすべてだ。しかし第二部隊は地上に戻され、そして作戦も、既に時間が経ちすぎている。言っただろう。既に時機は失われたと」

「……」

「くり返そう。引き返したまえ」

「嫌だといえば？」

本心であると同時に、個人的な興味としての問い。そう感じさせる意味深な口調でもって訊ねる外法騎士カサディン。

対し――

「あいにくと、あたしらも天界に用があって来たのよね」

「わっ!?」

ぽんと肩に手をのせられて、レンは小さく跳びはねた。まるで気配も姿も感知させないまま、黒髪の少女が自分の隣に立っていたのだ。

肩が剝きだしの風変わりな紅白のローブを羽織った小柄な少女。

年齢はレンと同じくらいだろう。小柄ながらも快活そうな表情と口ぶりと、勝ち気な子猫のような面立ちが印象的と言える。

……隠蔽結界でここまで近づいてきた？

……まるで気配を感じなかった。

今まで見てきた天使の隠蔽結界と比べても、勝るとも劣らない高位術式だ。

「結界士・夏蕾。『精霊の調べ』が二人、ということは……」

「そそ。もうすぐ剣聖もここに来るわよ」

余裕すらうかがわせる表情でカサディンに返す少女。

夏蕾――法術士の最高位『求道者』の階級であるガブリエと同様に、結界士の最高位『大巫女』の階級をわずか十五歳で取得した天才少女。

レンでさえ、聖フィオラ旅学園の在籍中に幾度となく噂を聞いた覚えのある名前だ。

「『精霊の調べ』と、やる？」

「――――」

沈黙。

だが数秒と経たぬうちに、苦笑の吐息をこぼしたのはカサディンだった。

「なるほど。天界をとりまく天使たち、エルラインの再来、そしてお前たち『精霊の調べ』。同時に相手取るのは面倒か」

「感情に流されぬ冷静な判断だ。さすがは王立七十二階位特務騎士団の序列三位」

片眼鏡の端を指先で押し上げるガブリエ。だがそんな法術士ではなく、外法騎士が睨みつける視線の先はレンだった。

「女神の法印は預けておく。覇都エルメキアにて待つぞ、英勇の再来よ」

「覇都？　なに言ってるんだよ。なんで俺が……」

世界最大の武力を誇る都市国家。

王立七十二階位特務騎士団の拠点でもある地。そんな場所にむざむざ出向くのは、敵陣に真っ向から突入するようなもの。

「覇都になんか行くと思うかよ。それに俺は英勇の再来なんかじゃ――」

「なぜ、私が上の始原精霊のことを知っていたと思う？」

片手半剣を鞘に収めながら、カサディン。

その口元に浮かぶ奇妙な冷笑。

「精霊の怯えの正体を知りたくば追ってこい、精霊を従えし騎士よ」

「精霊の怯え？　どういうことだ……！」

「いずれわかる。女神の法印を携え、覇都エルメキアへ挑む時に嫌でもな」

背を向ける序列三位。それに応えるように、周囲の天使たちと一進一退の攻防を続けてきた残る五

人も陣を敷くように集結する。

　そして――

「消えた!?」

　カサディンを含む六人の姿が、淡い光に包まれて消失した。

「キミ見えない？　あそこに天界の審門があるじゃない」

「どこにさ」

「あいつらが消えた場所。隠蔽術式で隠されてるけど、そこから地上に戻っていったのよ。さっきガブリエが言ったでしょ。あの六人は陽動役。大暴れして天使たちを引きつける。でも予定外の反撃を受けた時に備えて、いつでも逃げられるように審門のすぐ近くで戦ってたってわけ」

　さも当然とばかりに、六人の消えた場所を指さす結界士・夏蕾。

「世界録の場所、王立七十二階位特務騎士団も見当がついてたわけね。騎士王もようやく重い腰を上げたのかしら」

「いや、昔から水面下では動いていたんだろう」

　大人びた口調で返す片眼鏡の法術士。

「今回は我々が天界を訪れたことで、ようやくその実態を捉えることができただけだ。他の世界中の旅団はそれすら知るよしもない」

「まあそうね。今回も、介人のタイミングは際どいところだったみたいだし。ただ、そのおかげで珍しいものも見れたから儲けものかしら」

　いたずらっぽい笑みを浮かべ、流し目で見つめてくる夏蕾。

「ふーん？」

「な、なんだよ……」

　じろじろと頭からつま先まで無遠慮に眺め回される。観察？　いや、まるで値踏みされているような心境だ。

「キミが、あの『再来の騎士』の一人ってわけね」

　少女が視線で促す先――

　レンの携えた紅蓮の精霊剣と、そしてレンを慕うように浮遊する火の始原精霊。

「あ！　そうだ。ずっと出っぱなしだったもんな。もう大丈夫だよ」

『モウイイノ？』

「ああ。このとおり平気だから」

頷いてみせると、それを察したのか火の始原精霊（サラマンダー）の姿が消滅。それから間もなくして、レンの剣に宿っていた紅蓮の輝きも消えて鋼（はがね）の剣へと戻っていく。

その一部始終を眺め。

「さて、そういえば自己紹介がまだだったな」

淡々（たんたん）とした口調で告（つ）げたのは片眼鏡（モノクル）の法術士（アリア）。

「俺はガブリエ。そして君の隣にいる貧相（ひんそう）な体型の少女が――」

「殴るわよ？」

「……失敬（しっけい）。君の隣にいる細身で可憐（かれん）な少女が夏雷（カレイ）。とはいえ、もう流石（さすが）に我々のことは察しがついているだろう」

「精霊の調べ、だろ」

結界士（エンチャンター）・夏雷。

そして法術士（アリア）・ガブリエ。

この二人の名前は、レン自身、学園にいる頃から何度聞いたかわからない。

旅団（パーティ）『精霊の調べ』――

剣聖シオンが率いる、世界でもっとも名高き旅団（パーティ）だ。わずか四人という構成員ながらも、四人全員が各技能（タイプ）における超越者たちであるという。

「ありがとう……って言えばいいのかな。仲裁（ちゅうさい）してもらって助かったよ」

剣を鞘（さや）におさめ、レンは深々と息を吐きだした。

外法騎士（げほう）と戦い続けることは自分にとっても利点はない。旅団『精霊の調べ』の介入で王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）が撤退（てったい）を選んだのならば、結果的には手を貸してもらったことになるのだろう。

「礼には及ばないわよ。英勇（えいゆう）のそっくりさん？」

「あの……一応、レンて名前があるから。そっちで呼んでもらえると」

興味津々（しんしん）のまなざしで見つめてくる夏雷の言葉に、レンはようやく、自分がまだ二人に名乗っていないことに気づいた。

――名前がわからないんだもん、「英勇のそっくりさん」としか呼べないでしょ？

――キミの名前教えてもらえるかしら。

暗にそう示した夏雷の言葉に、自分（レン）が答える形になったわけだ。

「へえ。レンて言うんだ。なるほどなるほど」

しきりに頷く少女の横で、片眼鏡の法術士が淡々とした口調で。

「確認になるが、ここに君がいる目的は女神法印。さらに言ってしまえば世界録の在処と思われる『終焉の島』の封印開放にある。違うかな？」

「……それは」

「君は嘘をつけないタイプだな。顔にそう書いてある」

微苦笑のガブリエ。

「しかし残念だな。君がここにいるとわかっていれば、シオンも是が非でも天界に昇ってきたんだろうが」

「っ！　そうだ、あの剣聖シオンは――」

若き最高位剣士。

王立七十二階位特務騎士団の騎士王ゼルブライトと並び、現代最強の剣士という栄誉を二分する剣聖が、周りを見わたしてもどこにもいない。

「そういえば、さっきもうすぐここに来るって」

「あー。あれ嘘よ」

「え？」

「だって、さすがに王立七十二階位特務騎士団の上位六人相手にするのは面倒なんだもん。ガブリエはともかく、あたしは結界士だから支援役だし。とりあえずシオンの名を出せば連中も怖じ気づいて帰ってくれるかなって」

愉快そうに手をふる夏蕾。

「シオンなら地士よ。今頃、審門の聖獣と追いかけっこしてるんじゃない？」

「追いかけっこ？」

「守護獣だからって、それだけだと傷つける理由にならないっていうのがアイツの主張。で、そんな非暴力主義者が剣も使わずに聖獣から逃げ回ってる間に、あたしとガブリエで審門を上ってきたの」

「……シオンて、そういう奴なのか？」

剣聖シオン。

騎士の最高位という称号から、レンが自然と想像していた剣聖シオンは、まるで別の野心溢れる騎士像だ。どこまでも好戦的で、好敵手を望んでいる。

そう思っていた。

「まあ、たぶんキミが考えてる剣聖のイメージとは正反対だと思うわよ。良い意味でも悪い意味でも。喩

えるなら世界で一番暢気な騎士って感じ？」

「そんなところだな」

苦笑気味に首肯するガブリエ。

「先の話に戻すが、今回は珍しくシオンの勘が外れたわけだ」

「ね。アイツの予想じゃ、次にキミたち『再来の騎士』が現れる場所は聖地カナンだろうって話だったんだけど」

「俺たちが、聖地カナンに？」

天界でも冥界でもなく。

天才結界士の少女が口にした地名は、精霊信仰の拠点たる都市だった。

旅団『カナン巡礼聖教船』の拠点でもあり、何より、世界で唯一と目される古代召喚術の使い手である聖女の住まう都。

「そそ。そんな話をあたしとシオンと、あとエリエスとで話してたの。聖地じゃとっくにキミたち『再来の騎士』は有名人よ。むしろいつ聖地に来るかって話題になってるんだけど、そういう情報知らないの？」

「……あいにく全然」

〝もしもお前が望むのならば、謁見については私がエリエス様に話をしておこう〟

カナン巡礼聖教船の幹部・武闘家タイラスが残した言葉。

結界士の中に、遠隔地に念話を送る術式を習得した者がいることはレンも知っている。優れた術者ならば海を越えた聖地へも念話を伝えることもできるはず。

とはいえ、精霊信仰の地でこうも大きな話に発展しているとは思っていなかった。

「だけど、どうしてさ。俺たちの動向なんて……」

「気にかける理由ならば簡単だ」

片眼鏡ごしに、知的なまなざしでこちらを見つめる法術士。

「俺たち『精霊の調べ』と『再来の騎士』。我々は世界録を巡る競争相手であると同時に、二百年前に起きた終焉戦争の謎を解き明かさんとする同志でもある。そうだろう？」

「……終焉戦争」

その単語と共にレンもまた理解した。

目の前の二人。そして二人の所属する旅団『精霊の調べ』は、世界録と終焉戦争とが密接に結びつ

いていることまで確信を持っているのだと。

「察するに、君もまた、君にしかない情報を有しているのではないかな」

「俺が？」

ガブリエと夏蕾（カレイ）。

二人の視線を感じながら、レンは我知らずのうちに奥歯を噛（か）みしめていた。

……違うんだ。

……俺はまだ、そんな段階にたどり着いてない。

終焉戦争（しゅうえんせんそう）について自分が知っていることなど本当にごく一部。

エルラインと共に終焉戦争を戦い抜いた三大姫（さんだいひ）——キリシェやフィア、エリーゼのみが知る真実。だがそれは、彼女たちですら容易に話せるものではないという。

「ええと、すぐに信じてもらえるかわからないけどさ」

二人を交互に見わたして。

レンは、自嘲（じちょう）にも似た苦笑を浮かべてみせた。

「確かにアンタらが教えてくれたことには思いあたる部分もある。ここに来た理由が女神の法印（ほういん）だっていうのもそのとおりだよ。だけど……」

「ふむ？」

「俺は、すぐに結果（ぜんぶ）を知りたいって思ってないんだ。いつかは世界録（アンコール）も見つけられると嬉（うれ）しいし、終焉戦争のことも確かめたい。だけどまだ、そんな先のことを考えるよりもさ、仲間と一緒にいられるのが今は嬉しくて……」

キリシェ、フィアそれにエリーゼ。

世界録（アンコール）を探すだけなら、彼女たち三人だけの方がはるかに効率的だっただろう。

竜帝（りゅうてい）カルラが懸念（けねん）するように自分一人が足枷（あしかせ）となり、その結果として彼女たちが窮地（きゅうち）に陥（おちい）るようなことが起きないとも言いきれない。

……だけど、それでも俺を旅団（パーティ）に誘ってくれた。

……その期待に応（こた）えたいから。

何より、ずっと憧れていた世界を巡る旅を終わらせたくない。

「まだ俺、旅団（パーティ）に誘ってもらったばかりでさ、最終目的っていうのは考えたくないんだ。到達地点を決めて、それで終わりっていうのにはしたくないから」

「なるほど。ならば君の意向はシオンにも伝えておこう」

「どんな反応するか楽しみね。じゃ、あたしらはここで退散するから。女神サマの法印の方はよろしく」

「退散？　え、ちょ、ちょっと待った！」

　あっけなくきびすを返すガブリエと夏蕾（カレイ）。二人が歩きだすより先、レンは慌てて彼らの正面に回りこんだ。

「どういうことだよ。女神の法印は？　そのために天界（ここ）まで来たんじゃ……」

「法印は君に預けておく」

　真っ先にそう答えたのは求道者（ぐどうしゃ）ガブリエだ。

「先に告（つ）げたとおり、我々は世界録（アンコール）を巡る競争相手（ライバル）だ。しかし剣聖シオン率いる『精霊の調べ（われ）』が求めるのは、さらにその先にある『終焉戦争の真実』だ。それを解き明かすためならば、他の旅団（パーティ）に情報を提供することも惜しまない」

「ちなみに、それについてはエリエスも同様よ」

「エリエス……聖地カナンの聖女？」

「ええ。あたしたちも彼女の情報から得るものは大きかったわけだし」

　腰に手をあてた姿勢で夏蕾（カレイ）が首肯（しゅこう）。

「キミが言う世界を巡る旅っていうのも旅団（パーティ）としての一つの選択。でも、どうせ世界を回るなら聖地カナンも行く価値はあるわよ。聖エリエスに会いなさい。精霊の知識と動向に関して、あの女より詳しい人間は世界にいない。それはきっと、キミが召喚していた火の始原精霊（サラマンダー）についても同じこと」

「……精霊か」

「それと、どうせ遅かれ早かれ冥界（めいかい）にも挑戦するんでしょ？　一応言っておくけど、その時はまた、覇都（はと）の王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）だけは警戒しておきなさい」

　そう告（つ）げて――

　夏蕾がふり向いた先は、自分たちの様子をうかがっていた天使二体だった。

　巨大な戦棍（メイス）を携えた天使長ゼデク（たずさ）。

　そして天使長の隣に控える少女・天官メルセル。

　どちらも王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）との戦いで軽い負傷が見受けられるものの、深刻な一撃を受けたような形跡はない。

「や、二人とも久しぶり。ごめんね、地上の人間が迷惑かけて。王立七十二階位特務騎士団（あいつら）のことは『精霊の調べ（あたしら）』の方で牽制（けんせい）しておくから」

『……まったく。そう願いたいものだな』

『目を瞑るのは今回かぎり。次こういうことがあったら天使も流石に黙ってないわよ』

溜息混じりに返す天使二体。

彼らに愛嬌のある微苦笑で応える夏雷が、気楽な様子で手をふってくる。

「んじゃ、とりあえずあたしらはここで引き返すわ。ほかに調べ物もあるし。法印の件をキミが女神に交渉してくれるなら、あたしらの手間も省けるもんね」

「また会おう。次はシオンも交えて」

背を向ける『精霊の調べ』の旅団員二名。先の王立七十二階位特務騎士団が消えていった審門とは違う方角へと、雲海を気ままな足取りで歩いていく。

法術士・ガブリエ、そして結界士・夏雷。

あまりに予想外の場所で出会った旅団『精霊の調べ』。彼らの後ろ姿が雲海の丘陵を下って見えなくなるまで見送って。

「痛っ。さすがに立ちっぱなしは辛いって……」

外法騎士の暗器によって受けた足裏の傷の疼き。ずっと耐えていた激痛にとうとう音を上げて、レンはその場に座りこんだ。

2

天界・『熾天の園』。

緑の蔓に覆われた白亜の神殿。その大広間にレンがたどり着いた時には、最初見た時と同様、巨大な七柱の前に七体の天使たちが立っていた。

七曜の天使。この神殿を守る守護天使にして、天界の摂理そのものを司る大天使。

そんな彼らの控える広間の中央部で――

「戻ったか」

一段高く設計された中央の女神の座。

そこに腰かけた女神レスフレーゼが、頬杖をついた姿勢からゆっくりと身を起こした。

「遅かったではないか」

「それはまあ……許してくださいって。相手が相手だったんだからさ」

「ふむ。ずいぶんとまたボロボロじゃのう？」

鞘に収めた剣を松葉杖のかわりにして歩く自分を見て、光彩異色の少女が苦笑い。

――円月輪によって抉られた脇腹。

――足裏は撒菱を踏みぬいて傷だらけ。

さらに言えば全身もだ。

炎の将魔戦と比べれば軽いながらも、法術の炎に炙られたことで頬や指先といった体表部分にうっすらと火傷の症状が浮きでている。

「当時の剣帝は、他の人間の騎士に苦戦などしたこともなかったのじゃがな」

「だから、そういうのと一緒にされても困りますって」

「……」

一瞬の沈黙。

満身創痍のこちらを見つめ、女神である少女が不意に真顔へ。

「そうじゃな」

苦笑いから微笑へ。

それは、女神レスフレーゼが初めて見せた素直な笑みだった。

「少しずつ強くなっていく。それでいい。人間でありながら天使のために戦い、傷つくことを厭わない……そのような者は久しく見ていなかった。お主の健闘については、天界の君主として礼を言わねばならぬな」

「気持ちは嬉しいけど、俺はそんな大したことしてないから……」

自分は実質、時間稼ぎをしただけだ。

外法騎士カサディンとの戦いも『精霊の調べ』の介入あっての収拾だった。彼らがいなければ、あの戦いもどうなっていたかわからない。

「ところでフィア先輩は？」

「あやつなら心配いらん。とっくの昔にもう一つの部隊を地上に叩き返しておる。だが、ちょっとその後始末がな……」

「後始末？」

「あの暴虐天使め、力加減を知らずに拳を振るったせいで雲海に大穴を空けおった。穴を埋める修繕

作業を終えてから戻るよう言いつけてある」

大きく溜息をつく女神。

「まあそれはさておき。肝心の話の続きもあるが、まずは身体を癒せ。この神殿を抜けた先に、ちょうど良い湯源郷がある」

湯源郷。

終焉戦争で傷ついたフィアが、その傷を癒すために籠もっていたという場所だ。

「それってフィア先輩も利用してたっていう？」

「いや。それはもっと大がかりな湯源郷で、さらに言えば人間の身体には作用が強すぎる。妾の言っておる湯源郷は、天使には効き目が弱すぎて療養にならぬものじゃが、人間であるお主にはちょうどいい」

神殿の広間を支える七本の柱。

その柱と柱の間を指さす女神レスフレーゼ。

「向こうじゃ。フィアが戻ってくるまで休んでおれ」

「……はい」

有無を言わさぬ口調の女神に言われるまま、その指先が示す方向へと歩いていく。

広間の円柱の間を進んでいって――

不意に視界がゆらめき、レンの前には細い小道が広がる光景。

今までの景色と違うのは巨大な雲が断崖（だんがい）のようにそびえたち、レン一人がようやく通れるほど細い道が、蛇行（だこう）しながら先まで続いているということだ。

……見わたすかぎりの雲海（うんかい）をずっと見てきたけど。

……こんな細い道もあるんだ。

「でも雲の断崖ってのは面白いな。これ、人間の子供とか見たら喜びそうだし」

綿のような雲が両端にそびえたつ光景。

その道を奥へ奥へ、女神に言われたとおりに歩いていって。

「お。これって蒸気？」

目の前が徐々に、白い湯気状の煙で満たされていく。地上の温泉からわきあがる蒸気と同じだ。湿気を帯びていて、そして温かい。そう感じた矢先。

「うわっ!?」

雲の足場が何の前触れもなく消失し、レンはそのまま滑（すべ）るように真下に転げ落ちた。

ちゃぷん。

小さな飛沫（しぶき）がはねる音。

「……あれ？」

転げ落ちたその先で。レンは、ふしぎな流動体（りゅうどうたい）に胸元まで浸（つ）かっていた。

ほんのりと濁った乳白色（にゅうはくしょく）。

だが地上の温泉のような湯かといえば違う。現に、レンの着ている服には一切の水滴さえも付着していない。なのに、本当に入浴しているように温かい。

気体と液体の中間。

喩（たと）えるならばソレがもっともふさわしい表現だろう。服の生地から浸透（しんとう）してくる温かみと、本物の温泉に浸かっているような心地よい包容（ほうよう）感。

――これが湯源郷（とうげんきょう）。

天使たちの憩（いこ）いの場としても使われているという。

四方を雲の断崖に囲まれた場所。そして、この場がちょうど雲海の凹みになっていることで、そこに温かい蒸気が水たまりのように溜まっているのだろう。

「ああそっか。俺はそれに気づかなかったから、凹みに足を取られてここまで滑りおちてきた……ていうのであってるのかな」

独り言のつもりの呟き。

と――

「正解ですわ」

ぽちゃんと小さな飛沫とともに、聞きなじんだ声が後ろから。

「天界を構成する力の吹きだまり。人間の身体には強い波動ですので長時間は勧められませんが、傷を癒す程度の沐浴ならさしたる影響もないでしょう」

「あ、フィア先輩戻ったのか。よかった。ケガは？　先輩の具合も気に……」

言い終える前に。

声のする方へと振り返った姿勢のまま、レンは声が出なくなった。

「この湯源郷も久しぶりですわ」

背中に純白の翼を顕現させた大天使フィア。

まばゆい金髪に、淑やかなまなざし。その美しく気品ある相貌に、すらりと伸びた肢体、そして成熟しきった豊艶な体つきがよく似合う。

そんな彼女が――

一糸まとわぬ裸身で、乳白色の湯に下半身を浸かった姿で立っていた。

「……ちょ、ちょっと待った。何だよその恰好!?」

「あら、どうかしましたか？」

妖艶な笑みをうかべる金髪の大天使。

胸元に片手を添えているものの、そのか細い腕ではとうてい隠しきれない豊かな双丘と、そこから覗く深い谷間。炎崖都市で見た水着姿でさえ刺激として強烈すぎたというのに、ここまで来るともはや頭の中が真っ白だ。

「でも実は、私も少しだけ恥ずかしいですわ。水着なら聖フィオラ旅学園でも着ましたが、人間に……ここまで見せるのはレンが初めてです。エルラインにも見せたことがないので、ちょっと私もどうしたらいいか、迷いますわね」

頬を朱に染めてはにかむフィア。

「な、なら服着ろってば！　この湯源郷って服着てても大丈夫なんだろ！」

「もちろん。普通は服も着て浸かるものですから」

「じゃあ何で――」

「前にレンに言ったことを覚えていますか？　高位存在と呼ばれる中でも、とりわけ天使は人間に対して好感度の高い種族であると」

　小さな飛沫。

　気体とも液体とも言えない流動体（りゅうどうたい）に浸かり、近づいてくる大天使。

「ああ、それは覚えてるけど……」

「私が聖フィオラ旅学園であなたに向けていた感情も、それが好意によるものだったことは嘘（うそ）じゃありません。でもそのキッカケは、あなたが二百年前の仲間（エルライン）に似ていたという好奇心から生まれた好意でした。かつての仲間（エルライン）のような剣才は無いけれど、純粋な心根（こころね）とひたむきさに興味を覚えた。けれどその好意はあくまで、天使が人間に向ける一般的な関心として。だけど……」

　口元を引き締めて言葉を閉ざすフィア。

　胸の心境（うち）を表す最適な言葉を探すための間。そう思わせる一拍分の余韻（よいん）を空けて、天界第二位の天使たる少女がふっと表情をやわらげる。

　ただの微笑（びしょう）ではなく。

　その瞳が映す色調（しきちょう）は、より深く、より切なく、より複雑な感情の混色（こんしょく）で。

「今は……あなたのことが、別の意味で気になってしまいそうです……」

「え？」

「正直に告白しますわ。私、本当に嬉（うれ）しかったんです。あなたの加勢（かせい）。天界に昇ってきた王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）を、同胞（どうほう）である天使たちにかわって退けてくれた。……いえ、その前に、あなたが自分からそう進みでてくれたことが何より嬉しかった」

　半歩。また半歩。

　淑（しと）やかな足取りで近づいてくる彼女。その彼女の裸身（らしん）をなるべく直視しないよう、レンは顔を横に向けながら首をふった。

「俺、別にそんな大層なつもりで言ったんじゃ……」

「ええ。ですからなおのこと、本心から言ってくれたのだとわかって嬉しかったんです。自然な感情で、あなたは私の天使たち（なかま）を助けてくれた」

　両手を胸元で交叉（こうさ）させる少女。

自らの裸身を隠すためでなく、それはまるで自身を抱きしめ、その止まらぬ昂揚を鎮めるためであるかのような仕草だった。

「かつてエルラインと旅した時、あの英勇は世界で誰よりも頼れる存在でした。その言葉一つ一つに絶大な信頼感があって、彼ならば何者と戦っても負けないという確信があった。年下の人間なのに、私やキリシェ、エリーゼにとって英勇は、誰よりも頼りがいのある兄のような存在でした」

「うん。それは……キリシェと初めて会った時の感じも、そうだった気がするよ」

〝エルライン、生きてたんだな！〟

〝会いたかった！　ずっと探してた！　そうだ、いくら人間だからってお前だけは特別だ。たかだか三百年くらいでお前が力つきるわけが――〟

英勇エルラインと三大姫の関係。

今も彼のことを思い、彼の残した世界録を見つけだそうとする三人にとって、英勇とはどんな存在だったのか。

そうレンが思った時、真っ先に思い出したのが学生街で竜姫と出会った時のことだ。

何もかも忘れて自分にしがみついてくるあの様はまるで、生き別れの妹がずっと探していた兄に懐くような雰囲気だった。

それはきっとフィアも、そしてエリーゼも同じなのだろう。

「……だとしてもさ、俺は、エルラインじゃないし」

「もちろんです。レン、あなたは本当に普通の人間です。間違ってもエルラインのように生まれながらに凄まじい強さを授かった者ではない。だけど――」

一呼吸。

自らの胸元に手をあてたまま、フィアがゆっくりと深呼吸。

「だからこそ私には、自身が傷つくことも厭わず天界のために戦ってくれたあなたのことが嬉しいと同時に、まるで何百年付き添った同胞のように思えてならなかったんです。人間と天使という種族の壁をこえて……私……」

まっすぐ見つめてくる気高き双眸。

その瞳が熱を帯びたように潤み、そして揺れていた。

「私、本気になってしまいそうです」

「————」

だが。

そんな視線の交叉の果てに、先に背を向けたのは彼女の方だった。

「……ごめんなさい。今のは……忘れてください」

「フィア先輩？」

「白状すると、いっそもう、感情のおもむくまま強引にあなたを抱きしめてしまおうかと思ったんです。でもそれは、きっと良くないことだから。私、今の私とレンの関係も気に入っていて大切にしたいんです。そう、今はまだ……」

ふぅ……。

大きく胸を上下させて息をつく大天使。溜息か、それとも深呼吸か。

どちらともつかぬ吐息の後に、彼女の横顔に残っていたものは憑きものがとれたように澄みきった笑顔だった。

「よかった。口にできてスッキリしました」

「いや……あの、そう言われても俺の方は何て返事すればいいんだか」

苦笑気味に頭をかく。あまりに綺麗な笑顔で見つめられてしまって、返事はもちろん、どんな表情をすればいいかさえわからなくなりそうだ。

「今まで通りでいいですよ。単に、私の中であなたへの印象に変化があった。ただそれだけのことですから」

さっきまでの艶やかな表情はどこへやら、普段の穏やかな微笑で答えるフィア。

「強くなってくださいレン。いつか本当に、三大姫を束ね、三大姫がすべてを託せる騎士になるくらい。それは私もキリシェも、エリーゼも同じ気持ちです」

「目標、高いなあ……」

思わず本音がこぼれ出てしまう。目指す志は高い方がいいとは言うが、それがどれだけ至難の道の先にあるか想像するだけで気が遠くなりそうだ。

「期待していますわ。ところで、ケガの具合はどうですか？」

「ケガ……あ。そういえば」

服の生地ごしに脇腹に触れてみる。

カサディンの暗器によって傷ついた場所はまだ感触としてわかるが、出血は止まり、傷口に触れても痛みはほとんど感じない。足裏も同じ。こうして湯源郷に身を浸している間に痛みも出血も治まっているのがわかる。

「すごいな。本当にこんな効き目があるんだ……」

「ええ。人間には強すぎるくらいの効き目でしょう？　でも、それだけ強い力の吹きだまりなので、そろそろここから出ないと力場の影響で気を失ってしまうかも」

「怖ぇ!?　ちょっと待った、ここそんな危険な場所なのかよ！」

「時間を守れば心配いりませんよ。さ、女神様のところに戻りましょう」

　パチンと指を打ち鳴らす大天使。

　と同時に、虚空から出現した外着が、彼女の裸身を包みこんでいく。

「なんだ。最初から服、着てたのか」

「ええ。隠蔽術式で服だけ透明化させていただけですわ。今後の参考に、私が裸で現れた時にレンがどんな反応をするのか知っておきたかったものですから」

「……今後の参考？」

「聞きたいですか？」

「いや、遠慮しておく。聞くの怖い」

　色っぽい目線の大天使に真顔で答え、レンは浸かっていた湯源郷から這い上がった。

　急勾配の坂を、今度は滑りおちないようゆっくりと上っていく。

　そして――

　女神レスフレーゼの待つ『熾天の園』へと戻った時には、そこにいるはずの七曜の天使たちの姿は一体残らず消えていた。

「七曜の天使には今一度、暇を与えておいた。先は途中で話が途切れてしまったからな。話の途中から参加させるのは、あやつらも居心地が悪かろう」

　女神の座に佇む光彩異色の少女。

「レン。近うよれ」

「……近くって、こんな感じで？」

　手招きに応じるまま広間の中央に。

　女神の座。

　純白の羽毛が敷きつめられたソファーのすぐ目の前まで近寄った時点で、ようやく少女が手招きを止めた。そこで止まれ、という意味なのだろう。

「――――」

　目の前でじっと見つめられる。

　熾天色の右目と、蒼天色の左目。その神秘的な対比を宿した光彩異色に自分の姿が映しだされる

のを感じ、レンはかすかに背を強ばらせた。

……威圧感は感じない。

……だけど、なんだろうこの緊張感。

天使長ゼデクや七曜の天使を前にした時のような圧力はまるでない。だが、彼らのソレとは別種の威厳をそなえた少女。

「湯源郷に浸かり、天界の波動を浴びた影響ですよ」

心境を見透かしたように告げたのはフィアだ。

「天使の力に対して、レンの霊感が一時的に敏感になっているんです。そのおかげで女神様の力が先より伝わりやすくなっているんですわ」

「そういうことじゃ。人間には、女神の力はこうでもしないと伝わりづらいからな」

光彩異色の少女が手を伸ばす。

その華奢な指先が自分の右手を取って、そのまま優しく引き寄せて。

「……あ」

女神の接吻。

手の甲にふれる一瞬の温もりを感じた直後、手の甲に熾天色の光が宿った。見たこともない不思議な光模様。それが手の甲から手の内側へと浸透していく。

「女神の法印。これでお主はまた一つ真実に近づいた。竜、天使、悪魔が人間に隠してきた終焉戦争。その秘密を知る権利を得たわけだ」

「これが……」

手の甲を見返してみても、今はもう何もソレらしき痕はない。

「さて。他に話しておきたいこと、聞きたいことはあるか？　こう見えて滅多にないぞ。女神が人間の謁見にここまで時間を割くというのはな」

ソファーの肘掛けに頬杖をつく女神。

ただ、彼女に聞くことと言われても、すぐには思い浮かばないというのがレンの本音だ。

「えっと……」

「女神様、一つだけ私からよろしいですか」

レンの後ろに立っていたフィアが、淑やかな歩みで一歩前に進みでた。

「先ほどの続きですわ。エルラインの二番目の伝言という話がありましたわね」

「……その件か」

白亜(はくあ)の天井を見上げる女神。

〝竜帝(りゅうてい)カルラは、竜種を代表して『終焉の地』の開放を許可した。あのエルラインの二番目の伝言のとおりにな〟

〝二番目の伝言？　待ってください。それ、私も存じませんわ〟

終焉戦争後。

英勇(えいゆう)エルラインはたった一人で天界を訪れ、女神に頼み事を告(つ)げた。

それこそが『終焉の地』の封印。

以後三百年、その結界内には誰一人として足を踏み入れたことはない。

——だがもう一つ。

エルラインは、フィアも知らない二つ目の伝言をも残していたという。

「教えてもらえますか？　話を聞いたかぎり、エルラインが女神様(レスフレーゼ)に残した伝言は、竜と天使と悪魔とで『終焉の地』を封印(しず)すること。終焉戦争を鎮めた本人からの頼みであるがゆえに、その封印を無闇(むやみ)に開放することはできない。そういう話でしたわね？」

「そのとおりじゃ」

「でも現に、竜の渓谷(けいこく)では竜帝(りゅうてい)カルラ、そして天界ではレスフレーゼ女神様ご自身が、結界解除のための法印(ほういん)を譲ってくださった。それがエルラインの二番目の伝言に従ってという話となると、それは私も存じていない話なものですから」

「当然じゃ。お主(ぬし)にこの件を伝えないよう言ってきたのも、奴(やつ)じゃからな」

「……エルラインが!?」

フィアの声が裏返る。

「どういうことですか。あのエルラインが、よりによって私に秘密にしろと？」

「うむ」

微(かす)かにうなずく女神レスフレーゼが、その視線を空中へ。

「あの時、奴が妾に告(わらわつ)げたことは二つ。一つめは終焉戦争(しゅうえん)のあの島を、誰も入れないように封印してほしいということ。そして——」

〝そのうえで頼みがある。俺が来たのは、フィアには秘密にしてほしい〟

〝フィアは……もう十分すぎるくらい戦ってきた。それはキリシェも、エリーゼも同じだ。あいつら三人には、もう終焉戦争のことを忘れて平穏に生きてほしいから〟

「私のことを？　エルラインが……そんなことを……」

なかば呆然とした面持ちで呟くフィア。

「皮肉なものじゃな」

天井を見上げたまま、独り言のように呟く女神。

「奴がそう残して三百年。それが、奴の残した世界録を巡って、お前たち三人が、今まさに終焉戦争の地に再び向かおうというのだから」

「……エルラインの二番目の伝言というのも、それに関わることなのですね」

「そうじゃ。ゆえに竜帝カルラも女神も、そこの人間のことを見定める必要があった。それがエルラインの二番目の伝言じゃからな」

〝終焉戦争の場所には、もう誰にも入れないようにしてくれ。だけど……〟

〝一つだけ例外がある〟

〝もしも……もしもこの何十年、何百年先に、俺に代わって世界のすべてを託せるような人間が現れた時だけは、封印を解くための法印を預けてやってほしい〟

「剣聖シオン――」

女神がそう口にした名前には、聞き覚えがあった。

「ここ三百年で、妾が唯一、その法印を授けるにふさわしいと感じた人間じゃ。あの男もまた、レン、お主と同じように精霊と感情を共有する力を持っておる」

「剣聖シオンが!?」

「数か月前のこと、あの男はたった一人で天界へと上がってきた。そして女神の前に跪き、こう告げた。『世界中の精霊が怯えている。そのことをご存じですか？』とな」

静寂の広間。

光彩異色の少女が発する言の葉が、微かな音の波となって伝っていく。

「だが知ってのとおり、天使は精霊の声を聞くことができぬ。ゆえに妾はこう告げた。『精霊が怯えてい

るという事実は把握しておらぬ。だが過去に一度だけ、それとまったく同じ状況が起きた現象には心当たりがある』とな。それが――」

「終焉戦争？」

「そうじゃ。おそらく世界で誰よりも世界の核心に近づいているのが剣聖シオン。そして、それに追いつきつつあるのが王立七十二階位特務騎士団とやらか」

さらにはカナン巡礼聖教船。

世界に名だたる旅団たちが一斉に動きだした。彼らは精霊の怯えを察知し、それが終焉戦争と関わっていることまでほぼ確信に至っている。

――世界録。

終焉戦争の真実、精霊の怯えの正体、そして英勇エルラインの伝言。

そのすべてが記録された手記。

「当初、妾は法印を剣聖シオンに委ねようと考えた。ゆえに法印の秘密を授け、必要となればいつでも天界に昇ってくるよう伝えた。それが女神の役目。終焉戦争を鎮めた男と交わした、二百年にわたる誓いでもあった。しかし竜帝カルラがお主に竜印を授けたことを知り、妾もまた思い直した」

ふっ、と微苦笑を浮かべて女神レスフレーゼが溜息。

「世界は常に移ろい、変わりつつある。その大いなる渦のなか、あの剣帝の面影を映した騎士が天界を訪れた」

「ええ。そして天使のために奮闘してくれましたわ」

「だから妾も託したくなった。天界のために尽くした者に、天界の至宝でもある法印を委ねるとしようとな。その法印の重み、ゆめゆめ忘れるでないぞ」

レンの手の甲を指さす光彩異色の少女。目には見えないが、そこには確かに、女神によって熾天色の法印が付与されている。

「ありがとう。コレ、大事にします」

「うむ。エルラインが『あの島』の封印を願い出た理由も察しがついているが……いや、憶測では語るまい。お主自身で確かめるがいい」

真剣なまなざし。

そこから一転、その幼げな容姿の女神が何かを思い出したように手を打った。

「ああ。そうじゃ。ところでレン、お主は次の目的地は決まっておるか？」

「え……いや、まだそこまでは。なあフィア先輩」

「悩みどころですわね」

　こちらも腕組みして顔をしかめる金髪の大天使。

「王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）が不穏（ふおん）な動きを見せていることはわかりました。剣聖シオンの言う精霊の怯（おび）えの話も気になりますし。……そろそろ私たちも、他の旅団の動きを気にかけて行動するべき時が来たのかもしれません。冥界（めいかい）に焦って直行するより、一度、情報収集に力を入れた方がいいとは思います」

「そうなんだよなあ……」

　フィアの返事に相づちを打つ間に、レンの脳裏（のうり）をかすめたのは『精霊の調べ』の一人、結界士（エンチャンター）・夏蕾（カレイ）が残した言葉だ。

〝世界中を回るなら聖地カナンも行く価値はあるわ〟

〝精霊の知識と動向に関して、エリエスより詳しい人間は世界にいない〟

「先輩は、カナンには行ったことってある？」

「聖地カナンですか。だいぶ昔、エルラインに連れられて訪れたきりですわね。当時は旅団（パーティ）『カナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）』もありませんでしたし、聖地といっても人口も多くなく、寂しげな印象でした」

　ぼんやりと空を見つめるフィア。

　数秒何かを考えるような素振（そぶ）りの後、彼女はこくんとうなずいてみせた。

「でもいいかもしれません。精霊信仰の一大拠点（きょてん）。レンが古代召喚術を使えることについて、何かわかるかも」

「聖地カナンか。だがあれは海を渡った別大陸の都であろう？　船旅で海を越えるのは時間がかかるだろうに。さすがに人間の身では天使のように空も飛べまい」

「そりゃそうだけど、船くらいしか移動手段ないし……」

「そう思うか？」

　女神の座で片膝（ひざ）を立てる女神レスフレーゼ。にやりと唇の端（はし）をつりあげるその表情は、まさにその言葉を待っていたと言わんばかりの雰囲気だ。

「レン。お主、妾（わらわ）を誰だと思っておる」

「誰って今さら言われても……」

「聖地カナンは、人間世界でいうアルカナ大陸の南端であったな。ということは、ふむ、まあコレくらいの

微調整で良いか」

光彩異色（オツドアイ）の女神。

その左目である蒼穹色（そうきゆう）の瞳が幻灯（げんとう）めいた光を放つ。

「レン、お主（ぬし）の左後ろに円柱があるじゃろう。それに触れてみろ」

「……左後ろの円柱。これですか？」

言われるまま柱に向かって手をかざす。

うっすらと緑の蔓（つる）に覆（おお）われた白亜（はくあ）の円柱に、レンの指先が触れた瞬間――

「聖地カナンまで送ってやろう」

「うわっ!?」

レンの全身が淡い光の粒子に包まれた。

「まさか、この円柱って」

「天界の中心『熾天（してん）の園（その）』。その広間の円柱がただの置物（オブジエ）と思ったか？　見てのとおり、これらの円柱はすべて天界の審門。このうち五本がそれぞれ世界の各大陸へ。残る二本が冥界（めいかい）、竜の渓谷（けいこく）へと続いておる。どうじゃ、驚いたであろう？」

自慢げに胸を張ってそう告（つ）げる光彩異色（オツドアイ）の少女。

天界を統（す）べる彼女の姿が、レンをとりまく光によって覆い隠されて。

「往（ゆ）くがいい。次に会う時はさらなる成長を期待しておるぞ？」

「え。いや、ちょっと待っ――」

次の瞬間。

微（かす）かな音も大気の流動もなく、レンの姿は天界から消えていた。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

天界の中心『熾天の園』。

その場に女神レスフレーゼと共に残り、レンが地上へと転送される様を見送って。

「見ていて飽（あ）きぬ人間じゃな」

微苦笑を浮かべる女神。

その隣に腰をおろし、フィアはレンの立っていた円柱をじっと見つめた。

「一つ一つの些細な事に驚き、感動し、奮起する。あの様は見ていて愉快ではある」

「それは何よりですわ」

「短命種である人間の、その小気味良い部分を損ねておらぬのだな。剣帝も剣聖も、あやつらは何が起きても動じぬ大木のような落ち着きはらった男であったが、それに比べ、喩えるならばレンは『硝子の鐘』か」

小さく打てば小さく響き。大きく打てば、遙か彼方まで届く音色を発する。

――だがその組成はまだ硝子。

ふとした事で傷つき、壊れてしまう儚さをも併せもつ。

それが人間という存在だ。

「育つとよいな。あの脆き硝子の鐘が、一切の不純なき鋼鉄の鐘となるように」

「ええ、楽しみですわ。……しかし弱ったことが一つ」

額に指先をあててフィアが嘆息。

「どうしたのじゃ？」

「女神様ったら、海上に残している竜姫と先代魔王のことお忘れでしょう。レンと私だけアルカナ大陸に転移させても、あの二人はまだ船の上なのですが」

「……あ」

ぽかんと口を半開きにする女神レスフレーゼ。

「ほらやっぱり。どうするんですの？」

「そ、それくらいお主らで考えろ！　方法などいくらでもあるであろう!?」

光彩異色の少女がぷいっと顔をそむけてしまう。

その子供めいた仕草に。

「まったく……お姿だけでなく頭の中まで子供なんだから」

天界最強の大天使は、大きく溜息をついたのだった。

Record.4 | 聖女──精霊の震える都にて

1

砂の匂(にお)い。

赤く乾いた砂が地表を覆(おお)い、時折吹く風に流されて目や口元にこびりつく。

──まるで砂漠。

港町フェルシアと同じく、振り返れば大海原(うなばら)が広まっているというのに、船着き場を一歩離れれば乾燥しきった灼熱(しゃくねつ)の路面。

「ここが聖地カナン……？」

道の端(はし)にぽつんと立ちつくし、レンは辺りを見わたした。

ドーム型をした屋根の建物が印象的な都。

大きな路地の両脇には、この暑さにもかかわらず露天商が店を構え、雑踏(ざっとう)する道は常に前後を歩く人と肩や背中が擦(こす)れあうほどの混みようだ。

一般人らしい家族連れ。貿易商。旅団(パーティ)と思(おぼ)しき重装備の者たち。さらには精霊信仰の礼拝堂(れいはいどう)に出入りするローブ姿の女性たちまで。

と──

「レン、お待たせしましたわ」

後ろから声。

振り返ったそこには、背中の翼を隠した金髪の天使が立っていた。

「フィア先輩！　よかった。さっきまで俺一人でどうしようかって思ってたんだ。気づいたらカナンっぽい都市が見える木陰に立っててさ」

「ええ。女神様ったら、レンが天界の一つ一つに驚く様子が面白かったらしいのですわ。それでレンをもっと驚かせようと、いきなり審門を発動させてしまわれて」

珍しく呆れ笑いを湛えてフィアが肩をすくめてみせる。

「ただ、そのせいでキリシェとエリーゼから離れてしまったのが問題ですが」

「あー……やっぱり？　俺もそれ怪しいなって思ってたんだよ。フィア先輩は俺の居場所わかるにしても、二人はまだ船の上だろ？」

特にキリシェ。

船酔いに弱い彼女をまだ海上で待たせているというのが忍びない。

「キリシェは竜因子の封印が解けたので、竜の姿に戻ればエリーゼを乗せて空を飛んでこられるのですが……いかんせん、竜の姿でここまで来ればさすがに大騒ぎかしら。エリーゼも隠蔽術式を探知するのは得意ですが、自分が隠れるための法術は苦手なんですよ」

「じゃあどうしよう。フィア先輩いい案ある？」

「私が迎えに行きますわ。私が同行すればキリシェの竜形態の姿も人目につかぬよう隠すことができますから。というわけでレン、こちらへ」

手招きするフィアが雑踏をすり抜けるように進んでいく。

人混みのなかに隠れそうになる彼女の背中を必死にレンも追いかけて、たどり着いたのは海に面した船着き場だった。

「さすがにここは大通りより人もまばらですわね」

ひとしきり周りを眺めまわすフィア。

直後、彼女の姿が瞬きの間にも満たない時間で影も形も見えなくなった。

一瞬の出来事。目の前でフィアと話していたレンですら目の錯覚と疑うほどなのだから、周りの人間で彼女の隠蔽法術を捉えられた者など皆無だろう。

「では迎えに行ってきます。海を往復するので少々時間がかかりますので。レンは観光か、それに飽きたら今夜の宿の手配をお願いしますわ」

ばさり、と翼を羽ばたかせる音だけが聞こえて。

何事もなかったかのように、目の前に感じていた彼女の気配もまた消えた。

その場に一人で立ちつくし——

「……じゃあ俺は、ひとまず見学か」

レンは大通りへと続く道へ足先を向けた。

仮にも聖地と呼ばれる都だ。そこかしこに建設されたドーム型の礼拝堂もそうだが、大通りの両脇に

並ぶ露天商も、今までの街では見なかった。そこで売っている装飾品や書物も、何もかもがとにかく珍しい。

「迷うなぁ。宿屋も探さないといけないけど、その前にやっぱり武器工房だよな。すごい強力な剣とか売ってたりして。カナン巡礼聖教船以外の旅団も大勢来てるみたいだし、工房が賑わってたら嬉しいんだけど」

秘境や聖域、魔境の探索はもちろん。

訪れた都市をくまなく歩いて回るのも、世界探索では必須の要素となる。

熟練の刀匠とその弟子たちが集う武器工房に、多くの旅団が情報を交換しあう談話所。都市の公立図書館も、その地にしか残されていない古文書を閲覧できる。

とにかく見て回りたいものが多すぎる。

周囲の建物を見わたしながら大通りへと進んでいこうとした、矢先。

「あ――――っ！」

素っ頓狂な少女の声が、レンのすぐ前方で響きわたった。

「ん？」

「見つけました！　タイラス先生こっちです、早く早く！」

周囲の目も気にせず声を張り上げる少女。

外向きに撥ねた金髪が印象的で愛らしく、身にまとう純白の法衣がよく似合っている。

――清楚な雰囲気を備えた純白の法衣。

彼女の顔と、そして彼女が羽織った装束には見覚えがあった。

「プルミエールだっけ」

「そ、そうです！　ええと、あのその……」

旅団『カナン巡礼聖教船』に名を連ねる法術士の少女。

イスカセル地下神殿――地の始原精霊のいた神殿で出会した彼女が、自分を指さした恰好のまま慌てた様子で。

「せ、先生ってばぁ！」

「落ちつけ。相手は徊獣でもあるまいし、それに互いに面識がないという訳でもあるまい」

雑踏の中から現れる一人の偉丈夫。

レンより優に頭一つ高い長身に、一切の無駄なく鍛え上げられた全身。鋼鉄を想わせる肉体はもちろん、その悠然とした佇まいだけでも歴戦の勇士と感じずにはいられない。

上下一体の闘衣をまとった剃髪の男。

タイラス――最上位の女性術士が集うカナン巡礼聖教船において、希有な武闘家として抜擢された逸材にして幹部に名を連ねる男。

「レンと言ったな。久しいという程の日数も経ってはいないが、これも再会というべきか」

「タイラスまで……？」

「そうだ。私とプルミエールの名も覚えていてもらって何より」

こちらは落ち着きはらった様子で応える武闘家。

「しかし、どうやってここに？　港に到着する旅船はすべて『カナン巡礼聖教船』のメンバーで確認しているはずだが」

「……ええと」

素直に伝えていいものか一瞬悩んだ。

とはいえ、この二人は自分が精霊を召喚できることまで知っている。さらに聖地に到着する船客も把握しているならば、船に乗って来たという誤魔化しもできない。

「じゃあ正直に答えるけど、ついさっきまで天界に行ってて」

「天界ですって!?」

目を見開いて声を上げるプルミエール。

「つまり天界経由でアルカナ大陸に来たんですか!?　まさか天界の審門で転移を!?」

「うん。それでここまで転移してきたというか、むしろ落とされたというか」

「……相変わらず、こちらの想像を上回ることをしてくれるな」

やれやれといった面持ちでタイラスが苦笑い。

「天界か。私もまだ訪れた経験は無いが、危険はなかったか？」

「たぶん、こっちが悪さとかしなかったら何もないよ。ただ審門の前まで行くと、愛天使が出てくるんだ。その試練さえ通れば平気だと思う」

「なるほど。話に聞く天使の審判とやらか」

思いあたる節がある様子で腕組みする武闘家。

「ところで残りの三人、同行していた娘たちの姿が見えないようだが？　わかれて聖地の見学でもしている最中だったか？」

「いや、今ここにいるのは俺だけ。もうすぐ到着すると思う」

「彼女たちも、その天界経由とやらか？」

「あ、ええと……そんなところ」

フィアは天使で、キリシェは竜。彼女たちが空を飛んで海を渡ってくるとまではさすがに秘密にしておいた方がいいだろう。

「ところで俺も聞いていい？　聖地にやってくる船客は一人一人確認してるって話だけど、俺は天界から直接ここに来たわけでさ。なのに、どうして俺がここにいることまでわかったのかなって」

英勇（えいゆう）エルラインと酷似（こくじ）した少年がいる。

その目撃情報は遅かれ早かれ聖地カナンでも話題に上るかもしれないが、現在位置まで特定されるのがあまりに早すぎる。

「……」

「な、なんだよ。そんな無言で見られても」

「レン、ここ聖地カナンを治（おさ）める者が誰なのか忘れたか？」

「え？　そりゃあ……聖エリエスの名前くらい俺だって知ってるよ」

聖エリエス。

精霊信仰の聖地すべての信徒を束ねる聖女であり、カナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）の頭首でもある。

そんな彼女の力こそ古代召喚術。まだその力を世界に知られていないレンを除いては、『失われた術式（エイシエント）』の現代最後の使い手と言われている少女だ。

――そこまで思い描（えが）いて。

レンの脳裏（のうり）を、たった一つの可能性がかすめていった。

「そうか。俺の居場所がわかったのは……」

「は、はい！　聖エリエス様は既に、あなたがここに来ていることも把握（はあく）しておられます。この地にエリエス様の精霊以外の精霊が現れたのを感知されて……それで、あなたと面識があるという理由で、あたしたちが直々（じきじき）にご命令を頂いたんです！」

「エリエス様がお前を待っていらっしゃる」

「俺を？　あの聖女が？」

「丁重に案内するように。そう仰せつかっている。本来なら今は礼拝の時間なのだが……異例の待遇（たいぐう）だぞ、あの方が日課の祈りを中断してまで他人を招くというのは」

まっすぐ自分を見下ろすカナン巡礼聖教船の幹部。

「だが、残り二人の仲間がいないというのは想定外だったな。さてどうするか」

「……」

しばし宙を見つめて黙考。まさか聖女自ら、自分を招くようカナン巡礼聖教船に働きかけるとは思ってもみなかった。

「……行くよ」

フィアの飛び去った船着き場を一瞥し、レンは首肯した。

「俺も噂でしか聞いたことないけど、聖女っていうくらいなんだから多忙なんだろ？」

「は、はい！　なにせ聖地を統括されている方ですから」

「なら俺一人でも行くよ。待たせるのも悪いし」

なにしろフィアは海を渡っての大陸間の往復だ。

ここで待っていてもどれだけ時間がかかるかわからない。それに彼女たち三人ならば、自分が聖地のどこにいようと何らかの方法で居場所を探知できるに違いない。

……あの聖エリエスと話ができる。

……こんな機会、今この瞬間を逃せば二度とないかもしれないし。

〝精霊の知識と動向に関して、あの女より詳しい人間は世界にいない〟

旅団『精霊の調べ』の一人である結界士・夏蕾の言葉。それは決して誇張ではないのだろう。精霊信仰の地で聖女と謳われる占代詠唱士の少女なのだから。

「では、ついてこい」

俊敏な動きできびすを返すタイラス。

その後ろを追いかけて、プルミエールと共に大通りへ。さらに大通りをしばらく進んでからは路地裏へ。

巨大な建物が並び立つ隙間――日の当たらぬ暗がりを黙々と進んでいく。

「ところでさ、この周りの建物って全部礼拝堂なのか？」

「そ、そうです！　精霊信仰といっても世界にはたくさんの精霊がいますから。信仰する精霊によって、それぞれ得られる加護が違うと言われてます。礼拝堂ごとに祀られてる精霊が違うんですよ」

目の前の建物を指さすプルミエール。

「でも、実際に精霊の姿を見た人はほとんどいません。あたしもイスカセル地下神殿で、地の始原精霊を見たのが初めてでした」

「そっか、やっぱり精霊って珍しいんだな」

ずっと自分の周りにいてくれた火の始原精霊（サラマンダー）。

さらには上の始原精霊（ノーム）にまで懐（なつ）かれる。それはきっと、言葉にできぬ幸運なのだろう。精霊信仰の地を訪れて改めてそう感じる。

「なおさら、その精霊と対話できる聖エリエスっていうのは凄（すご）いんだ？」

「私からすればお前も同じだがな」

前を歩く武闘家（フルタイプ）が、苦笑を押し殺した声音（こわね）でそう返事。

「聖地カナンに縁があるわけでもない。特殊な修練（しゅうれん）を積んだわけでもない。なのに、なぜエリエス様と同じことができる？　お前のことでまず話題に上った疑問だ」

「……仲間（エリーゼ）からは、他の素養（パラメータ）を全部そっちに使いきったんじゃないかって言われたよ」

「法術士（アリア）や精霊使（スピリツト）いを目指そうとはしなかったのか？」

何気ない問いかけではあるが、核心を突く内容だ。

古代詠唱士（エイシエンター）――特に精霊を召喚できるとなれば、騎士（きし）や武闘家（フルタイプ）のように自ら戦闘の前線に出る必要はない。戦闘は仲間に任せ、自分は精霊の使役（しえき）に集中すればいいからだ。

「彼女（エリエス）は、古代召喚術以外にも得意な法術（ほうじゅつ）があるってこと？」

「そうだな。知る者は限られているが法術士（アリア）としての実力も世界有数だ。なにしろ周りの部下に高位の術者が山ほどいる。腕を磨く環境としては最適だろう？　しかし逆に、エリエス様ご自身は術式特化型だ。騎士や武闘家のように身体（からだ）の鍛錬（たんれん）に集中されたことはない。古代詠唱士（エイシエンター）そのものが、肉体を酷使する技能（スキル）でもないからな」

聖エリエスが術式特化。なおさら、同じく古代詠唱士（エイシエンター）の素養（そよう）をもつレンがあえて騎士（きし）であることを選んだ理由が気になるのだろう。

「俺、精霊の声が聞こえるようになったの最近だから……」

「なるほど。それで今までは騎士を目指していたというわけか」

路地裏を進む足は止めずに相づちを打つタイラス。

「エリエス様の言っていたとおりだな」

「え？」

「『その者は、後天的に古代詠唱士（エイシエンター）の才に目覚めた可能性が高い。それもごく最近』――、それがエリエス様の推測だ。精霊の召喚された気配を感じたのが突然のことだったらしいからな」

「……すごいな。そこまでわかるんだ」

ごまかす気も起きない。はるか彼方（かなた）の別大陸からでさえ精霊の動向を察知（さっち）できる。まさに精霊信仰

の地の聖女にふさわしい才能だ。

「エリエス様に関心がわいたか？」

「聖女って呼ばれる理由がわかった気がするよ」

全身で感じるざわめき。

それが緊張であると同時に、確かな昂揚（こうよう）であることも自覚できる。

「もう着く。この先だ」

暗い路地裏から一転、陽の差しこむ大通りの方角へと曲がっていく武闘家（フルタイプ）。

その先に——見上げるほど巨大な石造りの大聖堂が、そびえ立っていた。

素材は大理石だろう。

古くから建造物や彫刻などに用いられてきた稀少（きしょう）石。うっすらと淡い紅色を基調とし、そこに幾層もの白の縞状模様（マーブル）が美しい色味を加えている。

「ようこそ聖地の中心、カナン大聖堂へ。です！」

そびえたつ聖堂を指さすプルミエール。

「カナン大聖堂か。なんか意外だけど、聖地の名前そのままなんだ？」

「因果（いんが）が逆だな。まず何よりも古くからカナン大聖堂が存在し、この都は漠然（ばくぜん）と聖地としか呼ばれていなかった。しかしそれでは何かと不便ということで、聖地の象徴（しょうちょう）である大聖堂の名前を拝借（はいしゃく）し、『聖地カナン』と呼ぶようになったらしい」

そびえたつ門を見上げるのはタイラスだ。

勝利を讃（たた）える凱旋門（がいせんもん）のように絢爛（けんらん）な彫刻が施（ほどこ）された門。

特殊なローブ姿の少女から普段着の一般信徒までが絶え間なく通過していくのに倣（なら）い、レンもまたタイラス、プルミエールと共に進んでいく。

——数多くの信徒で混みあう通路。

観光客、別大陸からの旅団（パーティ）員らしき武装をした者の姿まで。薄い絨毯（じゅうたん）を敷きつめた通路は、大通りの密度にも劣らぬほどの人であふれかえっていた。

「すごい盛況っぷり……」

「聖地の一番大きな建物ですから。観光に来てくださる方も大事なお客さんですし、夜も遅くまで自由に入れます。ただ、もちろん実際の礼拝場は信徒限定ですよ」

「聖エリエスはそこに？」

「いや、エリエス様はさらにこの奥にいらっしゃる」

慣れた様子で大聖堂の通路を進んでいく剃髪の武闘家。

通路の終点――

大聖堂の裏口から屋根付きの外通路へ。そこからさらに歩いて中庭へと出た時には、あれだけの雑踏も嘘のようになくなっていた。

背の高い観葉植物が茂る中庭。

「ここは？」

「本霊宮――大聖堂の別館で、『カナン巡礼聖教船用』の離れ家だ。大聖堂の目的はあくまで信徒の礼拝堂。それと旅団の活動は区分するべきというのがエリエス様のお考えだ。とはいえエリエス様に何かあっては一大事だろう？　そこで、エリエス様には我々のような旅団の護衛がつく仕組みになっている」

本霊宮の通路へ。

そこで、恭しい会釈でレンを迎えたのは濃紫色の法衣をまとった女性だった。

「ネビリム様!?　わ、わざわざここまで出迎えにいらっしゃったのですか！」

「ご苦労でした、幹部タイラス。プルミエール」

年齢は二十代半ばだろう。目鼻立ちの整った淑女が、しっとりとした声音でそう告げた。

「そしてお待ちしておりました。旅団『再来の騎士』の方。歓迎いたします」

「ど、どうも……」

「ここから先は私が案内いたします。タイラス、プルミエール、急な用事をお願いしてしまいましたね。通常の任務に戻ってください」

「は、はいです！」

背筋を正して声を上げる法術士の少女。その指導役にあたる武闘家もまた、小さく一礼して本霊宮の通路を引き返していく。

「申し遅れました。わたくし、カナン巡礼聖教船のネビリムと申します」

優雅な歩調で本霊宮の奥へと進んでいく女性。

「位は一等星。エリエス様の側近として仕えさせて頂いています」

「一等星？」

「俗な言い方をすれば最高幹部、ですね。名目だけの階級だけですが」

淡々と告げる法衣姿の女性。

「最高幹部!?　それ、名目だけなんかじゃないよ。そんなすごい階級なのに……」

「エリエス様さえいれば、わたくしなどいくらでも替えのきく人間です」

穏やかな声音。

無理に作った笑顔でも自嘲でもない。ネビリムと名乗る女性術士の口元に浮かぶ微笑は、見る者に安らぎを与える慈愛の笑みだった。

「精霊信仰の聖地としてカナンが復興してから、まだ十年程度でしょうか。古くから聖地として知られてはいましたが、大聖堂の司祭たちは、いつこの信仰が廃れるか不安の日々を送っていました」

「こんなに賑わってるのに？」

「精霊と対話できる者が一人としていなかったのですよ。精霊と対話できる古代詠唱士はもう現代には存在しない。そう思われていた時期でしたから」

日射しのさしこむ通路を進みながら、ネビリム。

「その救世主となったのが聖エリエス様でした。幼少時から自在に精霊を召喚し、精霊と対話する姿に、多くの信徒たちは彼女を現代の聖女と讃えました。そして聖地カナンは、再びかつての熱を取り戻したというわけです」

「それが聖女伝説のいきさつってことか……」

唯一無二。聖エリエスの代役が存在しないという意味では、確かに最高幹部すら替えがきくという言葉も頷ける。

「さ、こちらです」

特殊な法術の光に照らされた扉。

ネビリムの姿に、その両脇に立つ鎗使いの護衛が深々と会釈。その二人に小さな頷きで返す彼女が扉の前で手をかざす。

——ギィ、と音を立てて開いていく両開きの扉。

扉を封鎖していた鈍色の門が、法術によって外されたのだ。その扉の奥を視線で示して、ネビリムと鎗使いの護衛たちが一歩後ずさる。

「聖堂『祈りの間』。エリエス様が祈祷を捧げる部屋です。どうぞ中へ」

「……俺一人で入っていいの？」

「そのように仰せつかっています。旅団『再来の騎士』のみ案内せよとのことでした。どうぞお入りください。エリエス様がお待ちです」

一歩扉の中へ。

と同時に、ひとりでに扉が閉まっていく。

「すごいな。こんな綺麗な礼拝堂、初めて見た……」

祈りの間。

その部屋の装飾を仰ぎ見て、レンは思わず声を漏らしていた。

陽光を受けて虹色に輝くステンドグラスの輝きに、それを反射する真鍮色の燭台。その横には見上げるほど巨大な教会風琴。

最奥部の祭壇は一段高い階段状で、その奥の装飾は白銀だろう。

それも単純に貴金属を用いて細工しただけの様相ではない。永き時を経て金属の表面が酸化することで、喩えようのない荘厳な雰囲気へと昇華した美しさがある。

「って。だけどエリエスは？」

部屋のどこを見回しても、それらしき人物が映らない。

静謐なる聖堂。人影はおろか物音一つない。

微かに聞こえるのも、この広い空間を対流する小さな風音だけで。

……いや。

……この音、ただの風鳴りじゃない？

『エリエス、来マシタヨ』

『待ッテタ人間？　ネエ、ホントニ聞コエルノ？　声……エリエス以外ノ人間ニ？』

聖堂に渦巻く大気の奔流ではない。鼓膜にでも脳内でもなく、胸の奥へ。心に直接訴えかけるようなこの幽玄の響きは……

「精霊か!?」

「――風の始原精霊、風を解いて。彼に精霊の声が届いているのはわかったわ」

祭壇に吹きこむつむじ風。

小さな竜巻のように圧縮された空気が渦巻き、やがて終息していく。

大気の屈折。精霊の力によって歪曲された大気が元に戻った後の祭壇に立っていたのは、一人の少女だった。

「初めましてというのかしら？　それとも、こんにちは？」

金色の法衣を羽織った少女。

年齢は、十六か十七。ちょうど自分と同じ年の頃だろう。

愛らしい表情ながらも濃緑色の双眸に凛とした気高さを湛えており、ステンドグラスを通した光を浴びて輝く瑠璃色の髪が印象的だ。

「言葉遣いがおかしかったらごめんなさい。あまり外部の人間と話す機会は多くないの。特にあなたのような同年代の男性と話した経験なんて数えるくらい」

「……君が？」

「エリエス――エリエス・シア・凛・ケール」

ここ聖地カナンの精霊信仰を象徴する聖女として知られる少女。

そんな彼女が、すぐ目の前の祭壇に立っている。

「何から話をしましょうか。いずれは聖地に来ると思っていたけれど、正直、こんなにも早く来ると思ってなかったわ。本当は私が先に動く予定だったのだけど……そうね。そういう意味では、レン、あなたが聖地に来た理由も気になるところね」

「俺の名前は、タイラスから聞いてる？」

「ええ。イスカセル地下神殿での経緯も聞いているわ。地の始原精霊の居場所を感知し、そして火の始原精霊を召喚してみせたことも。それに、あなた本人のことはもちろん……まさかあの終焉戦争の三大姫を連れているなんて驚いたわ」

「キリシェたちのことまで知ってるのか!?」

タイラスと、プルミエール。

カナン巡礼聖教船の二人が知っているのは、自分が精霊と対話できるという情報だけのはず。そこから終焉戦争との関連性は連想できないはずなのに。

「どうしてそこまで言いきれるんだ？」

「偶々よ」

少女が、祭壇からじっとこちらを見下ろしてくる。

「英勇そっくりの容姿のあなた。そして三人の正体不明の少女たち。プルミエールの報告では、そのうちの一人の娘が、悪魔の法術に酷似した術式で鉱巨人を粉砕したと聞いたわ。そこまで材料が揃えば一つの仮説くらい思いついてもおかしくないでしょう？」

すなわち――

人間の歴史書において、終焉戦争で戦死したと記される竜姫、大天使、魔皇姫。

その三大姫たちは生存していた、と。

「あとはあなたの反応ね」

　くすっと口元に手をあてて悪戯っぽく笑む聖女。

「そういう真面目な反応は嫌いじゃないわ。でも素直すぎて損する性格って言われない？」

「……あー。やられた。俺の返事で予想の真偽を確かめたかったわけだ」

　見事なまでに誘導に嵌められた。

　そのことにようやく気づき、レンは溜息とともに後ろ頭を掻いた。

「で？　そんな回りくどいことして何がしたいんだよ」

「そう身構えないで。私だって、まさかこんなにあっさり引っかかると思わなかったんだもの。無礼は謝るわ」

　気楽な様子で肩をすくめる聖エリエス。その仕草は、聖地復興の聖女と謳われるにはあまりにあどけなく、そして人なつこいものだった。

「謝るって言うわりに楽しそうだけど？」

「そうね。楽しいという表現が正しいかはわからないけど、堅苦しくないのは気楽でいいわ。聖地だとどうしても、私は敬語を使われる側の立場だから」

　コツ、と靴音を響かせて祭壇から下りる聖女。

「エリエス、夏雷からはそう呼ばれてるわ」

「俺もそう呼んでいいの？」

「聖女様とエリエス様以外なら何でもいいわよ。私とあなたの間に主従関係がない以上、敬語を使うのも使われるのも息苦しいから」

　ごくごく真面目な顔つきの彼女。

「とはいえ、さっきの引っかけみたいな誘導だけど、あれは私の方が驚いたわ。そう……あの三大姫が生きてたってわけね。三百年前の伝説だけど、竜と天使と悪魔だものね。寿命からすれば生きておかしくない」

「ならさ、俺も聞きたいことがあるんだけど」

　独り言のように呟くエリエスへ、レンは続けた。

「さっきネビリムっていう女性にも聞いたんだけど、この場所に部下が一人もいないっていうのはどうしてさ？　自分で言うのも変だけど、たとえば俺がすごい危険人物だったらどうする気だったんだよ」

聖地カナンの聖女。彼女がこの地にとって唯一無二の存在であることは、カナン巡礼聖教船の最高幹部からも聞いている。

……女神レスフレーゼにだって、『熾天の園』には七曜の天使が仕えてた。

……なのにこの場所は、エリエス一人しかいない？

外には護衛の鎗使い二人がいたのはレンも目撃しているが、聖女の間にエリエス一人というのはあまりに無防備に思える。

「しょうがないのよ。この場所は私の祈りの場だけど、同時に精霊の住処にもなってるの。私以外の人間が頻りに出入りすると精霊が落ちつけないから」

「だけど……」

「あと今回に限っては、初対面だけどあなたのことは特に警戒していないわ。その理由も、実はこれからの話に関係することだから」

「これからの話？」

「ええ。だけどその本題の前に、どうしても確認したい事が一つあるの」

エリエスがその華奢な指を一本立ててみせる。

「確認って？　聖地までどうやって来たかってのはタイラスにも聞かれたけど……」

「私の疑問は、あなたが本物の英勇エルラインかどうか」

「……ああ。そっか、それは聞かれても仕方ない」

終焉戦争の三大姫と共に行動している。さらに英勇そっくりの外見をした剣士となれば、聖地カナンの聖女でなくても当然に気になることだろう。

「どうかしら？」

「こればっかりは誓ってもいいけど、俺はそんな大層な人間じゃないよ」

瞬きもせずに自分を見つめるエリエスに、レンは飄々とした口調で答えた。

「エルラインに子孫がいないのは知ってるだろ？　だから当然、直系の子孫なんて訳でもない。ずっと昔にさかのぼっていくと、十一代前の先祖がようやく親戚にあたるような遠縁中の遠縁にはなるらしいけど」

「まあそうでしょうね。エルラインだって人間だから」

「なら本題っていうのは――」

「取引、しない？」

祈りの間。

厳かな静けさに包まれた聖堂に、聖女の凛とした声がこだまする。

「来なさい水の始原精霊（ウンディーネ）」

ぽちゃん、と響く水飛沫。

硬い床の隙間からわき上がった水が噴水のように噴き上るや、またたく間に一つの巨大な水球となり、それがさらに姿を変えていく。

――外見は人間の少女そのもの。

――蒼く透きとおった肌の少女と喩えるのが一番近いだろう。

その精霊が、エリエスの隣に着地する。

そしてそれだけではない。

「風の始原精霊（シルフ）も!?」

碧色の羽根が特徴の小人。

こちらは大気と同化するようにほぼ透明。レンが目を凝らしても陽炎のようにおぼろげな姿しか見えないが、それがエリエスの頭上を旋回している。

二体の始原精霊。

「これで私の手の内は明かしたわ」

聖エリエス――現代唯一の古代詠唱士（エイシエンター）として知られる少女が右手をかざす。小鳥のように、その指先に留まる風の始原精霊（シルフ）。

「もう一度言うわ。取引しましょう。私も聖女という立場で各地を訪れる合間に、多くの場所を探索してきたわ。人類未踏破の秘境にも挑戦したし、まだ誰も見つけてない精霊の住処、それに天界や冥界に続く審門も発見してきた。けれど、これでもまだ足りないの。あなたが何かを求めて聖地に来たように、私もまた欲している情報がある」

「そっか、本題っていうのは俺とキミとでの情報交換？」

「正解。私が欲している情報は、まずあなたたち『再来の騎士』について。なぜこの時、この時代に現れたのか。まずはそれを確かめたいの」

エリエスの言葉の意味に、しばしの沈黙を挟み。

「ええと、意外っていうかさ……それ、そんな気になること？」

狐につままれたような顔でレンは返した。

たとえばレン自身の素性。そして古代召喚術のこと。

さらにはキリシェたち終焉戦争の三大姫について。自分がエリエスの立場なら、真っ先に訊ねる内容

はそうした部分だろう。

　だが――

「ええと、それに『この時代に現れた』って……？」

「タイミングが噛みあいすぎている。剣聖シオンもまた、そう私に言い残していったわ」

　二体の始原精霊を従えて。

　聖地カナンの象徴（しょうちょう）たる少女は、こう続けた。

「あなたたち『再来の騎士』が現れたのと、世界中で精霊が怯（おび）え始めた現象。この二つがほとんど同時だった。その因果（いんが）を確かめることが聖女としての私の役目」

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

　どこまでも続く果てなき蒼海（そうかい）。

　陽を反射して輝く水面に、波飛沫（しぶき）の気泡がはじける白の色彩変化（アクセント）。

　その遙（はる）か上空。

　海をこえる渡り鳥よりも高く、空に浮かぶ雲海（うんかい）よりもなお高く――

「まったく女神もロクな事しないよねえ。レンとフィアだけ別大陸に移動させちゃって。アタシとキリシェは海の上で待ちぼうけだったっていうのにさ」

「まあまあ。女神様も悪気があったわけではありませんから」

「むーっ」

　腕組みし、頬（ほお）を膨らませる先代魔王（エリーゼ）。

　空中で可愛（かわい）らしく正座した恰好（かっこう）で、彼女が座っているのは巨大な竜の頭部だった。

「ところでキリシェ、もうちょっと乗り心地良くならない？」

『……まだ船酔いが残ってる』

　威厳（いげん）を感じさせる重低音ながらも、どこか女性的な柔らかさも感じさせる声。

　それは、神秘的な光に包まれた白銀色の巨竜（きょりゅう）だった。

　――天銀竜（てんぎんりゅう）。

天使の羽のように純白の羽毛に包まれた一対の翼を有し、真珠よりも儚く清廉な、蒼を帯びた白銀の煌めきを湛えたその身体。

体高だけで十メートル以上ある巨体だが、他の竜のように全身を支える胴体が太いわけでもなく、むしろ全身の輪郭はどこか人間を思わせるほどに細く華奢。

エメラルドグリーンの双眸もまた宝石を思わせる輝きに満ちている。

そんな霊的な雰囲気の竜が――

『うぅ……目の奥が揺れる気分』

弱々しい声でそう呟いた。

「ホント、船酔いにだけは弱いねぇ。それ以外は無敵みたいなもんなのに」

『わたしにだって苦手なものくらい……あうっ……』

「ちょ、ちょっとキリシェ!?」

空中でぐるんと反転する白銀色の竜。

危ういところで鱗に掴まるエリーゼだが、人間であればたとえ手綱を握っていたとしても振り落とされていただろう。

「エリーゼ、私に掴まりますか？」

巨竜のわずか前方を飛翔しながら、フィアは苦笑気味に振り返った。

「その調子だと、あと何回キリシェが空中でとんぼ返りするかわかりませんよ」

「いやー。そうしたいんだけどねえ」

天銀竜の頭にしがみつくエリーゼ。

「フィアってば、女神のすぐ傍で話しこんでたでしょ。身体に女神の匂いが残ってるよ。フィアに掴まって飛んでいきたくても、いま掴まったらアタシ、女神の祝福に触れて身体が痒くなっちゃうし」

「ああ、そうでしたわね」

女神と先代魔王の宿命だ。互いの強力すぎる力が反発しあうがゆえに、その力に触れることで過剰反応が起きてしまう。

「ていうわけで我慢かなぁ。ねえねえフィア、あとどれくらいで着くの？」

「一時間もかかりませんよ」

大陸間移動。本来ならば片道だけでも外洋帆船で数日がかりのところを、往復で二時間足らず。レンが聖地カナンを見学している間に合流できる計算だ。

「一時間ねぇ……」

「どうしました？」

「いや、アタシの思い違いかな？　向こうからさ、なーんか嫌な匂いがするんだよね」

　まさに自分たちが向かわんとする目的地。

　聖地カナンの方角を睨みつけるように見つめる褐色の幼女。

　――魔王の第六感。

　それは単なる嗅覚や勘といった概念を越えて、もはや一種の能力と捉えて差し支えない。その事実はフィア、キリシェも当然に既知のことだ。

　だが通常、それを感知してもエリーゼがわざわざ口にすることは滅多にない。

　イスカセル地下神殿に仕掛けられた罠のように。

　それが人間世界で深刻な危険と見なされる場合であっても、エリーゼやフィア、そしてキリシェにとってはさしたる脅威にならないことが大半だからだ。

　それが――

　かつての冥界の君主をして、言葉を濁すほどの『何か』が聖地にいる。

「……」

　先代魔王は無言。目を細め、聖地の方向を見据えたまま。

「向こう。もうレンがいるんだよね？」

「ええ。私たちが着くまでは都の様子を見て回ってると思いますが」

「巨大な気配が二つ」

「二つ？」

　エリーゼの言葉をそのままくり返す大天使。

「そのうちの一つはアタシにも心当たりがある。だけど、もう一つの気配の正体がわからないんだよね。何だろ。すごい、こう……嫌というか苛つく波長」

「急ぎますか？」

「うん。大抵の相手ならレンに頑張ってもらってアタシらは高みの見物するところだけど、今回のは、ちょっと判断に迷うね。本当に得体の知れない気配」

　大いなる天銀竜の頭部に乗った姿勢で――

　吹きすさぶ天上の風に黒髪をなびかせながら、エリーゼはそう続けた。

「こんなに嫌な感じは二百年ぶり。終焉戦争以来、か……」

2

聖地カナン・本霊宮(ほんれいきゆう)——

真鍮色(しんちゆういろ)に輝く装飾(そうしよく)の煌(きら)びやかさと、幾星霜(いくせいそう)の時が刻まれた荘重(そうちよう)な雰囲気の両方を兼ねそなえた祈りの間で。

「……そう。じゃあ本当に偶然だったのね」

二体の始原精霊を従えた少女が、自らに言い聞かすようにそう呟(つぶや)いた。

「誤魔化(ごまか)してるような感じもなさそうだし。信じていいのかしら」

「ていうか、俺の素性(すじよう)なんて調べようと思えばすぐ調べられるって。何なら聖フィオラ旅学園の教官にでも聞けば一発だよ」

そびえ立つ教会風琴(パイプオルガン)を横目に眺めながらレンも返す。

……話せる部分は正直に話した。

自分の出自。

キリシェやフィア、エリーゼとの出会いの経過。旅団(パーティ)としての目的が、他の旅団(パーティ)と何ら変わりなく世界録(アンコール)の探索(たんさく)であること。

そして、自分が古代召喚術によって精霊と対話できるようになるまでのこと。

逆に言えばその程度だ。エリエスからの問いに、レンが答えに窮(きゆう)するようなものは一切なかったと言っていいだろう。

「それだけ聞く限り、『再来の騎士(あなたたち)』と、私の気にかけてる精霊の怯(おび)えには直接の関係は見つけられなさそうね」

「……そういえばその精霊についてだけど」

エリエスの隣に佇(たたず)む水の始原精霊(ウンディーネ)。そして彼女の指先に留まる風の始原精霊(シルフ)を見つめ、レンは思ったままを素直に口にした。

「カナン巡礼聖教船(じゆんれいせいきようせん)のタイラスとかプルミエールって、エリエスの部下だよな？」

「そうよ」

「あの二人さ、俺が火の始原精霊(サラマンダー)を召喚した時にすごい驚いてたから。俺てっきり、ここに呼ばれた理

由も『お前が本当に精霊を召喚できるなら、いま目の前で召喚してみせろ』みたいなこと言われるのかと思ってた。そうじゃないんだ？」

「そんなの必要ないわ」

くすっと、わずかに口元をやわらげて首を横にふる聖女。

「あなたの傍（そば）から、精霊の気配と声が聞こえるもの」

「え？」

「あなたに懐（なつ）いている火の始原精霊（サラマンダー）と土の始原精霊（ノーム）。どちらもすごく楽しそう」

「……そこまでわかるのか？」

レンでさえ、精霊と対話するには精霊が顕現（けんげん）するか、あるいは精霊が自分に向けて話しかけてこないと感知は難しい。

なのにこの少女は、精霊が近くにいるというだけで自在に声を聞き取れる？

「一種の特技みたいなものよ」

自慢げというより、ただ事実を述べたにすぎない——そんな口調の少女。

「古代詠唱士（エイシエンター）といっても、はるか古代から、個々人ごとに精霊との感応値（かんのう）には差があったということまではわかってるわ。私の場合、精霊が声を発しさえすれば、それが世界中のどこにいても感知できる」

「……それ、すごいじゃん！」

古代詠唱士（エイシエンター）としての練度（れんど）が違う。エリエス自身は何気ないつもりの一言かもしれないが、それだけで歴然（れきぜん）とした差を突きつけられた気分だ。

……さすが。

……現代最後の古代詠唱士（エイシエンター）って呼ばれるのは伊達（だて）じゃない。

精霊との対話能力。感応値。

習熟度か、それとも天賦（てんぷ）の才によるものなのかはわからないが、精霊に関する霊知（れいち）については自分よりも遙（はる）か上を行っていることだけはわかる。

「でも俺の精霊だけじゃないだろ。そっちはどうなのさ？」

エリエスに寄りそう精霊二体。

水の始原精霊（ウンディーネ）と風の始原精霊（シルフ）、どちらもさっきから無言でこちらを見つめている。

「私の精霊たちは、ずっと怯（おび）えているわ。だから私が一日中、この部屋で一緒にいてあげてる。そうしないと不安がるから」

「怯えてる？」

「そうよ。それは世界中の精霊たちに共通して言えること。あなたの上の始原精霊だって例外じゃないわ。イスカセル地下神殿でウチの幹部と出会った時のこと覚えてる？　いるはずの精霊が祭壇にいない。逆に、そこで待っていたのは何だったかしら」

「――――」

　問い返され、レンはなかば無意識のうちに宙を見上げていた。

〝目的の精霊は、二年前の調査ではこの祭壇にいるはずだった〟

　確かに、タイラスも精霊の住処でそう言っていた。肝心の上の始原精霊は祭壇には不在で、自分の守護者を配置して隠れていた。

　そしてその様子も、最初に出会った時は――

〝茶褐色のフード付き外套をまとった小人〟

〝大きさは小型の猫程度のそんな精霊が、自分の足首に掴まって、不安げに、どこか心細そうにこちらを見上げていた〟

「……思いあたる節はあるよ」

　見下ろすのは自分の足下。顕現こそしていないが、上の始原精霊が今まさに自分の足にしがみついているような感覚さえある。

「俺が来るまで上の始原精霊も隠れてた。それで、俺が来たら安心したみたいだった」

「でしょうね。その調査を頼んでいたのが幹部だったというわけ」

　そう頷いて。

　何か思いを巡らせるかのように沈黙する聖女。

「今、この世界には得体の知れない『何か』がいるわ。まだ公的には、世界中のどの都市も発表していない。そもそも目撃例が圧倒的に不足してるから。でもソレが――」

「精霊を脅かしてるっていうのか？」

「私と、そして剣聖シオンはその『何か』の正体を探ってる。現時点でわかってることは、それが精霊と同じ、純粋な霊的波動体であるということ」

「えっ!?　それは……精霊以外のってこと？」

この世界でただ例外的に、肉体の軛から解きはなたれた純粋な霊的波動体が精霊。

エリーゼはそう言っていた。

それがどうして存在を保っていられるのか。どうやって生まれ、そして消えていくのかという過程は、高位存在と呼ばれる竜や天使、悪魔にもわかっていない。

であるのなら——

エリエスの言う霊的波動体というのも、精霊ではないのか？

「まだわからないわ。ソレを『精霊』という言葉で一括りにしていいかわからない。ただ、私たち人間の知ってる精霊とは明らかに違うの。より高次で、より危険。今のところ怯えているのは精霊だけだけど、ソイツらがもし本格的に顕現したら、地上にどんな影響があるのか予測できない」

よどみない口調でそう告げる瑠璃色の髪の少女。

「あ……」

「どうしたの？」

「いや、思い過ごしかもしれないけど、そういえば王立七十二階位特務騎士団の連中が、気になること言ってたの思い出した。……確か、精霊の怯えの正体を知りたければ追ってこいみたいなこと俺に言ってきたんだ」

序列二位・外法騎士カサディン。

そして王立七十二階位特務騎士団の動きを、『精霊の調べ』もまた警戒していた。

世界最大の軍事都市国家・覇都エルメキア。その全容を知る者はいないと外法騎士が言いきった理由と、そこに隠された秘密——

「ええ。カナン巡礼聖教船としても、王立七十二階位特務騎士団の動きには注視してるわ。ここだけの話、覇都に送り込んでいる諜報員も一人や二人じゃない。でも、それで得られた有力な情報はいまだ皆無。結局のところ私も剣聖も、精霊を脅かすモノの正体を突き止める方法は一つしかないって思ってる。それが……」

「世界録だろ？」

「過去、同じように精霊の怯えが観測されたのは二百年前の終焉戦争の時だけ。ならば、その理由も世界録に記されていると考えるのが自然でしょう？」

終焉戦争と精霊の怯え。

それから二百年の時を経て、再び精霊が怯え始めている。

さらには、聖エリエスや剣聖シオンが正体を探っている『精霊を脅かすモノ』の存在。

「レン。あなたも精霊を従える身として気にならない？」

諭すような口調の聖女。

「私からは情報を与えたわ。あとは――」

「その話、オレもまぜてもらおうか」

破砕音。

猛烈な力の衝撃を受けて、聖堂の横壁が無数の瓦礫となり、その奥にある教会風琴が縦に真っ二つに砕けちった。

「なんですってっ!?　三重の守護結界に守られてる聖堂が？」

崩壊する祭壇前の壁。

ぽっかりと空いた巨大な穴を見つめ、エリエスが驚愕の声を上げる。

「あなた……」

「三重結界？　あんな紙切れのように脆い薄膜が結界のつもりだとすれば滑稽だな。聖地と呼ばれる人間の聖域も、しょせんはその程度ということか」

瓦礫を踏みこえて『祈りの間』へと踏み入る褐色の悪魔。

ゆったりとした麻の外套にその身を包み――。

そこから覗く素顔は、外見だけならば十代中頃の少年程度だろう。

肩にかかるほどの濃緑色の髪に、赤みを帯びた双眸。その顔だちは奇妙なほど中性的で、映る角度によっては可憐に。顔の角度次第では凛々しいとも思わせる造形。

だが、その外套の背中側から覗くのは、竜のソレにも似た鱗付きの巨大な尾。

さらに身体から立ち上るのは禍々しい障気。

……悪魔？

……しかも、ただの悪魔じゃない。

ガリア大炎山でレンが出会した数々の悪魔の威圧感など比ではなく、こうして対峙して感じる怖気は、むしろ炎の将魔にさえ迫る。

「あの英勇さながらの姿。なるほど、お前が炎の将魔の言っていた剣士か？　聖女だけでなく、これは良い時機に訪れたものだ」

聖エリエス、そして自分（レン）とを交互に見比べる褐色の悪魔。

聖堂の壁をあっさりと撃ち抜いた時から好戦的だったその双眸が、さらに興奮を増したかのように大きくみひらかれる。

「我が名は魅亞（ミア）。魔王直下・五大災（ごだいさい）が一人『波の将魔』」

「五大災!?」

魔王に反旗（はんき）を翻（ひるがえ）して地上に現れた炎（アシエンデイア）の将魔のみならず、さらに新たな五大災が冥界（めいかい）から地上へと上がってきた？

「どういうことだよ。なんでお前みたいな高位悪魔が、こんな人間の聖地に……」

ガリア大炎山に拠点（きょてん）を構えていた炎（アシエンデイア）の将魔の時とは訳が違う。

こんな人間の大都市に姿を現し、よりによって聖女の『祈りの間』に侵入してみせた。この聖堂の外でも大騒ぎになっているはず。

「ある相手を追いかけてここまで来た。姿も能力も精霊に似た正体不明の曲者（くせもの）。そして、その気配を追いかけてみれば聖地（ここ）に行きついた。つまり――精霊を従える聖女、お前の仕掛けかと思ってな」

射貫（いぬ）くような将魔の視線。

並の人間ならばそれだけで息すら凍りつく敵意を直（じか）に浴びながら、聖地を統（す）べる聖女はあくまで淡々（たんたん）とした声音（こわね）で。

「あなたの言うそれはユメル大陸の北端。天界の審門（ゲート）がある場所での戦闘のことかしら」

「なるほどな。もはや誤魔化（ごまか）す気もないと――」

「いいえ。その逆よ」

エリエスを庇（かば）う恰好（かっこう）で前へと進みでる水の始原精霊（ウンデイーネ）。

さらに上空に待機する風の始原精霊（シルフ）。

二体の精霊に護（まも）られながら、聖女たる少女は凛（りん）とした口調で返した。

「あなたの言う『精霊に似た曲者（くせもの）』とやらは、人間側も正体を探っているところ。精霊に似ているからといって、それがすべて精霊信仰に関わっているというのは的外れ」

「ほう？　では、なぜオレが奴に接着（せっちゃく）した残響（マーキング）がこの地に残っている？」

「……残響（マーキング）、何のことかしら」

「我は波の将魔。一度目の戦闘では未体験の攻撃に手間取ったが、その戦闘で俺もまた力の波動を奴に付着（ついせき）させた。ソイツがどこへ逃げようと追跡できるようにな。オレしか感知できず、オレしか解除でき

ない独自呪詛だ」

「あいにく心当たりがないわね」

「そう答えるしかあるまい。貴様たち人間の姑息な態度は、もう何百年前から変わりない」

　ズッ――轟音と共に震える聖堂。

　波の将魔が、その旅装束から覗く巨大な尾を聖堂の床に叩きつけたのだ。

「だが、それでいい」

　突きだした拳を握りしめる魅亞。雄とも雌ともつかぬ褐色の悪魔の双眸が、興奮を孕んでこちらへ向けられた。

「偽英勇レン。炎の将魔が貴様をずいぶんと評価していた。あの気分屋が、人間をああも愉快げに語っていたのは久方ぶりだ」

「……俺を？」

「そう。五大災として先代魔王様への忠誠を忘れたわけではないが、これで堂々と、貴様、そして聖女と謳われる人間の娘と戦う口実ができた。エリーゼ様もここにいないのであれば、貴様と拳をかわすのにこれ以上都合のいい機会はあるまい」

　勢いよく宙へ投げ出される旅装束。

　軽甲冑をまとった悪魔がゆっくりと近づいてくる――レンが目を疑うほどに華奢な身体ながらも、その全身に尋常ならざる障気と殺気とを滲ませて。

「我が暴虐をもって貴様らに訊ねよう。あの精霊に似たモノの正体。そして、貴様ら人間の強さ。オレを失望させてくれるなよ？」

Record.5 | 波の将魔

1

レンが身構えるより先。
エリエスが精霊たちに命ずるよりも早く――
たった一言。
波の将魔・魅亞（ミア）は、己（おのれ）の右腕を高々と天井へと向けて宣言した。
「力の禁章『波動の世界』」

真鍮色（しんちゅういろ）に輝く聖堂の壁が、一瞬にして、半透明の脈打つ壁に塗り替えられる。

「これは!?」
不気味な脈動をくり返す壁を前に、レンは慌てて跳び退（の）いた。
「壁？　それとも結界か？」
「悪魔の法術（ほうじゅつ）結界でしょうね。閉じこめられた。私たちが逃げられないようにするためというのもそうだけど、むしろ私の部下が入ってこれないようにという思惑（おもわく）かしら」
「頭が回る娘だな。単なる精霊信仰の指導者かと思いきや、中々に冷静だ」
脈打つ壁を視線で指し示す波の将魔。
「せっかくの戦いに余計な手出しをされるのも興ざめだからな。もはや内からも外からも、出入りは永久に絶たれたと思え」
「永久？　あなたを倒せば話は別でしょう」
「そうだな。……ソレができるのであればな!」

轟音を響かせて床を蹴りつける悪魔。その音がレンの鼓膜に届いた時には、魅亞の姿はエリエスの眼前まで迫っていた。

「速いっ!?」

「武闘系の悪魔との対面は初めてか？　あらゆる悪魔が法術頼みと思ったのならば、それは大きな誤りだ」

真下から拳をすくい上げる魅亞。

悪魔の拳——直接には一切触れていないはずの床が、その拳が掠めた途端、見えざる何かを浴びて瞬時に分解、無数の砂礫と化していく。

……悪魔がその身にまとう障気？

否。障気であれば炎の将魔の時のように禍々しい霧状の物体が全身を覆っているはず。いま波の将魔の全身から放出されているものは、陽炎のように大気を歪めながら迫りくる不可視の『波』だった。

「我が波動、ただの衝撃波と思うなよ」

将魔の拳がエリエスの胸もとへと容赦なく叩きこまれる。

「————っ……あ……！」

「エリエス！」

少女の身体が紙切れのように後方へ吹き飛んでいく寸前、レンはかろうじてエリエスの背後に回りこんで彼女の身体を受けとめた。

が。

止められない。エリエスの身体を受けとめた衝撃に圧され、レンは彼女を抱きかかえたまま、聖堂の壁に叩きつけられた。

「痛っ。エリエス、おい、エリエス!?」

「そんな……耳元で大声出され……なくても、聞こえてるわよ」

将魔の拳が直撃した。

エリエスのまとう法衣は跡形もなく千切れ飛び、溶けるように消滅。

彼女自身の肉体も、どれほど深刻なダメージを受けていてもおかしくない。そんなレンの不安に反し、ふらつきながらも聖女が自力で立ち上がってみせる。

動ける。

いや、今の一撃を受けながらも意識を保っている時点で奇蹟と言って過言でない。

「立って平気なのか」

「あなたが……咄嗟に庇ってくれなかったら、無理だったわね。意識……数秒くらい飛んでたから」

背中をくの字に曲げながら、エリエスが正面の悪魔を睨みつける。

「それより警戒なさい。あの悪魔の拳、とんでもなく極悪な力を纏ってる。聖衣に刻印された加護も、私が自分で展開していた防御法術もすり抜けてきた」

「反射的に精霊へ命令を下していたか」

真顔でそう口にする波の将魔。

エリエスの前に立つ水の始原精霊、そして上空を浮遊する風の始原精霊を指さして。

「風の始原精霊の息吹がオレの『波動』を中和。さらに水の始原精霊の放った水撃により、拳の威力もほぼ完全に相殺された。咄嗟ながら最善に近い対抗策だ」

「なにが最善よ……」

吹き飛ばされた拍子に切った唇を手の甲で拭うエリエス。

「こっちは意識失いかけたっていうのに」

「いいや、大したものだ」

拳を握りしめたまま、嬉々とした口調で返す五大災。

「我が波動の特性は『障壁透過』。悪魔の障気であろうと天使の守護結界だろうと、我が破壊の浸透を妨げること能わず。これを受けて立ち上がった人間はもちろん、波動を相殺されたことも過去に覚えがない。だが、コレはどうする？」

聖堂の床に散乱した瓦礫。

鋭利な牙のごとく尖った岩の破片が、魅亞の波動を受けて次々に宙へと浮かんでいく。さらにソレが奇怪な黒の礫へと姿を変えて――

「黒の魔弾よ」

強力な障気と波動とを帯びた黒の礫が、弾丸のごとく虚空から射出された。

「っ、水の……」

「エリエス、動くな！」

言いかけた聖女を押しきって、レンは聖堂を駆けた。

――精霊は最終手段。

精霊は、五大災のような強大な相手に対する唯一の対抗手段であり、使い方次第で切り札にもなりえる。それは波の将魔も承知であり警戒しているはずなのだ。

……だからこそ、手の内はギリギリまで見せられない。

……使うべきは今じゃない。

無数の礫へと身を投じる。

「レン!?」

「愚かな。自ら魔弾へと飛びこむか」

聖女の叫びと悪魔の声。

そのどちらにも応えることなく、レンが見据えたのは迫りくる無数の黒の凶弾。魅亞の波動によって凄まじい勢いで撃ちだされた礫を見据えて。

……狙える。

……炎の将魔が降らした炎の流星と比べれば。

「遅い!」

剣閃が、黒の凶弾を弾きかえした。

斜め上に弾かれた礫が別の礫へと激突し、跳弾のように虚空で角度を変え、レンへと迫る別の礫をも打ち落とす。さらに激突したもう一つの礫が、撞球のごとく次々と隣り合う礫にぶつかりあい、乱反射をくり返して最後には砕けて消滅していく。

わずか一刀。

その一振りの剣閃が、レンとエリエスに向かうほぼ全ての凶弾を打ち落としていた。

「貴様、その技巧は!?」

「技巧でも何でもねぇよ。……俺には、一緒に練習してくれる相手がいなかった。だから、毎日こういう練習しかしてこなかった。それだけだ」

――豪雨の日は、降りそそぐ水滴を。

――暴風の日は、風に舞う小石の破片を相手として剣を振り続けてきた。

それが悪魔の障気をまとっていようと関係ない。飛び交う礫であれば、風に舞う砂礫を打ち落とす剣技の延長線上にある。

「炎の将魔め……やってくれる。古代召喚術で召喚する精霊と、そして英勇の剣にだけ警戒しろだと？　ふざけた情報を与えてくれたな」

片腕を突きだし、武闘家にも似た構えをとる高位悪魔。激昂した口調とは裏腹に、その双眸が、さながら肉食獣のごとく爛々とした輝きを放ちだす。

――残影。

一瞬の影を残し、魅亞の姿が消失。床を滑るように転移した褐色の悪魔が、剣を握るレンの頭上め

がけて手刀を打ち下ろす。

轟ッ。

その余波だけで大気を軋ませる一撃。

必中。なかばそう確信して五大災の放った手刀が破壊したのは、一瞬前までレンの立っていた床だった。

「反応した？　たかが人間の剣士が、このオレの動きに対応したというのか？」

「ちょっと前までなら直撃してたさ」

大気を切り裂く手刀の風圧を肌に浴びながら。

レンは、魅亞と交叉するようにその背後へと回っていた。

……フィア先輩ありがとな。

……ずっと鍛錬に付き合ってくれて。アレがなかったら絶対に反応できなかった。

〝まずは私の歩法を見てください。そしてそれを真似ること〟

大天使の体術。

それを思い出すかのように身体が動いた。いや、動くようにしてくれたのだ。

たとえこれが現時点で百回に一度為しえる偶然だったとしても、あの修練なくして、その一度を今ここでたぐり寄せることは叶わなかった。

「はっ！」

「小賢しい」

背後からのレンの太刀。

それを薙ぎ払ったのは、魅亞の臀部から突き出た巨大な尾だ。尾の先が剣先を掠める。巨岩が衝突したような衝撃が腕を痙攣させ、レンの追撃が一手遅れる。

その刹那、魅亞はレンへと振り返っていた。

「なるほど。炎の将魔が貴様を気に入るわけだ。ならば――」

「私に背を向けていいと思ってる？」

痛めた胸元を押さえながら、エリエスがその指先を魅亞へと突きつける。

「水の始原精霊！」

聖女の咆吼。

その気高き声に応え、蒼く透きとおる身体の精霊が両手を振り上げた。

……ぽちゃん。

天井から振りそそぐ四つの水滴。それが魅亞の両手両足に一滴ずつ付着した瞬間、巨大な水縄となって全身を絡めとり、動きを拘束する。

「悠然たる言の葉よ。幾重にも木霊し、顕現なさい」

聖堂の天井と床、それぞれ同時に浮かびあがる黄金色の法術円環。

強烈な水流に自由を奪われた波の将魔へ。

「穿て!」

裁きの雷。間近にいたレンが一瞬視界を失うほどの光量でもって生じた落雷が、褐色の悪魔の全身を灼き焦がした。

「がっ……!?」

想定を遙かに上回る威力の雷撃に、苦悶の声をあげる波の将魔。

膝を床につかぬまでも、その身体がふらりとよろめく。

――エリエス・シア・凛・ケール。現代最後の古代詠唱士にして聖女。

――且つ、法術士としても世界最高位の実力をもつ少女。

その彼女が放った不意の法術は、最上位の悪魔にとっても想定外となる反撃だった。

さらに、聖女の逆襲はそれだけでは終わらない。

「続きなさい風の始原精霊!」

吹き荒れる突風。

聖堂の内壁すら容易く切り裂く不可視の風刃が、魅亞の身体をその軽甲冑ごと一瞬にして何千回と切りきざむ。

「……小癪なっ」

全身からおびただしい紫の血を流しながら、なお波の将魔は止まらない。

波動の収束。

純粋なる力の具現とも言うべき『波』を湛えた拳を、床めがけて振り下ろす。

聖堂どころか聖地カナン全域をも巻きこむ破壊の解放。

「この場ごと――」

「その前に、お前が沈め」

破壊の拳が発動するより早く。

レンは、己の手に握る剣を振り上げていた。そして――

「火の始原精霊、思いっきり頼む」

『思イッキリ！』

レンの肩に顕現した火の始原精霊。

小型の竜の姿を模した精霊が、声を弾ませて呼応する。その目がわずかに輝くと同時、虚空に瞬く火花が巨大な火柱と化し、それがレンの剣へと収束していく。

――炎の精霊剣。

煌々と輝く超高熱の赤刃。

その真紅の剣閃から生まれた衝撃が、波の将魔の身体を薙ぎ払った。

「……ツツツ！」

声にならない絶叫を上げる褐色の悪魔。

その身体が聖堂の壁まで吹き飛び、自らの展開した障壁に激突。さらに壁から伝った衝撃で聖堂の天井が崩壊。

五大災は、瓦礫の山へと埋もれて見えなくなった。

静寂。うずたかく積もった瓦礫の山をしばし見守って。

「決着……か？」

レンは、顎先からしたたり落ちる汗をぬぐい取った。

……手応えはあった。

……なのに、まだ震えが止まらない。

手刀を間一髪でかわした時のこと。

直接の一撃こそかわしたが、交叉の際に魅亞の「波動」が一瞬肌を掠めた瞬間、全身の肌が根こそぎ剥ぎ取られたかのような激痛と寒気が走っていった。

別次元の力の具現。身体の一箇所でも魅亞の波動を浴びていれば、その力を受けて何一つ抵抗できぬまま倒れていたのは自分の方だった。

「俺たちの勝ち、だよな」

自分に言い聞かせるように口にする。

「エリエス、傷は？」

「……治癒士（ヒーラー）の勉強もしておくべきだったかしら」

　水の始原精霊（ウンディーネ）に支えられながら歩いてくる少女。聖堂の壁を覆（おお）いつくす半透明の障壁を溜息（ためいき）混じりに見わたして――

「この障壁、早いところ消えてほしいところね」

「脱出不可能とか言ってたけど、これ……消えてくれるんだよな」

「ええ。私の法術（ほうじゅつ）も手応えあったし、あなたの精霊剣も間違いなく直撃していたわ。高位悪魔にも十分な一撃よ」

　うなずいて、彼女が見上げるのはレンの肩に止まった精霊だった。

　火の始原精霊（サラマンダー）。

　今は退屈そうに、小ぶりなくちばしで自分の頬（レン　ほお）を突（つつ）いている。

「あなたの精霊、賢いのね。あんな簡単な命令だけで剣に力を与えてくれるなんて。普通、精霊具を精霊に頼むのはすごい大変な手間なんだけど」

「ああ、この剣のこと？」

　まだ煌々（こうこう）と光を放っている紅蓮（ぐれん）の剣。

「いつものことだからさ。俺、火の始原精霊（サラマンダー）にも土の始原精霊（ノーム）にも何て命令すればいいかわかってなくて。コイツらが勝手に動いてくれるから、それを信じて任せてる」

「精霊任せですって!?　精霊が、いつも命令なしで動いてる？」

　目をみひらく聖女。

「うそ。そんなことが……」

「え？　何かマズイことあったかな」

「そうじゃないわ。逆よ。だって剣に精霊の力を宿（やど）らせるなんて、要はその場で精霊使い（スピリット）が使える精霊具を創造するってことでしょ。そんな複雑な過程を……精霊が自分の意志で行ったなんて記録、聖地の秘文（ひぶん）にも残ってないわ」

　瞬（まばた）きも忘れて火の始原精霊（サラマンダー）を見つめる少女。

「精霊の個体差？　それとも、あなただけの素養（そよう）？　いずれにせよ――」

〝それが貴様の力というわけだ、レン……〟

呪詛を思わせる呟き。

力強く、そして喩えがたき力の波動を滲ませた声音が、静寂の聖堂にこだました。

「将魔!?」

「そんな、あれだけの攻撃を受けてまだ――」

同時に振り返るレンとエリエス。二人が見つめる先で瓦礫の山が音を立てて崩れ、褐色の悪魔がその下から這い上がってくる。

「屈辱だな。人間に、ここまで傷つけられたのは初めてだ」

粉々に砕けた甲冑を脱ぎ捨てた裸身。

少年とも少女ともつかぬ中性的な体つき。その両腕も両足も、レンはおろかエリエスと比べてもどちらが華奢か迷うほどに細い。

――そのか細い身体に痛々しく刻まれた火傷と裂傷。

――エリエスの法術、そしてレンの剣による連撃の痕だ。

太股を伝って流れ落ちる紫の血液が、その足下で小さな水たまりを作るほどの出血。

……動けるわけがない。

……かろうじて瓦礫の山から這い上がることはできたとしても。

「この傷では戦闘は不可能、そう言いたげな表情だな?」

無邪気にも見える魅亞の笑み。

そして、波の将魔の皮膚の内側で何かが蠢いた。

肉体再生。

レンの剣で傷ついた裂傷部分の筋肉組織がまたたく間に分裂・肥大化し、傷口を修復していく。エリエスの法術で受けた傷もまた同じ。

その光景に――

「……そう。カナン旧石碑に綴られてた悪魔は、あなただったのね」

擦れ声で呟く聖女。

「広大な地下世界である冥界に、人間では絶対に倒せない悪魔がいる。……進化する怪物。どんな深手を与えようと即座に回復し、傷を受ければ受けるほどに強化されていく脅威の肉体を持つ悪魔がいる。それは、世界に一体だけ存在する竜と悪魔の特異混成種」

「博識だな」

すでに出血の止まった傷口を指先でなぞる魅亞。

――悪魔の障気と竜の肉体とを有した『境界線上の悪魔』。

雌雄の区別なく。竜と悪魔の境界さえ、魅亞の身体には存在しない。

その不安定遺伝により悪魔の特技である法術は使えず、竜の特技である息吹も使えない。だが一方で、世界の運命はこの混血種に恐るべき特性を与えた。

それが……

「レン、下がりなさい！」

と同時に自ら前へ進みでるエリエス。

「穿て！」

先に彼女が見せた最高位法術。

聖堂の天井と床、それぞれ同時に浮かびあがる黄色の法術円環からほとばしる雷光が、一切の武装を脱ぎ捨てた魅亞の全身を打ちすえる。

が――

「いい法術だな。悪魔の法術にも迫る。オレの知らぬ間に人間の法術がここまで進歩していたことには驚いた。が、ソレはもう覚えた」

火傷一つない無傷。

最高位の法術を浴びながら、平然と近づいてくる波の将魔。

進化する怪物。

戦えば戦うほど、この悪魔は、より手に負えない存在へと化していく。

「……聞きしにまさる化け物ね」

奥歯を噛みしめ、エリエスが一歩後ずさる。

「貴様たちの攻撃は覚えた。では、次はオレの番というわけだ」

膨れあがる殺気。魅亞の全身からにじみ出る不可視の波動が一気に拡張し、巨大な衝撃波となって祈りの間を震わせる。

……どんなに傷を与えても回復して。

……戦えば戦うほど、俺たちの攻撃に対して耐性が増していく無敵の肉体。

これが五大災。

その真の実力を前にして、頬を冷たい汗が伝っていく。

ガリア大炎山で自分と戦った炎の将魔が、その力を抑えていたことは承知の上。だがまさか、五大災

と呼ばれる悪魔がここまで人知を越えた怪物だとは思わなかった。

三百年間、先代魔王エリーゼと覇を争った魔王候補。

現魔王より実力は上――

かつてエリーゼと出会った時、彼女が教えてくれたその言葉が鮮明によみがえる。

〝あのさ、だけど何でそんな現魔王に反旗を翻すなんて真似するんだ？〟

〝ソイツが現魔王より強いから〟

〝嘘だろっ!?〟

〝ホントホント。強さ的には魔王時代のアタシが一番だけど、次がその五大災なの〟

そして。

「納得。わかったよエリーゼ。これじゃ現魔王も扱いに苦労するわけだ」

レンは、苦笑にも似た吐息をこぼした。

「怖じ気づいた様子でもなさそうだな？」

「あいにく、お前みたいな理不尽じみた強さの奴も、初めてってわけじゃないんでね」

炎の将魔アシェンディア。

竜帝カルラ。

女神レスフレーゼ。

さらには竜姫、大天使、先代魔王。そして何より英勇エルライン。

悠久なる世界の歴史の、その頂に立つ者たちを知っている。

「……エリエス」

背後に立つ少女にだけ聞こえるよう、ぎりぎりまで声を絞る。

「君、精霊の召喚だけじゃなく物体転移もできる？」

「当然でしょ」

「じゃあ、これ預けとく」

即答する聖女に、レンはふり向くことなく手に握る宝石を投げ渡した。

先代魔王の宝玉。冥界の千年樹から採取した樹脂を結晶化させ、そこにエリーゼ自らの力を封印した古代召喚術用の触媒だ。

「この宝玉……!?　なに、これ……こんな強力な力の触媒が？」

受け取った宝石を凝視する聖女。

「手にしただけでわかるんだ。なら話は早い。俺がアレを転移させられれば良かったんだけど、俺は本物を見たことがないからさ」

「本物？」

「ああ。魅亞をここから追い返す切り札って言えばわかるだろ？　アレを召喚できれば、それがたぶん、本気の五大災に俺たちが対抗できる唯一の手段になる。……だから君に託す。それまでの時間は俺が絶対に耐えしのぐ！」

亀裂の走った聖堂の床。

先よりさらに強大な障気をまとう波の将魔・魅亞へと、レンは真正面から挑んだ。

「レン!?」

「頼んだぜエリエス。この戦い、勝機を掴むのは君にしかできないんだよ！」

床を駆ける。

「正面から向かってくるか。まだオレに通じる攻撃があるとでも？」

「さあね」

「――ならば、力ずくで聞き出すとしよう」

身を屈める魅亞。四つ足の獣のように両手足を床につき、その姿勢で跳躍。凄まじい勢いで逆にこちらへと飛びこんでくる。

突きだした片腕に滾る波動。

空間そのものを陽炎のように歪ませるソレが、床と壁とを抉りながら迫ってくる。

……受けとめちゃいけない。

……アレは、人間の俺には絶対に防げない一撃だ。

床の亀裂へ爪先をさしこみ、それを軸に上半身を独楽のように捻る。半回転。人体の可動域ぎりぎりにまで身体を歪ませる。

直後、服を掠めて通過していく波の将魔の波動。

「この速度にも反応するとはな……！」

「咄嗟にしちゃ上出来だろ？」

背を向ける波の将魔が交叉の瞬間に振り返る。

と同時、レンはすれ違いざまに紅蓮の精霊剣を袈裟切りに叩きつけていた。

……じゆっ。

何かが焦げる鈍い音。

「さすがに精霊の攻撃となれば……一撃程度では完全耐性には遠いな……」

紅蓮の刃を、手のひらで受けとめる波の将魔。

刃の切っ先が皮膚の表面を切り裂いているのはわかる。だがそれ以上までは進まない。この恐るべき混血種の肉体が、紅蓮の切っ先に斬られながらも同時に組成を修復しつつあるのだ。

精霊の力を帯びた剣。

対する、魅亞の『無敵の肉体』の修復力がまさに五分。

……さっきは俺の剣が勝ったはずなのに。

……たった一度、威力を覚えただけでここまで耐性がつくっていうのか。

では三度目はどうなるか。

脳裏をよぎる不安に一瞬思考が追いやられる。

「レン！」

エリエスの絶叫。

その呼び声にレンが我に返った直後、魅亞のくり出した蹴撃が迫っていた。

防御は無謀。

先のように紙一重でかわすような時間的余裕もない。ゆえにレンが選んだのは後方への全力跳躍。風を切り裂いて伸びてくる褐色の素足の射程外へ。だが。

「それでかわしたつもりか？」

魅亞の口元にうかぶ嘲笑。

竜爪。

魅亞の足指の先に生えた鋭利な爪が、わずかにレンの服へと達していたのだ。

――波動の伝導。

「がっ……は……っ!?」

身体が内側からバラバラに弾けとぶ。

レンが本気でそう錯覚するほどの激痛と衝撃が、脳天から足先までを駈けぬける。

……爪先が数ミリ掠っただけで。

……ここまで無茶苦茶な威力が……あるのか、よ……

一瞬の意識暗転。

意識を取り戻した時には、レンは後方の壁へと吹き飛ばされていた。

受け身も取れずに壁へと衝突。そう覚悟した矢先、壁と自分との間に、湿った球形状の何かが生まれていた。

「……水の始原精霊？」

水の衝撃緩衝。

蒼の精霊が生みだした水塊が、自分を包みこむように受けとめてくれていた。

「助かったよ、ありがとな」

『役ニ立テマシタカ？』

しっとりと大人びた笑顔で応える水の始原精霊。

その横に立つのは、瑠璃色の髪の少女だ。

「無茶するわね」

「無茶しなきゃ、時間稼ぎだってさせてくれる相手じゃないだろ……」

波動を受けた作用による目眩と嘔吐感。気を抜いた瞬間に片膝をつきそうになるのを、奥歯を噛みしめて踏みこらえる。

「それより、まだか」

「あと少し……私だって、あんな物を転移させるの初めてなのよ」

先代魔王の琥珀を握りしめる聖女。

その琥珀が瞬いている。古代召喚術は確かに発動しかけている。それはレンにもわかる。あとは術が間に合うのが先か。それとも。

「よもや、それで策が尽きたというわけでもあるまい！」

片手を振り上げる魅亞。

押し寄せる不可視の『波』が放出されるのを、風の始原精霊の息吹が中和。

「あと……五秒耐えて！」

何もかもが同時だった。

聖女の宣告と。

波の将魔が天井高く跳躍し、レンがそれに向かって剣を振り上げる瞬間が。

――波動の拳。

――紅蓮の精霊剣。

天から振り下ろされた拳と、地から振り上げた剣とが虚空で衝突。

その余波で生まれた衝撃の渦が大気をふるわせて、祈りの間の天井から壁にいたる全ての壁面に亀裂がはしる。

「……くっ！」

「最後に人間らしい弱みが出たな」

床に降りたつ波の将魔が、その指先二本でレンの両手持ちの剣を挟みこんで受けとめ、さらに余裕の表情で圧倒していたのだ。

「人間本来の非力さ。その脆弱な肉体性能が、レン、お前の剣士としての決定的な弱点であり、オレとお前を分かつ決定的な差だ」

「……人間らしい弱みか」

もう片腕の拳を握る魅亞に向け、レンは唇を噛みしめながら答えた。

「そのとおりかもな」

「なに？」

あまりに早く返ってきた肯定の言葉。

その想定外の反応に、逆に魅亞の表情が険しくなる。

「どういうつもりだ、レン」

「俺は人間だ。お前のような最強の身体もないし、法術もろくに使えない。だけどな！　だからこそ、今ある自分の精一杯で何とかしなくちゃいけないんだよ！」

「……何を言っている？」

それには答えず。

レンは全身全霊の力を紅蓮の剣にこめながら、たった一言こう呟いた。

「なあ？　そうだろエリエス」

――開け、冥界の審門。この者を在るべき場所に還しなさい――

暗色の輝き。

巨大な獣の爪を想起させる三角錐状の大聖塔。四本からなる大聖塔の中央に、先の見えない漆黒の霧が厳かなる扉となって顕現していた。

「冥界の審門だと!?　まさか、この場に転移させたというのか!」

　背後に出現した審門へと振り返る魅亞。

　その表情に、初めて焦りの感情らしきものが浮かびあがる。

「貴様か、聖女!」

「私の名前ならエリエスよ。悪魔に聖女なんて言われるの、可笑しいでしょう?」

　輝く琥珀を握りしめる少女。

〝まだ誰も見つけてない精霊の住処、それに天界や冥界に続く審門も発見してきたわ〟

　聖堂で出会ってすぐ、エリエスが口にした言葉。

　あの一言こそが鍵。自分だけがそう聞かされていて、後から襲撃してきた波の将魔は、それを聞くことができていなかった。

　すなわち――

　精霊信仰の象徴たる聖エリエス。世界有数の大旅団の統率者でもある彼女は既に、冥界の審門を発見したことがある。だとすれば理論上、古代召喚術でソレをこの場に転移させることも可能。

　そして。

「よお波の将魔。お前、精霊と戦うのは初めてだったよな」

「……それがどうした」

　こちらの剣を受けとめながら、鬼気迫る表情で睨みつける波の将魔。

「お前の剣は既に二度受けた。もはやオレを傷つけることは――」

「だったら、今回は俺の勝ちだ」

　そう告げるレンの足首には、いつしか、茶褐色の外套を羽織った小人が掴まって寄りそっていた。

「上の始原精霊の作った鉱巨人に殴られた経験なんて、ないだろ?」

「……まさか」

　五大災のすぐ隣に生まれる巨大な気配。砕けた壁と床、天井の瓦礫が分解されて砂礫となり、それが見上げるほど巨大な赤銅色の像を作り上げる。

『デキタ!　ネエ、デキタヨ!』

「ああ、上出来すぎる」

　ぴょんと肩に飛びのってくる上の始原精霊。

そして。

「波の将魔。あなたの肉体は確かに脅威よ。だけど　一度きりの戦いなら――」

「勝つのは俺たちだ」

褐色の悪魔が反応する間すら与えずに。

超至近距離から振るった鉱巨人の巨腕が、防御さえ許さずにその身体を冥界の審門へと吹き飛ばした。

――冥界の審門。

それに至るものを地下世界へと転移させる入口。

そして、漆黒の扉に身体の半分以上をめり込ませた五大災。その表情には、波の将魔と呼ばれる悪魔が見せた初めての感情が浮かんでいた。

「……一つ忠告しておこう」

底知れぬ不敵な笑み。

今度こそ戦いに決着の幕が下りた。そう確信したレンとエリエスが、思わず寒気を覚えるほど挑戦的な眼光で。

「オレが消えて間もなく、オレの張った障壁も消える。もともと邪魔な横やりを入れないための障壁だが、俺が消えた後とはいえ、すぐには警戒を怠らぬことだ」

「魅亞？　それはどういう――」

「この一度の戦の屈辱、忘れはしない。お前たちが冥界に来ることがあれば、是が非でも再戦を挑ませてもらうとしよう。レン、そしてエリエス。もっとも、お前たちがこの後の戦いに生き残れたらの話だがな」

くっく、と低い嗤い声が祈りの間にこだまする。

その声が消えた時。

波の将魔と、そして冥界の審門は光の粒子に包まれて消えていた。

聖堂『祈りの間』――

真鍮色に輝く祭壇、ステンドグラスから差しこむ虹色の輝きに照らされながら。

「……この後の戦い？　あいつ、最後に何を言ってたんだ」

熱の消えた剣を鞘に戻し、レンはぼんやりと頭上を仰いだ。

亀裂の走った天井。

荘重な彫刻によって飾り立てられた聖堂は先の戦いが嘘のように静まりかえり、聞こえるのは自分と、そして隣に立つ少女の微かな息づかいだけ。

何も起きない。

聖堂の壁を覆っていた波動の障壁も徐々に薄らいでいき、もう間もなく聖堂の外にいるエリエスの部下も内部に入ってこられることだろう。

それにキリシェ、フィア、エリーゼ。

海を越えて大陸間を往復するとはいえ、彼女たち三人なら時間もそうはかかるまい。

……危険はない。

……そう、間もなく仲間とも合流できるはずなのに。

緊張で渇ききった喉。そして、この怖気にも似た胸騒ぎは何だというのか。

「負け犬の遠吠えだと思いたいけれど――」

額の汗で張りついた前髪をさっと指先ではらうエリエス。

波の将魔の一撃を受け、さらに強力な法術二回、冥界の審門の転移という荒技までこなしたことで、その顔には疲労が色濃く滲んでいる。

「奇策にすがったのは私たち。正直、今でもあの化け物と正面きって戦えって言われたら勝つ手段がすぐには思い浮かばないわ」

「それは俺も同感。あんなに再戦したくない相手は初めてかもな」

竜と悪魔の特異混成種。

進化する悪魔。次、冥界で再戦がありえると考えるだけでも身震いしそうになる。

では――

そんな怪物の残した言葉が、本当にハッタリや負け犬の遠吠えだろうか？

「……じきに私の部下が駆けつけるはずよ」

希薄になりつつある波動の障壁を指さす聖女。

「もうすぐ障壁も消える。それまで、念には念を入れて水の始原精霊と風の始原精霊に居てもらうわ。あ

とわずかの辛抱よ」

「そうだな……」

レンの頭上にも火の始原精霊、足下にも土の始原精霊が控えている。

自分とエリエス。そして精霊四体。この布陣でもうしばらく持ちこたえればいい。それで、この張りつめた緊張からも解放される。

こくんと息をのみこんで、レンが向かった先は陽の照らす祭壇だった。

温かな陽光に目を細めながら。

「エリエスは、いつもここでお祈りみたいなことしてるんだ？」

「ええ。それはさておき――」

祭壇の横に立つレンを正面から見上げる少女。

その表情は、どこか呆れた顔つきで。

「聖女としての立場で言わせてもらうと、その祭壇、私以外は立ち入り禁止なのよね。カナン巡礼聖教船の最高幹部にだって許したことがないんだけど？」

「ウソ!?　わ。ちょ、ちょっと先に言ってくれよ！」

慌てて祭壇から駆け下りる。

「いや、ええと……五大災の件もあったし、陽のあたる場所にいた方が落ちつくかなって思ったんだよ。祭壇なら日射しも温かそうだったから……つい、その……」

背筋を粟立たせる寒気のせいだ。せめて陽の当たるところにいれば身体の震えも鎮まるだろう。そう思って自然と身体が動いてしまっていた。

「だからその……」

「冗談よ。単に、少し意地悪なコト言ってみたい気分だっただけ。祭壇の件は、ネビリムがいれば彼女が怒ってたかもしれないけど、誰も見てないなら問題ないわ」

ふわりと口元をやわらげる瑠璃色の髪の少女。

そのまま自分の胸に手をあてて、エリエスが静かに深呼吸。そして。

「悪くない共闘だったわね」

聖女が、涼やかな笑みとともにそう言った。

「カナン巡礼聖教船の一員として戦うことって、私、実はほとんど経験ないの。私はいつも旅団の最後尾で、部下が奮闘するのを見ているだけ」

「そりゃ聖女だからだろ。万が一にも大ケガしたら大変じゃん」

「ええ。だから、なおさら緊張したわ。まさか初対面のあなたと、それもまさか五大災なんて大悪魔を相手にするなんて。……でも、ちょっと嬉しかった」

「嬉しいって、あの戦いが？」

「そうじゃないわ。これ、本当は最初に言うつもりだったんだけど」

ゆっくりと少女が息を吐く。

そのうえで、次の言葉を選ぶためかのような合間を挟んで。

「ようやく理解りあえる『同士』と会えた気がする。あなたはそうは思わない？」

水の始原精霊と風の始原精霊。

そして、レンの足下と頭上にそれぞれ顕現している火の始原精霊と土の始原精霊。

四体の始原精霊。

もはや幻の存在となりつつある精霊が四体も集った奇蹟の光景を見わたすエリエス。

その瞳は、どこか遠い遠い地平を見つめているようで——

「聖女と言われる前、私はずっと独りぼっちだった。私が精霊と話してるのを見て、周りの大人はみんなソレを気味悪そうに見てた。幻聴か？　何か悪い呪いでも受けたんじゃないか？　って噂されてたわ」

「……」

「私以外の誰にも聞こえない精霊の声。結局、私が自在に精霊を召喚できるようになって古代詠唱士の素養を認めてもらうまで、私には誰一人として理解者がいなかった……白状するわ。あなたを大急ぎでここに呼んだのは、そんな個人的な理由もあったの。どんな人間かは会うまでわからないし、私の境遇に同情してほしいなんて贅沢を言う気もないわ。ただ単に……私は……精霊のことを何でも話せる仲間がほしかったの」

哀愁さえ感じさせる寂しげな微笑。聖女と讃えられる少女の、それは十何年にもおよぶ耐えがたき孤独の結果でもある微笑だったのだろう。

——ようやく『同士』と出会うことができる。

——世界に二人だけの理解者。

だから、自分をここに呼びよせた。

カナン巡礼聖教船の部下さえも交えず、二人きりで話をしたかった。

「だから嬉しかった、そういうわけよ」

「……そっか。まあ共闘っていうか、助けられたのは俺の方な気もするけど」

どう返事をすればいいだろう。

悩んだ末、レンは苦笑いとともに肩をすくめてみせた。

「でもやっぱり、エリエスは俺なんかよりよっぽど凄いって。俺も今さら白状するけど、冥界の審門を召喚しろなんて無茶な――……」

言いかけた言葉が途切れた。

――違和感。

それは何一つ前触れのないまま、レンの真後ろへと迫っていた。

『……ッ！』

足下にいた上の始原精霊が、身体を身震いさせてレンの足首にしがみつく。

凍りつく大気。陽光で暖められていた温度が一気に極低温まで低下。上の始原精霊を含めた全ての精霊が同時に動きを止める。

だが、そんな全ての違和感より何よりも。

……なん……だ……

……俺の後ろに何かがいる？

レンが背中に感じたモノ。

それは過去のあらゆる人物、存在にも感じたことのない別次元の虚無感だった。

五大災。

竜帝カルラ。

女神レスフレーゼ。

今まで出会ってきた世界の頂点たちが兼ね備えていた存在感。だがそれらと一線を画す、本能がその存在を否定したくなる程の禍々しさが伝わってくる。

「……」

光さす祭壇へと振り返る。その先に――

煌々と瞬く、巨大な人型をした『何か』がいた。

『――――』

片手には、光を収束して作り上げたような煌めきの十字鎗。

凹凸のない頭部の、その『眼』にあたる部分だけぽっかりと光が抜け落ちて、漆黒の闇に染まった怪物。

……こいつ？

……いったい何だ……

目の前の祭壇に降りたったまま微動だにしない発光体。何一つ言葉を発しようとしない。そもそも『眼』にあたる部位で何処を見ているかも定かではない。

だが一つだけ確信をもって言えることがある。

この発光体から感じる途方もない敵意。

コレは自分の――いや、人間、天使、悪魔、竜、その他すべてを含めた世界中の生物と相容れない存在であると。

〝ある相手を追いかけてここまで来た〟

波の将魔が残した言葉。

つまり魅亞が聖堂に展開していた障壁は、エリエスの部下の介入を防ぐと同時に、この発光体の侵入をも結果として防いでいた？

その障壁が消えかけていることで、この発光体がこうして現れたことになる。

だとすれば――

「レン、退がりなさい！」

聖女の叫び。

その言葉の意味をレンが理解した時には、何もかもが遅かった。

『*Veiz*』

陽光すら霞む輝き。その光で照らすものすべてを焼き尽くさんとする凶光が、発光体の全身からレンめがけて放出。

光が自分に向かって放たれた。

そうレンが認識した直後には、視界すべてを覆いつくす禍々しき熱線が眼前に。

避けられない。

無意識の内にそう悟った瞬間、目の前の光景が一瞬ブレる。

気づいた時には。

自分を突き倒して庇った聖女が、光の凶刃を浴びて倒れた――――その後だった。

「エリエ……ス？」

「……逃げ……なさ……」

口から鮮血を噴きだしながら宙を舞う少女。彼女が仰向けに床へと倒れ、一瞬の痙攣の後に微動だにしなくなる。

それを理解することに途方もない時間を要し。

そしてその意味を理解するのには、さらに膨大な時間を要した。

自分を庇って倒れた聖女。彼女の負傷を想う不安。さらには目の前の発光体に対する恐怖も。あらゆる感情が渾然と渦巻くなかで。

「……なんで……だよ……」

ただ一つ。何よりも熱い衝動としてレンを突き動かしたもの。

それはかつて経験した覚えがない程に強い自責の念だった。

「立場、逆じゃねえのかよ……なんで騎士が、あんなに……か弱い、同い年くらいの女の子に……庇ってもらってるんだよ」

聖女といえど、エリエスが十代の少女であるという事実に変わりはない。

同じなのだ。

聖女であっても、都市の学園に通う一般の少女と何一つ変わらない。

肉体の強さでは男性に及ばず、一見気丈に見える心根だって、きっとその奥には不安と弱さを抱えている。

それなのに……

〝でも、ちょっと嬉しかった。ようやく理解りあえる『同志』と会えた気がするの〟

自分と出会って「嬉しい」と言ってくれた彼女。

精霊信仰の地で聖女と崇め奉られながら、その実、誰にも理解されない苦しさを抱き、ずっと理解者を求めていた少女。

そんな彼女が、目の前で――――

〝私が危惧しているのがまさにその点です〟

〝キリシェ姉様、それにあの大天使フィアと先代魔王エリーゼまでもが揃った旅団。その中で、あなただけが不釣り合いではないですか？〟

〝あなたが窮地に陥って、それを助けようとキリシェ姉様が窮地に陥る〟

〝それが万に一つでもないと言いきれますか？〟

脳裏によみがえる、竜帝カルラの予言めいた言葉。

嘘でも誇張でもなかった。あの言葉は竜帝カルラが、まさに本心から告げた懸念であったことを改めて理解した。

「……」

そう、人間は……

人間は脆く、儚い生物だ。

どんな奇蹟が起きようと、波の将魔のような無敵の肉体をもって生まれることはない。

聖女と謳われた少女がたった一度の攻撃で地に伏せたように。

英勇と謳われた最強の剣士が、わずか三十年を生きずに他界したように。

――例外はない。

――それは自分とて同じこと。

天使や竜、悪魔のような長命種とは違う。いずれ、百年と経たぬ前にいつしか自分も病に倒れ、床に伏せる時が来るだろう。

それはわかっている。

だが、そうわかっていてもなお。

「……俺は……俺は、それでも強くなりたいって誓ったんじゃないのかよ！」

押さえきれぬ衝動が、喉を突きやぶって外に出た。

唇を噛みしめて。

爪が手のひらに食いこむほど堅く拳を握りしめて、なおレンは、両目からあふれ落ちるしずくを止めることができなかった。

――英勇の冒険譚に憧れていた。

――いつか自分も、同じように世界を巡ってみたい。

唯一無二の仲間と共に。

仲間に助けられ、自分もまた仲間を助けながら、まだ誰も見たこともない新世界の地平を目指してみたい。子供の頃からの願い。一日として忘れた日はなかった。

ゆえに、初めてだった。

こんなにも自分の力量の不足を嘆いたこと。

そして。

こんなにも、誰かを守りぬくための強さを願い求めた瞬間は。

「……俺は……」

立ちつくす偽英勇の少年。

その無防備な姿めがけ、光輝く怪物の熱線が再びそそがれて――

刹那（せつな）。

レンの心の深奥（しんおう）に。

『冬の湖面（こめん）に月影が揺れるごとく、水鏡は光も夜も、万象（すべて）を等しく映しだす』

声が聞こえたのは、その時だった。

『ならばこの光とて感じるでしょう？　避（さ）けられるでしょう？　さあ、一歩を踏みだして』

振り返る。

水の始原精霊（ウンディーネ）が手招きするままに、レンは身をひるがえしていた。

空を切る光の凶刃（きょうじん）。

波の将魔さえ回避できなかった超高速の『光』を避ける。そんな少年の想定外の動きに対し、光の疑似精霊が動きを止めた。

「……水の始原精霊（ウンディーネ）？　いま、お前が俺に話しかけたのか？」

主（あるじ）である聖女（エリエス）を抱き上げる水の始原精霊（ウンディーネ）。

透きとおった蒼（あお）の身体（からだ）を持つ少女の応（こた）えは、無言の微笑（びしょう）だった。

それだけではない。

『マダ走レル？　モット速ク。大地ノ鼓動ヲ感ジテ！』

足首に掴（つか）まるのは土の始原精霊（ノーム）。

さらに浮遊（ふゆう）する半透明の精霊が、背中の小さな翼をしきりに羽ばたかせて。

『早く、早く、エリエスを助けて！』

「……風の始原精霊（シルフ）？」

『シルフは貴方（あなた）のことをまだ知らない。でも彼女（エリエス）は友達……だから、シルフが風の軌跡（きせき）を教えてあげる。今だけの特別。友達を助けるための特別だから！』

かつてないほど明瞭に、そして流暢（りゅうちょう）に響く声。

それが水の始原精霊（ウンディーネ）と風の始原精霊（シルフ）の二体であるのは精霊自身の個体差か、それとも聖女（エリエス）との幾年（いくねん）もの対話で培（つちか）われた個性なのかはわからない。

ただ一つ確かなことは――

『火、灯（とも）ス？』

レンが答えるより先、その手に握った剣に宿（やど）る紅蓮（ぐれん）の輝き。

紅蓮の精霊剣。

肩に留まった火の始原精霊（サラマンダー）が、力強く翼を羽ばたかせてみせる。

「おまえら……」

四体の始原精霊。

それがすべて、今、たった一人の少年の下へと集（つど）っていた。

少年につき従う配下としてでなく。

少年に、自らの極意を、教えを授ける師のように。

「……っ」

水の始原精霊（ウンディーネ）の腕に抱かれた聖女（エリエス）が、意識を失いながらもわずかに呼吸を続けている。

まだ間に合う。すぐに手当をして休ませることができれば彼女を助けられる、その希望が残っている。

そう悟ったと同時、目元に溜（た）まっていた涙もまたひいた。

「ああ、大丈夫だよ……もう迷わない」

もう二度と後悔したくない。

もう二度と、こんな気持ちは味わいたくない。

そのために。

「……時間がないんだ」

四体の精霊に見守られながら、レンは光状の高位存在へと向きなおった。

「三十秒。それでお前を倒してエリエスを助ける」

偽英勇（えいゆう）と呼ばれた少年。

その少年が、自らに生涯の誓いを課した瞬間だった。

「強くなるさ。あの英勇にも負けないくらい。キリシェもフィアもエリーゼも、周りのすべてを守れるように。

……これ以上、守ってもらう立場でいたくない」

そう。

今ここに――

共にいる精霊たちの前で、少年は声のかぎり宣言した。

「来いよ光の木偶(でく)人形。俺は、もう偽英勇じゃいられないんだよ！」

Record.6 ｜ 今ここに精霊と誓う

1

アルカナ大陸外洋。

どこまでも深い群青色の水平線のその先に、わずかに覗く赤砂色の大陸。

「見えましたね。あの先にある都市が聖地カナンです」

『ようやくか……』

大天使の声に、重苦しい口調で答える白銀色の巨竜。

「ここまで来れば私にも感知できます。波の将魔の波長が消えました。気配を隠したか、あるいは聖地から去っていったか」

背中の翼を羽ばたかせるフィア。

「残る巨大な気配は、あと一つです」

『エリーゼの言う得体の知れない波長とやらか』

純粋に鋭い嗅覚をもつ竜種だが、気配感知においては天使と悪魔に分がある。

特に先代魔王の霊知の鋭さは悪魔の中でも別格。それゆえ聖地カナンに迫る不穏な存在の動向は彼女の情報をアテにしていたのだが。

「……」

肝心のエリーゼが、つい先から突然に押し黙ってしまった。急を要する事態を察知すればすぐに伝えると言ったものの、聖地の方向を見つめたまま不動。

いや、その表情が――

「エリーゼ？」

「……素晴らしい」

魔皇姫エリゼリス・ディ・マリアブレイズ。

かつてその漆黒の障気でもって冥界を支配し、配下の悪魔からも恐れられた先代魔王が、興奮を抑えきれぬ口調でもってそう呟いた。

紅潮し、その口元に微笑さえ浮かべる悪魔。

と思いきや。

「キリシェ！　早く、急いでってば！」

『なんだ……？』

パシパシと、自分の座っている竜の頭をたたき出した。

「早く早く。フィアも、もっと早く飛んで！　聖地の奥、でっかい宮殿みたいな建物の中だよ。そこにレンがいるから！」

『レンがいるのは当たり前だろう。アイツと合流するために向かってるんだから』

「違う違う、そうじゃないんだってば！」

さらに竜の頭を叩くエリーゼ。

まるで乗馬の騎手が、馬を加速させるために鞭を入れるような光景だ。

「早く！　早くしないと見損ねちゃう！」

「……何をですか？」

そう訊ねる大天使に。

先代魔王はひとしきり黙考した後、まるで独り言のようにこう続けた。

「いいねレン。今のレンは、ちょっと恰好いいよ」

2

聖地カナン・本霊宮『祈りの間』――

光さす聖堂。

その祭壇に浮かぶのは光状の高位存在。

照らす者すべてを焼き尽くす敵意の光波と、その光が凝縮した十字鎗を手にして。ソレが見下ろすのはたった一人の少年騎士だった。

「……何でだろうな。自分でも理由はわからないけどさ」

右手に、紅蓮の精霊剣を握りしめた少年。

その背後には四体の始原精霊。

少年に使役されるのではなく、むしろその少年の背後から彼のことを見守るように。

「お前には負ける気がしない」

と同時に、レンは傷だらけの聖堂を駆けた。

一直線。何の仕掛けも小細工もなく、ただまっすぐに、陽光照らす祭壇へ。

――そして、すべては一瞬だった――

『*Veiz*』

光状の高位存在の、声。

竜にも悪魔にも天使にも感知不能の響き。精霊の声と同じく、古代詠唱士だけが聞き取ることのできる禍々しき音の波。

同時に、その音が届いた時には、『光』の爪は標的を焼き貫いている。

……そのはずだった。

『感じ取れるはず。光の気配。水面に映るままに避けなさい』

ぽちゃんと跳ねる水飛沫。エリエスを抱きかかえた水の始原精霊の声に突き動かされるまま、レンは疾走りながら身を屈めた。

――すぐ頭上を通過していく光の凶刃。

光。

自然界における最速の伝導速度。その輝きが目に入った時には、もはや全身がその光を浴びて倒れているはずの反応不可能の攻撃。

だが今は。

今だけは何も怖くない。当たらない。あらゆる光も音も、聖堂に渦巻く大気の流れさえ、すべてを映しだす水の始原精霊の『水鏡』。

そして。

その反応から超速度の回避につながる体術を可能にしたのは――

『ソノ調子！　誰ヨリ速ク、大地ヲ疾走(ハシ)ルノ！』

肩に掴(つか)まる上の始原精霊(ノーム)。

……感じる。

……一歩一歩、足下の大地が、俺の疾走を後押ししてくれる。

大地の息吹(いぶき)を受けた歩み。その力強く蹴(け)りつける疾走が、レンへと迫(せま)る光の刃の悉(ことごと)くを紙一重でかわす超加速を可能にしていた。

――祭壇。

輝く十字鎗(やり)を高々とかざす光状の高位存在。

と同時に、レンもまた手に握る紅蓮(ぐれん)の精霊剣を振り上げた。

『教えてあげるのは、今回だけの特別！』

風の始原精霊(シルフ)の声。

空気も距離も介さず、ただ深々と胸の奥へと沁(し)みこんでくる。

『風を嫌わないで。風を切るのではなく、風と一つになる境地。そのための理想の軌跡を理解した時、貴方(あなた)の剣は何より速(はや)い風となる。――ついてきて！』

風を切り裂き、大気を振るわせる光の十字鎗。

対するレンの剣は静謐(せいひつ)。

微(かす)かな気流さえ乱すことなく、聖堂に渦巻く風の始原精霊(シルフ)の息吹(いぶき)に刃(やいば)の流れを任せ、ただ無心で剣を握った。

……そう。

……精霊の声に導かれるそのままに。

精霊の力を宿(やど)した精霊具を使用する精霊使(スピリツト)いとは違う。

さらに、精霊を召喚して行使した過去のあらゆる古代詠唱(エイシエンター)にも類さない。

強大な精霊の力に頼ることなく。

精霊を召喚できることに驕(おご)ることもなく。

ただ純粋に精霊に愛され、精霊の声に耳を傾け、精霊から世界(ことわり)を学ぶ。

歴史上にたった一人――

少年は、精霊に師事する剣士となった。

偽英勇と光の怪物とが交叉する。

『――――』

煌めく十字鎗が肩先をかすめていく。

肩から全身を伝っていく超高熱と激痛。そして一瞬で意識をも刈り取られるほどの衝撃に全身が硬直し、その場に膝をつきそうになる。

だが。

「守りたい奴がいる」

それでも少年は止まらなかった。

唇を噛みしめて意識をつなぎ止める。

右肩から噴きだす鮮血に目もくれず、祭壇の壇上へと駆け上がる。

「だから俺は……」

そんなレンの目に、眼前の怪物は映っていなかった。

――聖エリエス。

――キリシェ、フィア、エリーゼ。

聖地で出会ったもう一人の古代詠唱士。

さらには世界録を探す旅に自分を導いてくれた、かけがえのない旅団の仲間たち。

脳裏をよぎる彼女たちの横顔だけを追いかけて。

「俺は、お前なんかに負けられないんだよ！」

紅蓮の精霊剣に力を込める。そして。

灼熱の灯が宿る神秘の剣が、光状の高位存在を断ちきった。

七色の陽の降りそそぐ祭壇で。

「……ありがとな」

『デキタ？』

「ああ、俺には十分すぎる」

声を弾ませる火の始原精霊と、その精霊に向かってうなずくレン。

その後ろで。

ピシッ、と何かに亀裂の入る甲高い崩壊音がこだました。

『――――――――』

光の十字鎗ごと打ち砕かれた光状の高位存在が、まるで硝子が砕けちるように、無数の輝く破片となって消えていく。

光を発する千々の欠片。

それもまた聖堂にそそぐ日射しのなかで透らいで、最後には、光に融和するようにして消えていった。

3

光の怪物が消え去って。

再び、光さす聖堂に本来の静けさが戻ってくる。波の将魔の障壁が消失したのは、まさにその直後のことだった。

「エリエス様！　先ほどからの凄まじい衝撃は……エリエス様!?」

堰を切ったように『祈りの間』に雪崩れ込んでくるカナン巡礼聖教船の部下たち。

最高幹部である治癒士ネビリム。

それにタイラス、その後ろにはプルミエールの姿まで。

「な、なんでエリエス様が倒れてるんですか!?　それに、なんですかこの破壊痕。結界で防護してるはずの壁も床もボロボロになってるなんて!?」

「あ……いや」

波の将魔は冥界へと転移させて不在。

光状の高位存在も、たったいま跡形もなく消滅してしまった。

元凶二体がどこにもいない。

「レン、これは……いったいどういうことだ！」

「事情は後で話すから。だから、とにかく今はエリエスを助けてやってくれ！」

慌てて剣を収め、レンは倒れた聖女（エリエス）へと駆けよった。

すでに彼女の前で片膝（ひざ）をつき、治癒法術（ちゆほうじゅつ）を発動させている最高幹部の治癒士（ネビリム）。その様子を見守るのは水の始原精霊（ウンディーネ）と風の始原精霊（シルフ）。

……こいつらもエリエスのことが心配で。

……周りに人間が集まってるのに、まだ顕現（けんげん）したままなのか。

戦闘が終わってなお、消えずに留（とど）まっている精霊たち。

「プルミエール、本霊宮（ほんれいきゅう）にいる治癒士（ヒーラー）を片っ端（ぱし）から呼びつけろ。事態は一刻を争う」

「は、はいタイラス先生！」

一礼することも忘れて走り去っていく法術士（アリア）の少女。

「ネビリム様。エリエス様のご容態は……」

「不明です」

治癒法術を継続しながら、深刻な表情でタイラスへと答える最高幹部。

「外傷がない？　確かにエリエス様から、何らかの強力な法術を浴びた残滓（ざんし）を感じます。なのに、まるでその法術の正体が読み取れない。まるでわからない。いったいどんな攻撃を受けたというの……」

独り言のように呟き、下唇を噛みしめる紫法衣の女性術者。

「レン」

「エリエスは……俺を庇（かば）って攻撃を受けたんだ。責任は、俺にある」

タイラスの横目に見つめられるまま。

光の鎗（やり）に貫（つらぬ）かれた右肩に手をあてて、レンは奥歯を噛みしめた。

……受けた攻撃の正体も症状も不明。

……そんな怪我（けが）を、いくら最高位の治癒士（ヒーラー）であっても治せるのか。

他の治癒士を何人集めても結果は変わらないだろう。それでも今は信じて、すがるしかない。エリエスが助かるという未来。その願いは――

「彼女の治療、私が手を貸しましょう」

天命。

まさしく「天から授かりし命」という言葉の体現のごとく。

波の将魔との激戦で崩壊（ほうかい）した天井から姿を現したのは、金髪の大天使だった。

「フィア先輩!」

「お待たせしましたわ」

　見上げるほどの高度から、いとも優雅に着地する彼女。まわりの人間の目を気遣ってのことだろう。背中にあるはずの翼は既に隠されている。

「頼む先輩!　話してる時間はないけど、とにかくあそこにいる子の治療を……」

「ええ、わかってます」

　慈愛あふれる笑顔で応える大天使。

「あなたの肩の傷もそうですが、まずはあの人間の娘の手当が先のようですね」

　天井から着地するまでに、聖堂の状況を一瞥して理解していたのだろう。頷くや、早足でエリエスの下へと歩いていく大天使。

「……何者ですか」

「フィアと申します。旅団『再来の騎士』の一人と言えばわかりますか」

「あなたが!?」

　振り返った治癒士が、フィアの返事に目をみひらいた。

　そして。

「やっほー。レン、お待たせ!」

　砕けるステンドグラス。

　天井の窓を割って飛びこんできたのは、幼女の姿をした悪魔だった。

「エリーゼ?」

「いやー。ビックリしちゃったよ。あんまり驚いてさ、待ちきれずにキリシェの背中から飛び降りてここまで来ちゃった」

　空中でくるんと一回転して器用に着地。

「レン、すごいじゃない!　どうして急にそんな強くなっちゃったの?」

「……え?　あ、そうか。もしかして見てたのか」

　戦いの気配を感知することもエリーゼならば可能なのだろう。

　ただし先代魔王といえど悪魔には精霊の声が届かない。自分が四体もの精霊の声に応援されていたことだけは、知るよしもない。

　……そうか、だからエリーゼには。

　……俺が突然に強くなったように見えたのか。

　彼女に何と答えればいいだろう。レンがそう言葉を考えているうちに。

「こら！　フィアもエリーゼも、わたしを置いて抜け駆けするな！」

　再び割れる天井のステンドグラス。

　まぶしい陽を浴びながら姿を現したのは、可憐な銀髪の竜姫だった。

「さあレン、エリーゼの言う『嫌な気配』とやらはどこだ？　このわたしが到着したからには、どんな輩だろうと一撃で――」

「……いや、もう終わったから」

「なに？　終わったのか？」

　やる気満々に拳を固めながら、ぽかんとした口調で呟くキリシェ。

「つまらん……」

「ほらキリシェ。来るのが遅かったから肝心の戦闘に間に合わなかったじゃない」

「う、うるさいっ！　船酔いのせいで上手く飛べなかったんだからしょうがないだろう！」

　ぷいっと顔を背ける竜の少女。

　隣では、そんな彼女をにやにや顔で観察する先代魔王。

　そして。

「フィア先輩、エリエスの具合は……」

「安心してください。私の治癒法術は、女神様からの直伝ですよ？」

　こちらにふり向き、ウインクで応える金髪の大天使。

　その返事に――

「そっか。なら、よかった……」

　ようやくレンは、長らく忘れていた微笑を思い出した。

　仲間がいてくれる。そして自分の窮地に駆けつけてくれる。それを、こんなにも心強く感じたのは初めてだ。

「レン、そのケガはどうした」

「かすり傷みたいなもんだよ。まだちょっと血は出てるけど、これくらいならさ」

　肩の傷を見上げるキリシェにそう答え、レンは陽のそそぐ祭壇に腰を落とした。

　フィアと、カナン巡礼聖教船の部下たちに介抱される聖女。

　それに自分の周りにいてくれるキリシェ、エリーゼ。

　彼女たちの姿に安堵の息をついて。

「……なんて言ってみたけど、さすがに俺も限界」

レンは、その場で仰向(あおむ)けに倒れこんだ。

Interval. ｜ 覇都の陰

覇都エルメキア領。

古代城イスタルシル『天鏡の間』。それは四方の壁、床や天井まで、一面が鏡に覆われた大広間だった。

騎士のための修練場。

鍛錬中、鏡に映る自らの姿を常に把握し、より精緻なる剣技を得るための場。

――その中心に立つ、黒の戦闘衣を羽織った騎士。

歳の頃は三十前後だろう。短く刈り上げた灰色の髪に、黒の双眸。並の成人男性より頭一つ抜きんでた長身に、全身鋼のごとく鍛えあげられた肉体。

ただそこに「居る」というだけで、何より鋭い刃の雰囲気を湛えた剣士。

騎士王ゼルブライト。

世界最大規模をほこる旅団『王立七十二階位特務騎士団』七十二人の頂点であり、剣聖シオンと並び現代最強の剣士と称される覇者。

その男が……

「報告とやらはそれで終いか？」

その声音に、明確な呆れの感情をこめてそう口にした。

「女神レスフレーゼの拘束に失敗し、『終焉の地』開放のための女神法印の奪取に失敗。序列二位、そして序列四位。自ら天界侵攻に名乗りを上げてそのザマか」

「なに、すべて順風満帆。逃したもの以上に得るものは大きかった」

そう答えたのは背筋の曲がった白髪の老人。手に握るのは剣ではなく身体を支える杖。その身にまとうのは黒の戦闘衣ではなく、白の研究服。

序列四位『狂刃』ナーフレス。

屈強な騎士たちが集う王立七十二階位特務騎士団において、ただ一人だけ存在する覇都エルメキアの研究機関からの派遣員。

「我らが対天使装甲が、現時点で天使たちに通用する水準にあることは実証できた。欲をいえば七曜の天使たちと女神レスフレーゼにも試してみたかったが……その機会そのものまで失ったわけではない」

「女神法印は？」

「それもまた想定内。お主が気に掛けておった旅団『再来の騎士』、あの英勇エルライン生き写しの少年剣士とやらもまた天界に現れたと聞いておる」

　カツッ。

　金属製の杖で足下の床を突く学者。

「相変わらずお主の先見の明には恐れ入る。『再来の騎士』もまた、確かに天界に現れ、そして我々と同じく女神の法印を狙っておった」

「――――」

「さてどうする？　あの『碑文の三賢者』の言葉を信じるならば、奴らは竜法印、それに女神法印を手に入れておる。一刻も早く冥界に向かい、魔王法印だけでも確保しておくのが定石と考えるが？」

「不要」

　騎士王の返事はあまりにも早く、そして自信に満ちていた。

「再来の騎士は、いずれ覇都にやってくる」

「それは『碑文の三賢者』の予言によるものかの？」

「……ナーフレス」

　背を向けていた騎士王が、初めて老人へと横顔を向けた。

「私が、アレの言葉に耳を傾けると思うか？」

「これは失敬。確かに、お主には必要のないものじゃったな。覇道の申し子たるお主には、『碑文の三賢者』の予言すら足枷に過ぎぬ。……なんと羨ましき男よ」

　畏敬の念すら抱いたような面持ちで頷く老人。

　再び杖の先端で床をつき、騎士王に対して背を向ける。

「では、拙は研究の続きといこう」

「あの玩具遊びか？」

「そう言ってくれるな。『碑文の三賢者』より与えられた虚構精霊、アレばかりは見事と言うほかないぞ。お主も報告は受けておろう？　あの試作体でさえ五大災――波の将魔と五分以上の戦果を上げた。さらに完成体の稼働も近い」

「……」

「おや、不満か？」

「しょせんは玩具だ。私の求める境地はそこにない」

背を向けたまま返す騎士王。

そして沈黙――

老学者がその場を立ち去り、『天鏡の間』に再び静寂の幕が降りてなお、その絶対覇者は不動を保ち続けていた。

「愚かな」

その口元に憫笑を浮かべ、騎士王は呟いた。

「なぜ誰一人として理解しようとしない。全てが不純物であるということに」

対天使装甲。

対悪魔装甲。

そして虚構精霊。

さらには秘奥たる『碑文の三賢者』。

だが――

それもまた全て、この覇道の王たる男の前では幻影。儚き燭光の灯に等しい。

「そうだろう剣聖シオン？　そしてお前はどうだ、英勇の再来たる騎士よ」

覇都の頂点にして異端者。

運命の気まぐれが生み落とした絶対強者が見据える光景は、ただ一つ。

「来るがいい。時代の選びし者たちよ」

騎士王。

剣聖。

英勇の再来。

覇都エルメキアにて、三人の剣士が集う未来のみなのだから。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

隠者の小部屋・『忘却の書斎』――

空虚な空間。

深海の淀みのごとく、大気の流動の止まった世界。それは秘境にも聖域にも区分されない、まったく異質の空間だった。

その場所で。

『これは驚いたわ。あの虚構精霊が倒されるなんて』

女性の声がこだまする。

知的で大人びた雰囲気を湛えた声音。

『私たちの予言が外れる時が来ようとは……』

『うむ。我らの予言どおりに世界が歩めば、波の将魔との戦闘後、次に虚構精霊が向かう先は剣聖シオンだったはず。それが外れた……やりおったな騎士王』

ざわめく声たち。

大人びた女性の声、落ちついた男性の声、そして初老の老人の声。

三人からなる声が隠者の小部屋に響きわたる。

『しかし面白い。世界が新たな時代の申し子を見いだしたか』

『ようこそ、英勇の姿をもって生まれた少年よ。今ここに我らは新たなる未来――十三日と十三時間後の、お主の訪れを予言するとしよう』

自信に満ちた声で断言する老人の声。

そして、その二の句を継いだのは最初に響いた女性の声だった。

『わたしたちは「碑文の三賢者」。それは知と記録の管理者。レン＝E・マクスウェル。あなたは何を問う？　精霊の起源？　終焉戦争後の英勇の軌跡？　それとも――』

一拍。

くすっ、と吐息を弾ませて、女性の声は淑やかな口調で言葉を続けた。

『これから先の、あなたと世界の未来について？』

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

名もなき孤島。

世にも珍しい大塩湖の中央にうかぶ島の、その海岸沿いで――

「やあ、おかえり夏蕾（カレイ）」

寝ころぶ三頭獣（キマイラ）と一緒に砂浜に寝そべっていた金髪の剣士が、仲間である結界士（エンチャンター）の少女の姿を見つけて手を振ってみせた。

「おかえりじゃないわよ。ったく、暢気（のんき）に昼寝なんかしちゃって」

溜息（ためいき）で返事する夏蕾。

「ところでその、アンタの隣で寝てるでっかい獣はどうしたの？」

「うん。それがようやく仲良くなれてさ」

天の審門の番人であるはずの門の聖獣（キマイラ）。それが今は、すっかりおとなしくなって砂浜で日向（ひなた）ぼっこに興じている。

その鬣（たてがみ）をなでてやりながら――

「ところでガブリエは？」

「あいつなら一足先に覇都（エルメキア）に向かうって言って出かけたわよ。先に情報収集しておきたいことがあるから、あたしたちも早めに来てくれだって」

「そうか。ということはやっぱり？」

「ええ。王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）と出会（でくわ）したわ。天界に昇ってきてたのは二組で、それぞれ序列三位と序列四位が統率してた」

「それは豪勢な布陣（ふじん）だね。それで夏蕾、ケガとかはない？」

「……それ、できれば最初に言ってほしかったわね。まあいいけど」

腰に手をあてて溜息をつく少女。

もちろん夏蕾、そしてガブリエも今回の天界探索（たんさく）では負傷一つない。

何かあれば真っ先に夏蕾の方から告（つ）げているし、シオンの暢気な対応もそれをよく理解しているからこそだ。

「あいつら、対天使専用の装甲（そうこう）を用意してたわ」

「『忘れられた技術（オーパーツ）』か。なるほど、それでガブリエが先に覇都（はと）で情報収集したいって話につながるわけだ」

ゆっくりと身を起こす金髪の剣士。

「しょうがない。僕たちも覇都に向かうとしよう。このままアレを放置しておくのも気が進まないし」

「あれ？　珍しく嫌そうね」

「こればっかりは騎士王の思惑どおりかなと思ってさ」

苦笑で返すシオン。

のんびり微睡んでいる門の聖獣へと、別れの挨拶がわりに手をふって。

「だけど楽しみもある。そっちに期待かな」

「それは？」

「いよいよ、あの英勇の再来に会える。そんな気がするんだ」

遙かなる海の先を見つめ――

若き最高位剣士は、嬉しそうに声を弾ませた。

Epilogue ｜ 導かれし世界

アルカナ大陸。

聖地カナン・本霊宮（ほんれいきゅう）——

聖地巡礼の中心地にあたる大聖堂の別館であり、旅団（パーティ）『カナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）』にとっての本拠地でもある。

「あはは、ごめんごめん。ウチの魅亞（ミア）が興奮しちゃったみたいで」

「興奮とかっていう次元じゃなかったけど……」

「いやー。アタシてっきり、また現魔（おとうと）Eがだらしないせいで五大災（ごだいさい）が反旗（はんき）を翻（ひるがえ）したのかなって思ってたの。でも魅亞はああみえて忠誠心（ちゅうせいしん）ていうか義理堅（ぎりがた）い部分はあるから、変だなとは感じてたのよ」

賓客室（ひんきゃく）のベッドにあぐら座りで腰かけるエリーゼ。

「なるほどね。アタシの感じてた『不気味な気配』と一足先に戦って、それを追いかけて聖地まで来てたんだ。それで偶然レンとも出会（でくわ）したもんだから、アイツきっと嬉（うれ）しくなっちゃったんだろうね」

「こっちは大あわてだったんだからな。まったく……」

ソファーにぐったりともたれかかり、レンはぼんやりと天井を見上げた。

波の将魔・魅亞。

後から聞いたエリーゼの話では、あの将魔は悪魔の中でも特に武人としての気性が強く、義理堅さを持ち合わせている反面、未知の強者と出会うと挑まずにはいられない性格とのことらしい。

「本気で襲ってきたぞアイツ」

「だってそういう奴（やつ）だもん。でも良かったじゃない。レンも、あと人間の聖女……ええと」

「エリエス？」

「ああそうそう。あの娘も無事だったんでしょ」

「そうでなきゃ困るよ」

エリエスに関しては、波の将魔との戦闘以上に、あの光状の高位存在から受けた熱線の負傷が激しかった。

……エリエスは、見た目だけはまったく外傷がなかった。

……身体の内側だけを破壊し尽くす光の攻撃、か。

レンも初めて見る損傷。それでも命に支障がなかったのは、彼女の部下たちの速やかな応急処置と、そして何より――

「ありがとうフィア先輩。さすがだったよ」

「大したことはしていませんわ」

窓際の椅子に腰かけるフィアが笑顔で首を振ってみせる。

大天使の治癒法術。

傍で見ていたタイラスや、治癒士である最高幹部ネビリムすら、その法術を前に驚愕の表情を見せていた光景は記憶に新しい。

「だが、どうするレン？」

賓客室の壁によりかかって腕組みするキリシェ。

静かに一連の会話を聞いていた彼女が、その鮮やかな緑玉色の瞳で自分を見つめてきていた。

「お前を襲った正体不明の発光体とやら。手がかりはあるのか？」

「それ、俺も正直悩んでる……」

祈りの間に突如として降臨し、自分たちを襲った怪物。

その正体はいまだ不明。

アレが世界に一体だけならばまだいい。だがもしも、この世界にまだ無数に存在するとすれば、この先、世界録を巡る旅の中でも最大級の脅威となりえるのは間違いない。

……それとも。

……アイツもまた、世界録に関係する『何か』なのか？

次の目的地。

順当に選ぶのであれば冥界が第一候補になっていた。

しかし――

「どうする？　冥界で魔王法印を手に入れるのを優先してもいいが、先にソイツの正体を掴むための調査でもかまわんぞ。わたしも、お前を襲った相手というのは気になるからな」

「そりゃあ調査したいよ。だけどその手がかりが……」

手がかりがない。

そうレンが言いかけた矢先。

「覇都エルメキアに、何かがあるわ」

　賓客室の扉が、前触れなく開かれた。

「エリエス!?　もう起きて大丈夫なのか!?」

　開いた扉の先に立っていたのは、瑠璃色の髪の少女だった。

　聖女としての金色の法衣を羽織った姿は、外見だけならば昨日の激戦前と何一つ変わらないようにも見える。

「ケガは……」

「問題ないわ。もう歩けるし、日常の祈りにも差し支えないくらい」

　最高幹部であろう三人の女性を従える聖女。

　さらにその奥には、武闘家タイラスや法術士プルミエールの姿も覗える。

「むしろ私の体調の回復より、優先したいことがあるの」

「優先？」

「コレよ」

　法衣の袖から小さな石のようなものを取り出し、それを放るエリエス。

　宙をわたって、それがレンの手元に収まる。

　――黒の石。

「石？　黒曜石みたいだけど」

「黒水晶。覇都エルメキアの鉱山でしか採れない稀少鉱物よ。王立七十二階位特務騎士団の連中が装備してる黒の戦闘衣にも使われてる。見覚えあるでしょ？」

　言われてみれば。手元の宝石が放つ鈍い輝きは、あの旅団の剣士たちが身にまとう戦闘衣の色に酷似している。

「これが何か……」

「ネビリムが見つけたの。『祈りの間』にこの黒水晶の破片が落ちてたわ」

「え!?　ちょっと待った。それって――」

「そう。わたしたちを襲った例の発光体。あいつの身体の中に入ってた。あなたがアレを倒した時に、この石もまた砕けて散乱したんでしょうね」

　聖女の言葉。

　その直後にレンが思い浮かべたのは、天界で交わしたある会話だ。

〝女神の法印は預けておく。覇都エルメキアにて待つぞ、英勇の再来よ〟

外法騎士カサディン。

王立七十二階位特務騎士団の幹部である騎士の言葉。

思い起こせば、まさに今、あの男が残した言葉のとおりになりつつある。

――正体不明の光の高位存在。

外法騎士の言葉が正しいとすれば、あの襲撃者と覇都エルメキアとが関わっている可能性は決して低くない。

「エリエスは？」

「当然行くわ。聖女としてでなく、カナン巡礼聖教船の統率者としてね。覇都で調べたいことも山ほどあるから」

強い意志を秘めた瞳でうなずく少女。

その答えを前にして。

「……だってさ？」

「どうしますかレン。訪れるための動機はどうであれ、覇都もまた見聞を広めるには良い都市です。なにしろ世界最大の都市国家ですからね」

交互に訊いてくるエリーゼとフィア。

最後に――

「お前が決めろ、レン」

窓枠に手をかけたキリシェ。

すべての竜の頂点に立つ少女は、勝ち気な笑みで言葉を続けた。

「なに、構わんぞ。ここのところわたしも船酔いやら何やらで鬱憤が溜まっていたからな。そろそろ一暴れしたいと思っていたところだ」

あとがき

本書を手にとっていただき、ありがとうございます。細音（ささね）です。

『世界の終わりの世界録（アンコール）』も3巻目。そろそろ物語も本格的に動き始めたところで、あらためて、気を引き締めなおして頑張りたいと思います。

さて肝心の内容はと言うと、今回の秘境（テーマ）は「天界」。

桃源郷（とうげんきょう）に楽園、理想郷……呼び方は様々ですが、今回はそんな天使たちの園（その）にスポットライトを当ててみました。と言っても、レンが目にしたのは天界のごく一部。熾天（レスフレーゼ）の女神本人を含め、機会があればまだまだ書きたいエピソードの詰まった場所です。

一方で、舞台は天界のさらに先へ。

レンの強敵（ボス）バトルでは初となる共闘。

レンと一緒に戦った仲間と、そして敵対した相手については、あとがきでは控えますが、「偽英勇（えいゆう）」と呼ばれた少年にとって大きな精神面の成長となる戦いの一つになりますので、どうか見守っていただければ幸いです。

ここで第3巻の御礼を。今回も本の完成にあたってご尽力くださったMF文庫J編集部各位、とりわけ編集長そして担当N様、ありがとうございます！

また、フィアの素敵なカバーイラストを描いてくださったふゆの春秋（はるあき）先生。

何より、この本を手にとってくださった全（すべ）ての方へ。

温かい応援いつもありがとうございます。おかげさまで、『世界の終わりの世界録（アンコール）』、コミカライズが決定しました！

詳細などはまた順次お知らせしたいです。細音自身、すごく楽しみ。

（細音のツイッター：https://twitter.com/sazanek 等でも、極力こまめにお知らせします）

そして、最後に予告を。

『世界録（アンコール）』4巻は、おそらく6月頃かと思います。

世界最大の都市・覇都（はと）エルメキアを舞台に――

様々な人物たちとその思惑（おもわく）が介入し、衝突しあう旅団大争乱編。

さらには三大姫（さんだいひ）たちの無邪気で可愛（かわい）い（？）大暴れと、滅多（めった）に見せない真面目（まじめ）な戦い。

そして世界の先見者たちが固唾を呑（の）んで見守る『偽英勇（レン）VS騎士（ゼルブライト）』の行方など、盛りだくさんの展

開になる予定です。

ここからが本番の始まり。今年一年も『世界録（アンコール）』を頑張っていきたいと思いますので、引き続き応援していただければ嬉（うれ）しいです。

それでは、また、『世界の終わりの世界録（アンコール）』4巻でお会いできますように。

細音　啓（けい）

著者

細音啓（さざね・けい）

ご声援、いつもありがとうございます。

『世界録〈アンコール〉』も早くも3巻目。

これからも楽しんでもらえる作品になるよう、今年一年間、全力で頑張りたいです。

イラスト

ふゆの春秋（ふゆの・はるあき）

イラストレーター。ライトノベルをはじめ、多数の作品の挿絵を手がける。近作に『知らない映画のサントラを聴く』（新潮文庫nex）など。

世界の終わりの世界録（アンコール）

3:熾天の女神

2015年2月28日発行　ver.1.0

著者　細音啓

発行者　三坂泰二

編集長　万木壮

発行所　株式会社KADOKAWA

〒102-8177

東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　メディアファクトリー

0570-002-001（カスタマーサポートセンター）

年末年始を除く平日10:00～18:00まで

©Kei Sazane 2015

http://www.kadokawa.co.jp/

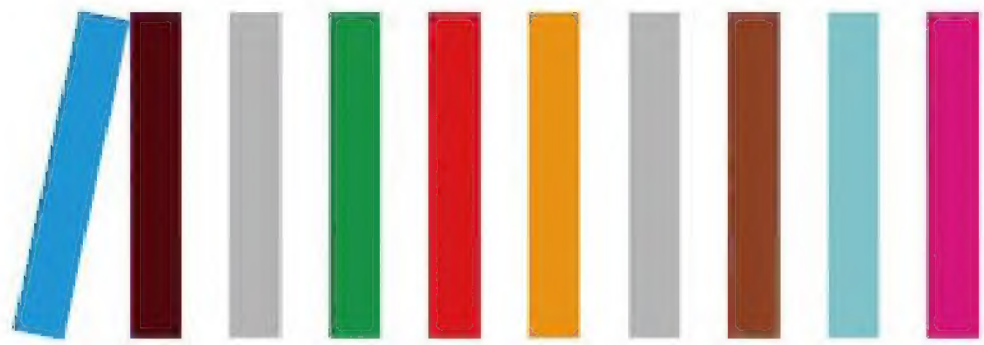
※無断で複製・複写・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

MF文庫J

世界の終わりの世界録　3:熾天の女神

発行日　2015年2月28日　初版第一刷発行



BOOK☆WALKER